Li-tweet 2014/winter/No.10

特集 時間に触れる瞬間

Pさん　日居月諸　うさぎ イコ

深街ゆか　Naokona Jellyfish

6　白熊　misty　る　常磐誠

目次

『Li—tweet』（２０１４ 冬号）

・特集「時間に触れる瞬間」

巻頭アンケート「あなたが最近時間を感じた瞬間は？」……4

エッセイ「言葉にすれば、自然と音は」Ｐさん……13

小説「かたうでがり」日居月諸……26

小説「その手に消えた」崎本智（６）……46

※うさぎさん作、小説「インタラクティブ」は、体裁の都合上、pdfのみとしました。

・自由投稿

小説「キョウゲン」うさぎ……74
小説「In rhythm――断章」光枝初郎……82
詩「アットマーク」新嶋樹……97
詩「pentimento」Naokona Jellyfish……110
詩「真昼の濁水」深街ゆか……113
小説「小人の夢　他」白熊……116

・連載

小説「マイ・フーリッシュ・ハート　第二回」るる……133
小説「瞳　子　第二回」常磐　誠……140
評論「暴力論　第二回」光枝初郎……170

＊「書かれなかった寓話」「白い家」「合同教会の人びと」「藍よりも青く」は休載です。

・記録……184
・編集後記……190

特集

「時間に触れる瞬間」

巻頭文

Pさん

ふと気付くと友人と何度も何周もしたゲームが、胸の熱さを誘わずひたすら惰性によって続けていると悟り、カーテンから覗く窓の外が完全に暮れている。

ふと気付くと堂を何度も巡っていて、目的は何か、なんでこんなところにいるのか見失うが、それがセンター試験に行く途上で、もう時間はとうに過ぎていたと知って慄然とする。

ふと気付くと家の内に見慣れぬ家具が勢ぞろいしていて、どれもがいきなり生活の匂いを漂わせている、しかし、それほど仲が良かったものだろうか、付かず離れずを繰り返していたあの人が、と振り返るとしっとりと馴染んだ顔が綻んでいる。

ふと気付くと苛烈な夏の昼光を浴びながらベンチに座り首垂れていて、ブリーフケースの中身の書類の価値という価値、意味という意味が全て崩落して死骸のような軽

さになっているのを発見する。

ふと気付くとイチョウ並木が黄色く鮮やかな一面の積層をなし、その中に埋没している。

時間という視えないはずの流れが、しかし確実に私たちを捕える瞬間がある。そんな感覚に、言葉とあるていど懇意である私たちは、わざわざそれと指し示さないまでに慣れ親しんでいるのではないか。それを転がし回しながら少しずつ別のものに捏ね上げるように、『時間』という、形象のないものに触知してみようではないか。

巻頭アンケート「あなたが最近時間を感じた瞬間は？」

長く使ってきたペンの筆跡がふと掠れるように、また街路を渡っている時思わぬ方向から赤光が眼をどぎつく差し貫くように、ふと時間というものがわが身に舞い込んで来る時がある。

そんな「時」を、みなさんに教えていただくという主旨でアンケートを採りました。

掲載順はアンケートをもらった順（一部変更アリ）

6さん

真夜中に母が自分を生んだ年齢＝現在の自分の年齢に気が付いたとき、父がもう長くないことを同時期に知り、父と母のことなど何も知らなかったし、連れていってもらった場所の大半も忘れていて、それでも一人でこんな夜を過ごせるなんて子供の頃には想像もしなかったと思って、どこか過去に遡るような心地で目を閉じるとき

Pさん

近所の建物が生長し腐れる植物みたいに日々うごめいて感じられた時

Rain坊さん

好きなキャラの年齢を、気が付いたら自分が越していた時

深街ゆかさん

一ヵ月後くらいに予定してたことが目前に迫ってきてだるくなってきた時

うさぎさん

日曜日の２５時

Rain 坊さん

笑点↓サザエさん↓テレビの試験電波の音、を聞いた時

イコさん

東京に出て混雑する駅の構内をひとり歩いていますと人がみんな別の顔をしてでたらめな方向へ線を引くように歩いていくのが分かりまして、今歩いている自分も同じだなあと思ったら時間はこの駅にもあの駅にもいくつもいくつもいくつもあるんだろうなと思いましたのでそんな時

Akira さん

インターステラーを見たとき

Rain 坊さん

近所の子供が、気が付いたらもう小学生になっていた時

Pさん

近所の小学女児だった子が、エナメルのバッグを持って出てきてこちらを腐ったものを見るような目で見てきた時

Rain坊さん

二度寝して、時計を見た時

るさん

今回提出した小説を書いていた時

mistyさん

家から離れた場所でまだ帰れそうもないのに、スマートフォンの充電が切れた時

日居さん

最近時間を感じた瞬間、というお題を見せられて以来いろいろと考えをめぐらせてみたのですが、生まれつき観念的なものに対する嗅覚がにぶいためか浮かんでくるものがさっぱりなく、それどころか、その日暮らしに生きているもので

すから未来に対する見通しはいわずもがな、過去に対するペーソスめいたものも概念によって把握できたことはあるとはいえ実感として感じ取れた経験はなく、あまつさえ経験の積み重ねは一通り切り離しながら生きているのではないかという疑問に行き当たってしまって、じゃあ何があるかというと現在しかない、時間というものはひとまず過去と現在と未来を総合した末に成り立っているものでしょうから、となると自分には時間というものが存在しないのではないか、という呆れかえる認識に至ってしまいました。

かといって世間では存在しているというのが常識になっているのだから、自分にも存在していると見積もるしかないのだろうということで、とにかく身近な感覚を書きとってみようと思うのですが、今年は一年がひどく長く感じて仕方がありません。雪がすこぶる降った冬から暖かくなるまで日数は要らなかった春まではそれまでの一年と変わりない平坦な道行が進んでいたはずですが、フリーターになって以来初めて盆休みが取れる仕事を選び、そこまではいくら無理をしようと大丈夫だろうと目途をつけながら夏を過ごしていたのですが、そこから計算がおかしくなりました。3年ぶりに実家の墓を参ってこれで一段落しただろうと仙台に戻ってきたはものの、じゃあ、残っている年月はなんのために

過ごすんだ、と疑わしくなったのです。夏がすんなりと終わってくれたのもかえって有難迷惑で、例年なら９月までは暑い日が続き気付けば秋が終わってあっという間に冬が始まっていると続くのでしょうが、今年の９月は一度として真夏日がなかったらしく、珍しく長く涼しい秋を過ごす一方で、むしろ一年の終りに向かうに当たっての見通しの悪さは極まっていきました。先述した、現在しかない、という認識もここから導き出されたもので、どうも私は他所から目途を与えられないと前後の方向感覚がはっきりとしないらしく、この文章は秋が終わってようやく訪れた冬になってから書いているのですが、あちこちから聞こえてくる、今年も短い一年だった、という常套句に触れるたびに彼岸との隔たりを埋めようともがいている有様です。とはいえ、他人によって前後を知らされないと立ち位置がわからないのならば話は簡単で、年が明けるとともに会う人会う人の顔に汚れを落としたような艶やかさが宿ってくれれば、それに合わせて今感じている重みもさっぱりと消えてくれるだろう、と今のところは迎春を頼りにしております。暦の上で年が改まったところでなにかが片付くわけでもないだろうに、それでも改まると言いたいのならそれは何かしらのことをチャラにする逃避心から来る態度なのではないか、と昔は思っていたのですが、所詮は血気に逸った考えであり自分ひとりで重みが背負えるほど時間というものは甘く

ない、ということでしょう。ただ、一方で懸念は残っていて、年が改まっても重みが除かれなかった場合どうすればいいのだ、とも思うのですが……その時は覚悟を決めて、一切を振り捨てて現在だけをひたすら過ごしていくしかないのかもしれません。

アルチュセールは観念論者を始まりと終わりの確かな安全な旅行列車に乗っているようなものだと皮肉りつつ、永遠に終わりのない走行を敢行する列車に乗る人こそ真の唯物論者であり真の哲学者である、ということを述べていましたが、それにあやかれば過去も未来もない、ただ現在だけが足元に伸び続けている日々を過ごしてこそ時間というものは突き止められる、といったところで、ならば時間を感じた瞬間は、と問いかけられた際には、今この時、という月並みな言葉をせめてもの頼りにしながら答えるほかないのでしょう。

Rain坊さん

カラオケで、フロントから内線が掛かってきた時

Pさん

カラオケで、酔いつぶれて仲間に肩を叩かれた時

Rain坊さん

目上の人に怒られている時

小野寺さん

最近時間を感じたとき、というにはあまりにありふれている話で恐縮なんだけれども、今日、高校の時のクラスメートにクラス会で会いその、けっこう可愛らしい子はいまでも昔の面影はかなり残っていたけど、まあ二十年以上もたっているから衝撃的美少女ではなくなっていて保育園の園長になっていた。彼女は潮風の強い教室でプールのあとの濡れた髪をそのままにして足も裸足で私の前の席に座っていたから私は塩素と彼女と混ざった匂いを存分にかがされていたが、カラオケルームで彼女の足に何度か触れ合った時に(ああ隣に座っていたのだ)そのことが嫌でも思い起こされるのだった。そうして昔は何を話しかけても黙って返事をせず、とうとう告白しても相変らずはぐらかされてしまった無口な彼女がいくらか話すようになった(それでも必要最小限のことだけだが)のは

時を感じざるをえなかった。

Rain坊さん

ファミコンのセーブデータが消えてしまった時

Pさん

人生というレールが脱線しかけているのを見た時

Rain坊さん

単位を落とした時／留年した時

……

言葉にすれば、自然と音は

Pさん

ここにいながらにして、ある空間、ある時期のことを空想する、あるいは想い出す。その瞬間、身はわずかに垂直に持ち上がるような心地がする、だろうか。

「ここ」と「ある空間」とに自分の身が所在しているという風に、イメージ出来ないことによるそれは弊害なのだろう。弊害なのだろうか。弊害なのかもしれない。とにかく、横に動くのではなく、垂直移動をイメージすることによって、「その場にいて、かつ違う場にいる」ことを表現する。

その際、表現は自分に向かって行われる。

この桐箪笥は母の嫁入り道具らしい。嫁入り道具というのが何か分からない。どこかから母に渡されたものなのか、その時購入されたものなのか、とにかく、悪魔的表情をした木目が常にこちらを見ている、桐箪笥は、母の婚姻の瞬間と係っている、と

いうのは、確からしい。
ビックリマンチョコの「魔肖ネロ」と、その表情はソックリなのだ。
そもそも「魔肖」って一体なんなのか、これが進化すると「ネロ魔身」になるということは中心的な名前は「ネロ」なのだろうがとにかくあいまいな神話の組み合わせだ。そうでないものなどどこにも存在しない。魔肖ネロはあらゆるエネルギーを吸収していって肥大しどんどん強大になっていく。だがある大きさを境にして自壊が始まり、トカゲみたいなシルエットの邪悪なミッ〇ーみたいな魔肖ネロは骨だけになりネロ魔身になるのだ。
ネロ魔身はブラックホールみたいに自身のエネルギーが爆縮して死ぬ。壮大な宇宙船の骨組みを見るようなネロ魔身の骨がどんどん罅割れて内壊していくのだ。それがカッコよくて子供の頃の自分は鏡で見たら自分の眼が同心円になっているんじゃないかというくらい凝視して没入していた。
ブラックホールは同じく神話だ。なのでどこまでいってもそれは神話と神話の掛け合わせであり、先程も申し上げた通りそうでないものなどどこにもない。
幼少期の魅惑され（す）る視線はわたしに向かって反転され恐怖に変わり桐箪笥に蒸着した。
この中にもう服は入っていない。違う話にしよう。

ここにいながらにして、ある空間、ある時期のことを空想する、あるいは想い出す。その瞬間、身はわずかに垂直に持ち上がるような心地がする、だろうか。

本来ならば限界まで同じ一つ身として空想しなければいけないところを、人間の想像力が空間の可能に限定されているおかげで、垂直に持ち上がるように想像せざるを得ないのだ。

鉛筆を持つ手が強ばる。先日久しぶりに試験と名の付くものを受けて、それは学生時代の苛烈な濃度を含んでおらず、ずいぶん気の抜けたものだったのだが、マークシートを塗り潰すために自前の鉛筆とそれを消すための消しゴムが必要だった。

無限機関などに情熱を燃やして万能感に飢えていた少年期は、鉛筆とボールペンだったら、圧倒的に何度も消して書き直せる鉛筆が最高の筆記具で、ボールペンで文字が書かれることに恐怖すら覚えるくらいだったのだが、ある時を境に反転した。

鉛筆で縦書きを続けていると右掌というか小指側の側面に絶えざる書き取りの疲労と筋肉の強ばりの感覚と、「鉛」という語感と見た目とが相まって、黒というより銀に近い膜が発生した。それが私には確実に「毒の付着」としか思えなかった。

「鉛筆を濃くするために先を舐めて濡らすのは、鉛筆の中に鉛が入っていて毒だからやめた方がいい」と言われていたのはもう一世代前で、自分の世代は「それはデマだ、

鉛筆の芯は鉛ではなく黒鉛で、ダイヤモンドやカーボナイトなど多彩な同素体をもつ炭素の一形態であり、炭素原子が平面上に正六角形の結晶を持つことによって成る。カーボンナノチューブやカーボンナノファイバーなどといったＳＦや理論科学の玩具であったものが現在では実用運営段階に入っている。目覚ましいくらいの科学の精華＝成果だと言わざるを得ないだろう。言わない者はいない。いや、私が言わせない。

教室の一隅で、夕陽を浴びながらひとり鉛筆で化学式や分子構造を何度も何度も清書し、その手をふと止め、鉛筆というこのものも、エタノールやポリスチレンなどとは比べものにならないくらい単純な構造を持った、それこそ電子の密な交換によって結びついたのではない、たんに分子間力（ものが静電気で引き寄せられるのではなく、引力によって引き合わせられるような状態）のみで結合しているようなものではあるが、それでも一つの構造をなしているのだなあと、その先を見つめ、凝視しているうちに本当にその分子が、あり得ないにしても、この眼に見えたような気がして、いつの間にか、その世界に移行している――

黒鉛の分子結合は巨視的に見ても観測できるような結晶ではなく、ナノ単位の柱や薄片が折り重なるようにして成っている。一つ一つの単位が平面であるので、その面としての結びつきはそこそこ強力なのであるが面と面はほぼ重なっているだけなの

だ。だからその単位で崩れ去り剥離する。
彼が降り立ったところは巨大な、分子千単位の円柱が斜めに傾いでいるところを、不完全に結晶化した瓦礫のような十単位の大小の塊が折り重なって支えている場所だった。彼のイメージの中でそれは暗い線条の細やかな差し渡しであるとともに、ギリシアの建築が崩れる途中でかろうじて均衡を保っているというようなある風景との、同時には提示することのできない合成物だった。
半分醒めている意識で、彼は自分の中にこういう風景を見るほど、自分は詩人というか、なんかそんなような能力を擁している人間だったのかと、意外に思った。
足下を電子である狐が視えない速度で過ぎ去る。私はさっき説明する際〝炭素は分子間力で結びついている〟などと適当なことを言ったけれども、彼はそんなのはまるで不正確であることを知っている。炭素だって、いや炭素こそが、その〝電子の足〟を隣り合った三つの炭素原子と共有している、とんでもなく強い電子的結びつきのある本来は強固な物質なのだ。だからこそ、カーボンナノファイバーやダイヤモンドほどの硬度や強度を持つことが出来る。
分子間力によって結びついているものなんて、それこそ、二酸化炭素が固形化したドライアイスくらいのものだ。
不正確だ！」という風にカウンターとしてよく言われていて、小学生の頃にもそれ

くらいのことは知識として知っていたのだが、それと感覚的理解とは違う。別の話にしよう。

この時間この場所に結びつけられていながら、ほんのわずかにでも違う空間、違う位相のことを思うことは、禁じられていないことだとしても、なんと難しいことだろう。と同時に、なんと軽やかに行われることだろう。

道の説明を頼まれた。自分もずいぶんと遠出をしてきたから、この土地の詳しいことは分からないが、今訊かれている当の駅から来たのだから、それくらいは説明できる。

「今、われわれの右に歩道がありますね。左側は路側帯だけで、向こうに信号が見えますね。信号は、割と低い位置にありますね。あなたなら、手が届くのではないですか。

信号器の下には交番がありますね。ただ、中にいるはずの巡査は今巡回中であると、二等辺三角形を底辺とした三角柱の形に折った厚紙を立てて、先ほど見たところによるとそう書いてあったのですね、だからあなたがあの交番の前に行って、その前にちょっと信号に触れるか触れないか、ただ、信号もなかなかよく考えると高い位置に据えてあるから、よっぽど背を伸ばさない限り、難しいのではないかと思いますが、と

にかく触れて、その後で巡査に尋ねよう、と仮に思っているのだとしたら、その目的は達することができないであろうと、先に釘を刺しておきます。

この道は片道二車線になっていますね。制限速度は五十キロですから、われわれから見て左側にある、車道に出るのは危ないですね。最近では、車幅に余裕のある道には、自転車専用レーンが設けられているところがあります。あれはまず、青い塗料を塗りつけてから、ガスバーナーで焼くことによって、標識を固めているのですね。塗料を塗る係りと、バーナーを持っている係りの人とは、およそ十メートルくらいの距離を保ちながら、地道に作業を進めていたのですが、東京とはいえ少し西よりの、都心部からは外れていると言わざるを得ないこのあたりの地域では、まだ設けられていないですね。

路肩が剥き出しになっています。アスファルトが土の方に崩れるままになっていて、土には、およそ膝くらいの高さはあろうかと思われる、枯れた雑草が生えていて、左側の車道は歩きにくいでしょう。歩きにくいと思います。歩きますか？　獣道と呼ばれる、なにものかが踏み倒していった跡なども特にないのだから、おすすめしないです」

「はーあ？」

「その信号を右折して真っ直ぐ行ったところです」

アジア人に説明を終えてから、そのあとさらに少し右折しなかったら、駅が完全に見えたことにはならないということに気が付いて、追いかけて訂正しようと思ったが、別の話にしよう。

部屋の一隅に身を横たえているとき、昨日も、一昨日も、その前もずっとそこに身を横たえていた、この場所を棺桶のように想像し、威厳のある線対称の多角形を底辺とした角柱に空間を、想像の中で区切る。

天井に定点カメラを設置し、毎日同じ時刻に映像を切り取ると、まるで私がそこにいながらにして伸び広がるように見えるだろう。

今はちょうど、想像している誰かが最初に想定した棺桶のサイズにピッタリ一致したところで、まだ映像は完全には現像されておらず、黒く赤い光に満ちた現像室に洗濯バサミで吊されているところだ。

それが昨日と、一昨日と、その前の三日間のもので、まだ当時はポラロイドカメラくらいしか、その場で画像を確認できる媒体はなかった。

高級品の代名詞の一つであったポラロイドカメラが高級でなくなって、岡村隆史がCMをやっていた「ヒッパレー」など、小型ポラロイドカメラが女子高生など学生をメインターゲットに据えて開発、販売され始めたのは、自分が中学生くらいの頃だ。

そのＣＭに、矢部浩之も出演していたかもしれない。もう一人、女性がいたかもしれない。女性がその場にいることによって、女子高生などは、等身大の自分（プラスアルファ、つまり自分より少し派手好きであか抜けている、背伸びした自分）があたかもそこにいるように感情移入することができ、「ヒッパレーを使って、友達と写真を撮りあって、楽しい自分」を、軽々と想像することが可能になるのだ。

三人とも、シャンペングラスを持っていたかもしれない。シャンペングラスは、細長い。底から沸き上がる泡を陶然と見つめ続けているだけで軽く六時間は過ごせるのであろうが、ヒッパレーを持つ三人は、そんな遑も作らずに、騒いでいる途中なのだろう、それどころか、この口の狭く細長いフルートグラスから、シャンペンをこぼしかねない勢いで動き回り、仲間をかき集めていることだろう。

そのような瞬間を見事に活写したＣＭ。別の話にしよう。

現在作曲された中で一番長い曲を演奏し終わるのに千年かかる。二千年に演奏が開始されて三千年に終了するのだという。その曲だったか、他の七百年近くかかる曲だったかは失念したが、どちらかがパイプオルガンで演奏されて、どちらかが鐘で演奏されている。

鐘の鳴る音はいつ終了するのか。残響を止めずに耳を近づけていると優に数分間は

鳴り続けていて、キリがない、鐘に触れないのに音が減衰するのは振動するとき空気抵抗があるからなのだが、純粋に空気抵抗の力によって減衰するのは鐘が理想状態にあるときであって、何らかの形で吊さなければならないその紐か糸かの接点が、ほとんどの響きを吸収してしまうのだ。

鐘を鎮かに止めるのも難しい。チャイニーズゴング、銅鑼、別名をタム・タムというが（何でタム・タムというのか知らないが、ドラムスの部品の中にあるトム・トムと非常に紛らわしい）の残響を止めるときの正攻法は「撥で表面をグルグル回しながら擦る」で、銅鑼の撥はたいがい異常に大きくフワフワしていて、撥界の中でも巨大な部類に入るバス・ドラムを以てしても、いざそれで打ち鳴らすと「コーン」という堅い音がするほどで、銅鑼専用の撥はもっと表面がフワフワしていてそして重い、打ち鳴らすときに慣性の法則を計算していなければ、確実にタイミングを外すほどだ。

ところが吹奏楽部の下品な女子部員の先輩はケツを当てて音を消していた。練習中に、本番と同じ音の消し方をする必要も特にないし、むしろ途中で曲を止めるときに一緒に止まってくれないと邪魔ですらある。

下品な女子部員の先輩は受験を理由に、他の同学年の部員と比べても減多にこの部室に来なくなったのだが、「この曲懐かしいからやりたい」と言って、練習だけ飛び入り参加して、鮮やかな腕前を発揮した。銅鑼は本来その曲の中でほとんど出番がなく、

バス・ドラムと兼ね役で演奏することも出来るように、作曲家も計算して作曲しているのだが、それでも飛び入りでその人が突然舞い込んできても、曲の流れというかバーカッション・パート全体の動線に一つの乱れもなくこなしている様は、その３＋１人が一つの有機体であるかのようだった。その曲全体が彼らにとって一つの庭のようなもので、真剣に、しかし余裕を持って稼働しているその様を私たちはアゴを外しながら眺めているしかなかった。別の話にしよう。

音は消え去る。音を記述しようとする試みは全て失敗に終わった。音を生産することも出来ない。完全に設計図を元にするのだとしたら、そうだ。

コンピュータ内に音を生成させるブラックボックスを作ったとしても、ある時それを起動させるのは、血管の浮き出た三十代後半の人間の手指により、しかもブラックボックスを作成するときに、ひとの迷いが、その匂いが混入する。

ウーファーに凝っている友人が、魂の流れのようなＴＢ-３０３の響きわたる曲を紹介してくれて、それを持って帰って聞くのだが、その揺らぎは我が家の音響に移植されるにいたってごっそりと抜け落ちてしまった。

仮にその曲が１９２ｋｂｐｓであろうと、３２０ｋｂｐｓであろうと、４４．１ｋＨｚが艶々した表面をさらしていようと、ＤＶＤオーディオであろうと、肝心のスピ

ーカーがこれでは、再現性もへったくれも、あったものじゃない。
ただその友人にしてからが、ウーファーというのはヤフーオークションで中古で買い取ったもので、しかもスピーカーのコーンの部分が剥き出しで、いわゆる「スピーカー」の箱には収まっていない。
「ひたすらパワフルであれ」というそのウーファーが、２０Ｈｚ以下の低音を、どれだけ強調するのか知らないが、そしてそれが魂の源泉であるのか知らないけれども、それも、再現するという指向からは外れている。
一方で、レトロな電子ベースのＴＢ－３０３を自在に操るそのミュージシャンの内面は、どうなっているだろうか。ＴＢ－３０３が「正しく再生される音響」など、どこにも存在しない。それは原初から半径６．３ミリ口径の３極フォーンプラグが伸びているだけで、その電圧変化がその先どうなろうが、ＴＢ－３０３は知らない、ただ、それが差し込まれた先を、奔放に打ち鳴らす。
ウーファーは、その場で演奏される。魂は、コーンの薄膜の上にゆらぎ立つ。だって、他のどこにも存在するとは言えないのだから。
音は、たしかに存在したという場所が、どこにもない。

かつて分岐点があった。それとはわからない、空間には展開し切れない分岐点が。

その一方では、私はボンゴを股間に挟み、軽快に打ち鳴らしている。オーケストラなどではスタンドに固定したりもするが、本式の構えは股間だ。私は常に膝丈か、それより低い椅子に座り、両膝で二つの太鼓を挟むようにしている。

想像の中で、私は雑にペンキで色を塗った、漆喰だけで塗り固めたような住居の壁を背に、そこに座っていて、目の前は礫というか小石と、くるぶし以上の高さにならないパイナップルの葉みたいな雑草が、まばらにあるだけの荒野が広がっている。音を聞きつけて、仲間が数人だけ、何時というのも気にせずに、寄ってくる。

分岐のもう一方では、どこにも置き場がないので、仕方なく股間にポメラを構えて、言葉を打ち鳴らしている。

（了）

かたうでがり

日居月諸

椅子に座った女はさっき受け取ったばかりの片腕を胸に抱き寄せ、掌で肘のあたりを撫で、頬に付け根を当て、愛おしむように見入っていた。薄明るい部屋の中で明るさを目いっぱいに取りこんだ白い肌に包まれては、黄色く毛の生え揃った片腕は生気を失って一通り腐ってしまったかのように見え、今まで私の左肩にぶらさがっていたものというよりも、女がかつて失った左腕を今もなお大切に保管しているといった方がふさわしい。腐乱しているからといって必ずしも愛想が尽きるわけではなく、変わらず艶やかであり続ける白い肌が外された腕によって引き立つのであるから、ひとしお愛着は増す。二度と時間を刻まない形見と、今なお時間を刻み続ける自らの体、本来ならば美しくあり続けるのは前者だろうに、実際に美しいのは後者である。所詮錯覚に等しい転倒ではあるが、それでもわずかばかり永遠を我が物と出来るのならば、それを余すことなく堪能しようではないか……そうした忖度はこちらの邪推にしか

過ぎないが、いずれにせよ邪な思いを抱いているのでなければ、お世辞にも美しいとはいえない片腕に愛しさは湧かないはずだろう。

「代わりが務まるのかい、そんな汚い腕が」

やわらかい弧を描いた顎が上がって、青みをおびた瞳がのぞく。

「務まりますよ、十分に」

そう言いながら右手は掌のあたりを撫ではじめる。さっきまでその手が撫でていた肘が、まだ残像が残っているのだろうか、白くきらめいているように見えた。しかし、まもなく掌も輪郭をくっきりと浮かばせはじめ、中途半端に太かった指も、女の腹の上でほっそりと伸びはじめた。そこで私は、先程までの邪推が自らの汚れた心の投影に過ぎなかったとわかった。

「そうだったね、君は物をやさしく扱ってくれるんだった」

左肩にはまだ重さとともに、細い手の暖かい感触が残っている。女は迎え入れてまもなく、裸になった私の左肩を撫で、首のあたりから二の腕のあたりまで数回往復させると、痛みもないままあっという間に腕を引き取ってしまった。

その時と同じ仕草が今度はこちらの左肩ではなく、女の胸の中で繰り返されている。そして醜かった腕はすっかり肌へと溶けこみ、いよいよ空っぽだった左肩にあてがわれた。やや右肩が持ち上がってから、黒く長い髪が揺れるとともに均等に戻る。

「いかがでしょうか？」
立ち上がってから、左に首をかしげこちらをのぞきこんでくる。緑の血管が浮き上がった首筋から香水の粘つく匂いを発してまもなく、これまでの自分の癖が現在の恰好には似つかわしくないと気付いたのか、改めて右に首をかしげ、接合したばかりの左腕を見せてきた。その拍子に、乳房が少し揺れる。
「綺麗だよ、とてもじゃないが自分の左腕だったものとは思えない」
思わず右手を伸ばして肘のあたりをさすると、胸が少しふるえたので、ひっこめざるを得なかった。見上げてくる顔が、つらそうに微笑んだ。
「ごめんなさい、まだ馴染んでいないから……」
「どれくらいかかるの？」
「二三日あれば。ただ、馴染んだ頃にはお返ししなければならないでしょうけれど」
「しばらく君のものにすればいい。なんなら、永遠に」
永遠、という我ながら突拍子もない言葉を使うと、苦笑された。とはいえ、半分くらいは真剣な思いからくる言葉だ。女の助けになるというのもさることながら、自らの分身が美しく生まれ変わるというのは悪い思いはしない。いっそ、このまま腕が永遠に女のものであり続けたとして、いつかは美しさの覆いが剥がれて、かつての黄色く醜かった腕へと戻らないかどうかが心配なくらいだった。

「実際のところ、帰ってこなかった人もいるんだろう？」
「いましたけれど、結局腕は元の所に戻ってしまうんです。借り物は借り物ですから」
ということは、この腕とて永遠に女のものであるわけではないのだ。残念な思いがした。
「まあ、こっちの気が変わるまでは自由にするといいさ」
「駄目ですよ、あなたのものなのですから大切にしなければいけません」
そう咎めて左の二の腕のあたりをさすったかと思うと、女は脱いでいた服に手をかけ着替えはじめる。薄い青のドルマンニットをかぶり、その上から深い青のショールを羽織り、紫のロングスカートであらゆる肌を覆う様子は、左腕のなかった時と何ら変わりなかった。背筋を伸ばしてすらりと立っている姿からはふくらみがかくれ、未だ直らない右手で左腰にかかるショールをつまむ癖もあいまって肉体を細く細く切り詰めているように見え、夜の草原にひっそりと咲くヴェロニカを思わせた。
ヴェロニカ、静かで淫らな女。貞淑にふるまうのはあくまでも寄りつく男を振り払うためであって、想い人を見つめる際は少しの拒絶も見せないどころか相手の拒絶を許さないほど獰猛になり、その手に持ったヴェールで自らの胸の中に取り込んで二度と離さない、孤独を物ともせず、それでいて寂しさをかかえこむ女。
「左肩が重いんだか軽いんだかわからない感覚も、じきに直るのかな？」

着替えるのを手伝ってもらいながら言った。ワイシャツの袖を肩にひっかける時、わかっていても思わず体をかたむけて腕を通そうとしてしまうので、苦労させた。
「人それぞれですけれど、じきに直ります」
一通りの着替えを済ませてから、女はまた暖かい手を左肩に寄せてくれた。何度も往復される手はこれまでほとんど意識することのなかった左肩の在り方を告げてくれるとともに、そこから下へとぽっかりと広がっている空白まで自分のものとするかのように感じられた。
「他人にバレてしまったらどうしよう？」
「私と同じように背筋を伸ばしていてください。そうすれば、きっと皆気にも留めないでいてくれますから。それに、どこかしら後ろめたいことがあれば、それを隠そうとする勢いで、背筋は伸びる。むしろ、後ろめたいことがないほうが、あちこちに散らばっている欠落の予兆に気を取られて、背筋はだらしなくなります」
そういうものかな、とのぞきこんでみたら、左右に分かれた前髪が表情を確かにさせている顔がこちらを見上げていて、その拍子に垂れ下がったような瞼が目を細めた拍子にまた垂れ下がり――こちらの疑いをその瞳に沈ませて和ませるような仕草は、最終的に微笑みとなって現れた。
「そういうものですよ」

ただでさえ道が縦横に入り組んでいるこの街に建てこめられたビルの合間合間には小さな店が無数に軒をつらねている。冬の夜の細い雨に降りこめられて濡れたコンクリートは所々から発せられる照明で色とりどりに照らされ、顔を下げて歩く分には表通りよりもにぎやかに映り、時折行きかう通行人の足もまた白く照らされて実体よりもくっきりと水たまりの中を歩いていた。

そこに左腕を失ったばかりの男が映りこむ。傘を差すとやはり空白が目立つので捨てさせた。改めて映りこんだ黒い外套を羽織る姿は、背中から差す光りによって輪郭だけが描きとられ、濃い霧がただよっているように見えるから、左腕の空白は目立っていない。女は自らの身を細く細く切り詰めながら歩いていたが、こちらは肩をいからせて実際よりも体を太く見せることで空白を補っているようだ。

その空白を一対の男女がかすめていく。振りかえったところでは向こうは進んでいく方を向いているだけなので、こちらの姿には気に留めなかったらしい。というよりも、女の右腰へ男の右手が回り、二人の間から傘がのぞく様子からすれば、すっかり暗い部屋に入っている気分になっているか、あるいはその名残を引きずっているといったところだろう。赤いコートをまとった女の左腕は灰色のコートの影に隠れてしまってうかがえず、男の左腕も、存在をひけらかしている右腕に比べればその所在は一

見したところではわからない。それどころか雨の降りこむ中では二つの人間の頭やら足やらの輪郭は定かでなくなり、事細かな物は何もかもが洗い流されてしまって、ただ単に赤と灰の塊がくっつきあって歩いているかのようだった。

それらに比べれば、と表通りを歩きながら、私はさっきまで歩いていた路地の眺めを思い出していた。人の腕はなんと恥を投げ出したようにだらりと垂れ下がっていることだろう。

黄白い明かりに照らされて靄がかかったような道を無数の人が渡り歩いており、その横を通りすがっていく分には腕がないことはむしろ有利に働いた。いつもなら身を右に左に寄せながら進む必要があるが、今日はただ真っ直ぐに歩くだけで済み、その分だけ向こうからやってきてこちらの方を通り抜けていく人々の姿を仔細に見られる。

ひとところに固まった目からすれば、一人で首をうつむかせて歩く姿だったり、仲間内で顔を見合わせながら歩く姿だったりは特別目を惹くものではない。それよりも、皆が皆一様に示している自分の内にふけりこむような姿に似合わず、誰もが腕を持て余して他人の目の前に投げ出している様子が目についた。

たとえば一人で傘を差し歩いている男の右手は、やるべきことがはっきりしている左手にひきかえ、ポケットに入ったり外に出たりを繰りかえして所在なさそうにして

いる。並んで歩いている男女にしても、二人をつないでいる手の睦び合いに似つかわしくなく、もう片方は途方に暮れたように浮かんでいるだけだ。

そういう風に余っている腕達は、自分のために余すところなく使われているもう一方の腕に比べれば、行きかう人々に見せるためだけにある物のように思われた。一人で歩くにせよ、誰かと歩くにせよ、道というのはただ単に行き過ごすためにある、いっそなくしたいくらいの邪魔なものに過ぎない。だからこそ人は道を歩いているとふけりこむような様子を見せ、時間をやり過ごすために安全な自分の内側に逃げ込む。が、一方で道は誰もが使うものであるから人は衆目に晒されなければいけない。もちろん誰もが自らの内側にふけりこんでいるのだから常に注目されるようなことはないが、あまりにも淫らに自己をひけらかすような態度――それこそさっき路地で行き交った抱き合って歩くあの男女のような態度――を取ってはならない。自己にふけりこみつつ、一方で他人を意識していると知らせなければならない、そんな時に腕が投げ出される。公的な場所にあって自己にふけりこむ代償として自分はそれなりの分別を持ち合わせた者であるとの証明を差し出さなくてはならない、だからこそ持て余された腕は一様に恥らったような落ち着かない態度を取るのだろう。

暗い、初めからふけりこむことを許されている場所である路地ではそんな様子は見られない。皆が皆、何をしないでも恥を分かち合っているのだから。

傘を捨てた右腕をだらりと投げ出して歩きながら、振り向かれもせず自己にふけりこむことを許された私は、心おきなく左側にできた空白を愛おしんだ。女が左肩に残してくれたぬくもりは寒い外気に当てられて消え失せようとしてしまっている。しかしそのもどかしさが、かつて左腕があったのに今はないという違和感とまじりあった時、存在と消失の間を揺れ動く感覚が空白をすっかり埋めてしまう。そうした微妙な感覚はおそらく女がずっとかかえ続けてきた物に似ているだろう。

他人の腕を自らの腕に付け替えることのできる女は、しかしながら他人とすべて通わせられるわけではない。左腕がなかったら、誰かに抱かれてもその体を自らの胸の中へ完全に引き寄せることは許されない。左腕があったら、誰かを抱きしめてもその体の胸の中に完全に迎え入れられることは叶わない。

私はその心のありったけを受け止めようと思った。しかし、同じ立場におかれたところで、女がこれまで過ごしてきた時間の積み重ねとの差は埋めがたい。そのもどかしさがまた空白の上に積み重なっていく。そんな風に私は感じられる限りの焦燥感を備給し続けることで、出来る限り女の心に近づこうとした。

そのためには、どうかこの空白が人目に触れないように、と願った。人と違った部分が衆目に晒されて恥を押し付けられることを恐れたのではない。誰かの目にこの空白が晒されることで同情されるのを厭ったのだ。誰かの同情が乗り移った時、私と女

の間の秘密の関係は崩れてしまう。何より、誰彼となく同情を向けられ続けてきただろうに、それでいて寂しさをかかえ続けてきた女を知るには、私もまたその奥底にある寂しさを感じなければいけない。

とはいえ、人中をかきわけて歩くことをやめてはならない。なぜならば女もまたこうして人中を歩くことで片腕を貸してくれる人を、そして空白を受け取ってくれる人を求め続けていたのだから。半端な孤独と半端な合一があふれる流れに揉まれて歩くことで、本当の孤独を知り、その上で本当の合一を求め続けていたのだから。

だから私は地下鉄の入り口に立った時、まだ家路をたどる人の流れが絶えていなかったことに安心した。構内を縦横に行き来する人々はいずれも雨に降られていたさっきまでの様子をだらりと垂れ下げた腕でもって改めて表現しており、そうした情景はいっそ心地よささえ感じさせた。これでまた、女への共感を果たすための時間が延びてくれる。

鼻の奥を抜けていったかと思うと、後になって粘りが残る水気の臭いをかすめていく間に、私は今や自分が一人で歩いていない事を知った。かといって誰と歩いているわけでもなかった。湿った伏し目がちの顔が通りすがっていくだけで、それに合わせて右腕を下ろしていれば誰もこちらを注視しないから、人中を歩いていようと実際は一人で歩いているような快ささえある。そんな全能に近い充足感を覚えつつも、その

片隅にひっかかっては違和感を増し続けている空白に付きまとわれながら私は改札へと向かっていた。この歩行は片腕を貸してくれる人を求めていた足跡をなぞるために為されているに過ぎないが、だからといってその隣にならぶ事は叶わない。それどころか、足跡をなぞるにも後から誰かに背中を押してもらう必要を感じている。歩いているのは私だ。しかし、歩かせてくれているのは女である。

前方にはあの細く細く切り詰められている、人々の視線を負いながらそれでいて一切の憐憫を跳ね除けるためにすらりと伸ばされた背中が見えていて、それに追いすがろうと前のめりになると、それではいけないと襟をついと抑えてくれる温かな手が後ろから延びてくる。そうした具合に前にも後にも気配を感じているのに、その顔が明らかになることはない。せめて隣を歩いてくれて横顔だけでも見せてくれればいいのだが、左肩の先には空白が広がっている。

砂漠ではかえって盲目の方が迷わないんだよ、と友人が教えてくれたことがあった。太陽や星を頼りにしているようではいけない、砂漠に浮かぶ足跡が風と共に去ってしまうのと同様に、遊牧民は太陽や星さえも砂が生み出した一抹の夢だと知っている、ならば何を信じるかって、自分のはずはない、自分ひとりしか頼るものがないとしたら自分の周りをぐるりぐるりと回るだけだ、砂漠を渡るには自分さえも砂とともに流さなければいけない、嵐とともに太陽が溶かされ白夜が訪れあらゆるものが褐色に染

め上げられ、とうとう何も見えなくなって心さえも切り詰められてしまった時、想い人の姿が映るんだ、単に四方を愛する人が囲んでくれるだけになるんだよ、そして砂とともに塵と化し空へとまぎれては、唯一見える愛する人の許へと向かい、その呼吸とともに体の中へ吸いこまれていくのさ。

ホームの片隅に行きついて束の間の孤立に落ちついた私は、先程までとは違い誰にも支えられていない、自分一人で運びきらなければいけない体の重みを感じざるを得なかった。夜の地下鉄のホームはいかに照明を設えていようとぬぐいきれない煤のような暗さがあちこちにくすぶっており、電車を待つ人を覆い、彼らの視線を隠してしまう。陰に隠れてしまった視線はこちらが隠している影と同調するので、立ち止まってしまっては目立つことになり、ここからは人目を避けなければならない。そういう風に孤立を選び取ったら尚更自分というものの邪魔っ気が意識されてきて、同時に、片腕を預けたところで私という存在まで預けきれるわけではないのだと知った。

改めて右手で左肩を撫でた。底冷えのする地下にあってはもう温もりは一片たりとて残っておらず、骨の突っ張ったごつごつした感触だけが味わえる。女もまたこうして自らの左肩を抱き寄せていたことだろう。暗い部屋で一人きりになって、空白と存在を分かつ境目に触れながら、たとえかりそめの仕草に過ぎぬとはいえ、悲しみをまるごとかかえこむように自らの肩を抱いている夜があっただろう。

しかし、あのような丸みをおびた柔らかい肩ならばまだしも、このような骨ばったそっけない肩を愛おしむことができるだろうか？

そうした疑問にかられていると、肩の下に広がっている闇が白く照らされ、ついで風が押し込まれるような轟音が聞こえ、そしてホームに電車が駆けこんできた。人の少ない最後尾に乗りこみ隅の壁に肩を押しつけながら、この時ばかりは早く電車が目的地に着くのを願った。人目が気になるのもさることながら、私の肩はあまりに固く冷たく、孤独を押しつけてくる感触だった。

自らの肉体から迫ってくる圧力を感じながら、きっと女にもまたこういう思いをした夜があったはずだ、と認識は転換された。自らの肉体を愛おしむ時間が積み重なった末にその愛に応えなければならないという強迫観念が生まれ、その圧迫に負けてしまった場合に待っているのは、肉体が大きく映り細部の一点一点まで見せつけられ普段隠れていたはずの醜ささえも露わになるという瞬間であって、その時途端に愛しさは反転し、憎しみへと変わる。そんな経験が女にもまた訪れたことがあったはずだ。自らの肉体を愛おしむという行為は、同時に肉体の醜さを見つめるという行為でもある。そういう風に、女をまるごと知るには、女の過ごした時間の一つ一つをくまなく味わわなければならないのだ。

思えば今年は一年が長い。夏があっさりと終わってしまって、涼しい秋が訪れたか

と思えば、その秋があまりにも長く、雨が降るたびに寒さが訪れたかと思うとまもなく晴れ渡った空が訪れて暖かさは戻ってきてしまう。例年ならば長引いた夏が秋を押し詰めてしまって一気に一年を終わらせるのであって、そうした時間とのズレに苦しんでいるのかもしれないが、一年の重みに見合うだけの出来事は浮かんで来ず心のどこかに何かを置き残しているような忘却感が付きまとっていた。

そんな長い秋の何度目かに降った雨とともにあの女は現れて、出くわしたばかりの男に対し、片腕を貸してくれる気になったら、こちらまでおいでください、と低く心の底に澱となって残るような声でもってすれ違ってきて、ポケットに部屋の住所を書いた紙を忍びこませてきたのだった。

以来、長い一年は一層長くなったが、しかし釣り合いが取れたような平衡感もまた訪れた。普段から漠然と感じていた時間の重みは、女という実体をもった存在となって具現化し、観念的に過ぎなかったかつての在り様に比べればはるかにつかみどころを備えた姿となった。その時点ですでに片腕を預けているようなものだったのかもしれない。日を経るたびに私が抱えている重みは女が抱えている重みと和みあって幾分か背負い込むには楽になっているのを感じた。しかしながら、それにも限度はある。女がずっと味わってきた、誰とも完全には分かち合えない寂しさは彼女自身にしかかえこめないのであって、こちらが出来る世話といえばせめて隣に添ってその重みを

やわらげてやるくらいのものだ。それと同様に、私が感じている重みも自分でしか背負えないのであって、女に助けられるのはわずかであり、それからは自分ひとりで歩かなければならない。

電車が目的駅へとつくと、扉が開いた先に人はおらず、乗りこんだ駅と変わりない暗さがホームを覆っていた。私はこれからの残り少ない年明けまでの時間を、女が少しでも軽くしてくれた体でもって一歩一歩なしくずしにしながら過ごしていかなければならない。女の過ごしてきた時間を追体験するように、まずは自分の体の重みを時間をかけてじっくりと知らなければならない。そして自分の重みを残りなく受け止めることができた時、初めて私は女の重みを受け止めるための腕を手に入れることができるだろう。

家までの道に雨は降っておらず、車を使わず歩いてたどることにした。ゆるやかな上り坂と下り坂が繰り返される郊外の道にあっては、平坦な街中を歩くのに比べ、自由にならぬ体の重みがのしかかってくるとともに、左腕の不在もまた強く意識されてきた。

店の明かりは落ち、車通りの賑やかさも失せてしまっていて、あるものと言えばほ

んのりと露のように宿っている街灯の薄明りくらいだ。暗がりの中で道行の険しさと易しさを測るために焦がれるように見やっていると、さっき薄明るい部屋の中で見たばかりの女の白い肌が思い出されてくる。

今頃女はあの部屋の明かりを落として眠りについているのだろうか。暗闇の中で自らの肌が放つ仄明るさを眺めつつ、いつもよりその白さが濃いことを見取って、久しぶりに身についた重みを感じながら横になっているのだろうか。だとしたら、その重みがきっかけとなって夢を見るに違いない。見るのはまだ自らの左腕が失われていなかった頃の思い出だろうか、それとも、左腕を貸してくれた男の……。

ようやくの心地で坂を上りきり街灯の下にたどりつくと、黒い体は暗がりにいた時よりもことに濃く映り、私は預けたばかりの腕が醜いまま女の体に接合してしまわなかったことを恨んだ。醜いままならばきっと、女とともに夢を見ることが叶ったかもしれないのだから。

女は夢を見る。遠い日の夢を見る。すでに左腕は失っている頃で、体は幼く、残った体の重みを持ちこたえられずに、かといってそれを支えてくれる人を探すという考えも浮かんでいなかった日のこと。背を伸ばすどころかいっそ右腕さえ落ちてくれないかと恨みを表すようにうなだれて歩いていると長い道はますます先に伸びていって、元から見渡そうとする気さえ起こらなかったのが、一層目を見上げるのが億劫に

なるほどに眺めが尽きなくなっていく。そのうち奥行というものが失せて遠近さえなくなり、風景がただのっぺりと浮かんでいるように見えて、力を出しきった末の徒労の心地にさえ至れなかった。ただ平板な直線と平板な眺めだけがあり、それがこれまでの苦労さえも嗤うような光景だったので、もうずっと脱力していたような、そもそも力など自分にはなかったような心地になる。そして、とうとう立ち止まって足元に目を落とすと、腕が落ちていた。

関節になりきらなかった骨のつっぱりと、折れ曲がらずに伸びている肘と手首、そして五つに分かれている指、それだけを認めるとすぐさま拾って抱き寄せた。鎖骨のでっぱりに腕の関節のくぼみを合わせ、肘と肋骨がかち合い、指が腹を撫でる。そこでこれまで邪魔にしか思ってこなかった自らの体の重みが途端になくなった。あるのは抱きしめている腕の重みだけ、これからずっと大切にしていこうと決意した重みだけだ。

右腕で左脇をにぎりしめ、首が胸につくまでうつむき、唇が固くむすばれる、もうじき涙が出るだろうと思われるほど全身のあちこちを絞りきった様子を、見ている者がいた。見上げると視線が合っていない男が立っていて、同じように左腕を失っていた。盗みをしたという意識が初めて上ってくる。奪い取ってしまったという意識さえ現れてきて、近づいてくるその姿が実際よりも大きく見えてきて、左半身の空白さえ

圧迫感をもって映ってきて、そのままのしかかってくるあまり幼い右腕はもぎ取られてしまって空白を埋める代償になるかもしれないと思われたら、後を向いて走るしかなくなった。かといって走っているのは心だけで、荷物をかかえている体はもどかしげに動くだけで、むしろ実際の荷物よりも体の方が改めて荷物に感じられるくらいで、やがて転んでしまって抱き寄せていた腕はふたたび地面へと投げ出されてしまった。覚悟の決まっていない、哀願するような目が後へと向けられる。

けれど、そこには遠ざかる背中だけがあって、逃げる方角とは逆向きにはるかに広がっている直線の先を目指して歩いていた。温情も冷酷もうかがえない、ただ自らの重みだけを支えるために伸びている背中だけが見えた。

それこそがあなただった。左腕を預けてくれたあなたは、すでに遠い日に同じ腕を行きずりの少女に預けていた。といっても当初は預けたという意識はさらさらなくて、投げやりに置き捨ててしまったけれど結局名残惜しくなったので戻っていったところ、すでに新たな持ち主のもとに落ち着いていたから、取り戻すことをあきらめてしまっただけの話だった。

あなたはそれからずっと一人で歩き続けていた。背後に先程の少女の姿は見えなくなっていたが、振りかえりもしなかった。あなたはそういう風にかつての恋人とも別れてきた。置き捨てた末に振りかえりもしないで、一方で奥行を伸ばしに伸ばしなが

らはるけく広がる眺めを作り出し、気付けば後には見えないところまでたどりついてしまい、一体何があったのだったかと思い起こそうとしても徒労に終わり、また前方を向き直して果ての見えなさに嘆息しつつ、この遠大さを前にしては来し方をかえりみるどころではない、と歩き出していく。そうして前と後の距離を等しくし、未来と過去を消してしまって、ひたすら平坦に伸びていく現在を創り出す。

たとえ片腕を借りようともあなたの過去が見えるわけではない。見えるのは、老若男女の区別を失うどころか、これ以上過ごすべき未来もなくなり、遡行すべき過去さえなくなり、そういう風にあらゆるものから切りはなされてぽつんと転がっている腕だけ。その腕はとても軽く、けれど私の体の釣り合いを取るには十分な重さを持っていた。他人から腕を奪ったという後ろめたさは、くじけるばかりの背筋をまっすぐ引き上げてくれて、やがて助けを借りずとも片腕で過ごせるだけの力を与えてくれた。

のみならず、かつては広がっていくばかりだった前方の視界も、少しく狭まっていった。あなたの背中が、いつかは追いついて借り物を返さなくてはならない右半身がすこしふくらんだ背中が、とりあえずの区切りではあるが、それでも幾分か気を楽にしてくれる区切りとして立っている。後には腕があり、前には背中があり、私はあなたに方角を定められながらここまで歩いてきた。

たとえ追いつこうともその背中を振りかえらせてはいけない。私が自らの体の重み

を支えられるようになるまでの時間が必要だったのと同様、あなたもまたかつて置き捨てた自らの過去の重みを向き合えるまでの時間が必要なのだから。その時が来るまで私はこの片腕を愛おしみ続ける。愛おしみ、愛おしみ、腕が輝くまで愛おしみ、その煌めきにあなたが引き寄せられて振りかえった時、その顔に何もかもを洗い流した清々しさが宿るようになるまで、私はこの片腕を愛おしみ続ける。

〈了〉

その手に消えた

崎本智（6）

空模様が怪しくなっていることに気がついて彼女は雨を予感した。先日亡くなった祖母のことを考えながら茫然と窓を見ていた。洗濯機が同じリズムで回る。くぐもった音が響く室内。彼女は林檎ジュースを濁った水のように飲んでいた。緋色の幕がかけられた古いピアノがあった。その上に埃をかぶったメトロノームが置かれていた。彼女は左手にコップをもったまま、指先で戯れにメトロノームを動かしてみせる。左右に振れるメトロノームの規則正しい音。その音が小石のように波紋を立てる。彼女はもっと幼いころに母を亡くした。水泡のようにその頃のことが浮かんでくる。涙がたくさん出て学校を休みがちになってしまった。白い絨毯を敷いた部屋で犬を抱いていた。ＮＨＫの人形劇を眺めていた。なかなか雨が降らない冬で乾いた風がいつも窓をたたいていた。誰かがノックしているようで怖かった。サイズが合わなくなってもお気に入りの服をずっと手離さなかった。母親というものがいなくなった家には淋しさが結露のように張りついていた。いつもがらんとした部屋で父の帰りを待っていた。

少しずつ彼女は独りで過ごす時間にも慣れていくことができた。お腹が減ればよく牛乳と食パンを食べていた。父の帰りは不定期だったがピザやフライドチキンをお土産に買ってきてくれた夜もあった。母が持っていた琥珀のペンダントには蟻が入っていて、ときどき蟻を観察した。都心の住宅街でそんな毎日を過ごしているうちに、とつぜん学校の先生から心配をされた。何が理由だったのか分からない。でも自分が何か失敗をしてしまったからだと思う。父の仕事はいつも忙しそうで樹衣子一人が家にいることが多かった。父は限界を感じて樹衣子を彼女にとって祖母にあたる幸江が棲む宮ヶ浜の家に預けた。幸江は何も言わずに樹衣子の手をさすってやった。柔らかくて冷たい手は樹衣子にとって忘れられない感触だった。屋敷に引き取られて樹衣子は静かに暮らした。学校も家から遠く、友達と遊ぶことも少なかった。その代わり湖岸や群生林のなかを歩いて過ごすことが多かった。犬はホロホロという名前を持っていて、浜辺や原っぱを気持ちよさそうに駆けめぐった。少しずつ色彩が溢れてくる春の兆しも、夏の陽ざしをさえぎってくれる木蔭も、秋の踏み鳴らす落ち葉の感触も、真冬の音もない雪原も彼女の記憶の層となって重なっていった。屋敷の窓から頬杖をついて変化し続ける保養地の景色を彼女は庭のように愛でた。幸江とはいつも睦まじく時間を過ごし、夕食は樹衣子が主体になって拵えていた。とりたてて料理が上手だったわけでもないが、焼き魚や煮物など幸江の好みに合うものは自然と上手くなっていった。

夏になれば歳下の従弟が二人遊びに来ていつもよりも賑やかになり、樹衣子も彼らのためによくハンバーグやカレーなどを作ってあげた。三人で夏休みの宿題をしたり、樹衣子が森や湖岸を案内することもあった。しかし彼女にとって訪問者は良い人ばかりではなかった。何か用事があって親戚が屋敷を訪れたときに、樹衣子ちゃんはえらいね、などと言われることにねっとりとした不快感を持った。何がえらいのかも尋ねぬままに恐縮そうに首を横にふることしかできなかった。いつか何もかもが自立したときにはそのような親戚たちに真正面から反抗してみようか、と計画することもあった。しかし一時の我慢で争いが起きないなら、いつも顔を合わせるわけでもないので平気だった。幸江は亡くなる直前までおしゃれをしてヤマブドウの蔓で編んだ鞄をいつも持ち歩き、冗談を言い笑顔を絶やさなかった。幸江と暮らし始めて一年が短く感じはじめ、梅雨あけ間もなくの蝉も鳴かない夏の始まりに祖母が突然亡くなった。死因は心不全という抽象的なギコチナイ言葉で片づけられ、葬儀までとんとん拍子にことが運ばれた。いよいよ樹衣子は独りで生きていくことになるのかと幸江の葬儀の日にだれかが吐いたため息のぬるさを彼は許すことができなかった。彼とは樹衣子の従弟の一人だった。酒臭い親戚の男が悲しむように、その実あざ笑うように言った一言が彼の逆鱗に触れてそのまま男のシャツの襟をつかんで引きずりまわし罵詈雑言を吐き散らした。周りの大人たちが止めに入り彼はタクシーでそのまま家に帰された。

樹衣子は別室で祖母の遺体と向き合いながら彼の悲痛な叫びを耳にしていた。時計の秒針がたてる音が妙に気になる深夜の一幕だった。

月日が経ったある日、彼は祖母の暮らした屋敷を訪れていた。かんかん照りの暑い日が続いたあとで彼は何も言わずに屋敷のなかへ上がり込んだ。何も用意できずにごめんね、と樹衣子が目を逸らしながら彼に言った。彼は出された麦茶を飲んで部屋の中で一人黙していた。祖母の葬儀の日に起こしたみずからの行動について謝罪をするだけのつもりだったのに、樹衣子の寂しそうな背中を見た途端、帰りづらくなった。と言っても幾つもの暗い喪の儀式を淡々とこなした彼女にどんな声をかけていいのかもわからず彼は瞼を閉じて畳の上で眠る。もう一人の従弟である冬午郎も同じ日に屋敷を訪れたということは、偶然なのか縁なのか。玄関に彼の靴が揃えてあるのを見て、冬午郎は懐かしく笑ってしまった。自分も靴を脱いで壁に刺さった黄土色に錆びた画鋲に帽子をかけて、麦茶を飲みほして寝ている彼を見てまた愉快そうに笑った。その冬午郎の笑い声は洗濯物を干していた樹衣子の耳にも入り、彼女はおかえりー、と大きな声でそう言うと冬午郎もただいまー、と庭を向いてヤマビコのように返す。夏の朝の出来事であり、それは三人が幼いころに過ごしたときと変わらないやりとりの再現でもあり、祖母の旅立ちを明るく応援する約束のようにも感じられた。

風通しのいい部屋だったから微風にあおられて彼は気持ちよく目を覚ました。冬午

郎と彼女は隣室でテレビを見ていた。彼は空にしたコップをもって二人の傍に座り、自分も「火山噴火」のニュースを眺めながら、ボトルから麦茶を注いだ。おはよう、と二人に言われてばつの悪い顔を浮かべながら彼は「ああ」とだけ言った。お昼はそうめんでいいかしら、ああ、いいね、と三人はそんなやりとりをしながら格別懐かしんだりはしなかった。冬午郎は鍋に水を入れて湯を沸かし始める。樹衣子は庭から葱をとってきて、輪切りにしたまま麺つゆに落として生姜を小さじ一杯垂らす。幼いころから薬味が好物であることはお互いに知っていたからたっぷり入れる。彼は濡れた布巾でテーブルをふいて、後は独りでビールを飲んでいた。冷えたグラスにビールを注ぐ音が響いて、サランラップをかけて残しておいた出汁巻き卵をつまみにして美味そうに食べていた。冬午郎は湯だった麺の水を切り笊の上に広げる。瞬く間にテーブルに運ばれて三人は手を合わせて、ずるずると麺を吸いはじめる。テレビから甲子園中継が流れて、彼は二杯目のビールを注ぎはじめる。

薄曇りの湖は水面に銀色のひかりを走らせていた。彼は湖のすぐ傍にあるボート小屋の庭に棒立ちしていた。橙色の火がゆらめく。火は憂鬱そうにしばらく新聞紙や枯れ枝のなかで燻り、じわじわと乾いた木片に浸食していた。それからたくさんの本がくべられた。紙片はやがて美しい炎のなかに消尽していく。ページは瞬間的に灰へと変わっていった。メタノールに火を放つとそれはいつまでも燃え続けた。納屋からお

んぼろの一輪車をだしてきて本を積んだ。一輪車を押しながら坂を下ることは慣れていなかったから何度も蹴躓きそうになった。冬午郎は朝、一時間ほどかけて入浴をして牛乳石鹸のような匂いを纏いながら彼の煙たい仕事をみつめていた。冬午郎は本当の火というものをあまり見たことがなかったから、興味津々だった。山裾から吹き降りてくる風が火を撫で、その翳を小さくすることもあった。それでも枯れ枝と本の尽きないうちはいつまでも燃え続けた。

彼も神秘的な火の運動に目を奪われていた。彼の鼻先を火の熱波と飛び散った灰がかすめた。彼はまた本をくべた。短い夏が通り過ぎていき、残暑が膜のようにねっとりと残り、暑さは蝉の鳴き声のように反響していた。しかし数日前から風の強い秋が麒麟草の開花と共に舞い込んできて、町の人々に季節の変化を予感させた。冬午郎は燃え盛る火にも飽きて、山あいを走るクラシックカーを眺めたりもした。愛好者たちの品評会が行われているらしい。それでも冬午郎は彼の行動を黙って目で追っていた。彼は過去と決別するような表情をして動作は極めて素早く無駄がなかった。彼はその後もたくさんの本を燃やし続けた。量としてはさほど多くはない。

「陽が傾くころには帰らないと樹衣子が怒るよ」

冬午郎は催促するようにそう言った。

「すぐ終わるよ」

傘もささずに湖岸沿いの道を歩いていた。火を消してから間もなく、雨が降りはじめて彼と冬午郎の髪を黒々と濃い色に変えていた。毛先が揃い、肌に貼りつく感触が皮膚を通して伝わり、体はじんわりと湿っぽく濡れはじめていた。霧のような雨で呼吸することを遮られるような感覚を味わいながら、沸き立つあえかな淋しさに胸を打たれていた。どこかにまだ太陽の残滓がこの保養地に反射しているのか、明るい雨のなかにひかりの輪がぼんやりと浮かぶ。虹のような多彩な色のひかりはどこかに導くように破滅的に反射してそれが瞳の中にできた錯覚なのか現実のひかりの屈折なのか判別することは難しかった。樹漏れ陽は灰色の雨をきりわけながら、ひかりの柱となって微細に湿った黒茶色の土を温めていた。

雨風で錆びてしまった商店の看板に炭酸飲料水の絵が描かれてあった。一昔前のアイドルが色褪せた肌の色を晒して、こちらに無垢な笑顔を向ける。二人は喉に粘膜のような詰まりを感じて何かを飲みたい衝動に駆られながら、小雨のなか立ち尽くしていた。ひかりの輪は消え入り、視界はまつ毛から滴る水滴でぼんやりと曇る。湖の方を見れば波はシーツのなかを鼠が走っているかのように、不規則で動的な動きをあちこちで繰り返していた。湖そのものが一つの生き物のようにも感じられた。坂の上の屋敷に帰っても湿った畳で横になるくらいしかやることもない二人はトタン屋根で覆われたバス停で雨宿りをした。冬午郎は真新しい白いウールのタオルを鞄から取り

出して彼の頭を拭いてやった。彼は猫のように目を瞑りながら雨音に甘美な時間を重ね合わせて柔らかな生地のなかに抱かれていた。冬午郎は彼を拭ったあとのタオルでわずかに自分の体を撫でるように拭いた。雨は勢いをまして容赦なくトタン屋根を叩き、会話すらできないくらい五月蠅い音を立てている。時刻表は湿気でグニャグニャに萎れており、コーラの空き缶が暗い小屋の隅に転がっていて、一匹の蟻がベンチの上を右往左往しながら這っている。物資輸送のトラックや伐採業者たちのワゴン車が水たまりを切り裂きながら速度を上げてバス停を通り過ぎていく。ガードレールの下の浜辺には誰かが作った砂山とプラスチック製の赤いスコップが置き去りにされていた。

　樹衣子はカーテンを閉めた昏い室内で雨粒の音に耳を預けてルノワールの画集を眺めながら眠ってしまっていた。ルノワールという画家に興味を持ったことはなかったが母の遺品を整理していた時に見つけたものを不意に思い出して眺めていた。ひんやりとした部屋のなかで微睡みながら夢を見ていたことは憶えているのに、内容は思い出せなかった。ソファに深くもたれながらどこかで雨の音を聞くことの心地よさにロッシーニの楽曲を聞いているような明るさを重ねた。後頭部がまだ水に浸かっているように重たかった。祖母は亡くなる直前まで快活に暮らし、泣き虫だった自分とはぜんぜん似ていなかったなと樹衣子は過去のことをめぐらせる。それでも指がみずか

らの手首を何気なくつかんだときに、他人の肌に触れたような思いがして自分のことを忘れそうになった。祖母の肌に幼いころ触れたときには自分の分身に触れたようにも感じ、落ち着いたことを思い出す。ぽっかりと口を開けて瞼の内側にぬくもりがあるような気がしてそれが祖母の面影のような気がして眠りのなかにまた逃げようとする。

もともと彼と冬午郎と樹衣子はべつべつの両親を持つ従妹の関係にあたり、幼いころはこの祖母の家であった湖岸の屋敷で夏休みを共に過ごしていた。彼はあの頃から物静かで当時すでに故人であった祖父の書斎の窓をあけて木々を揺らして入ってくる風を受けながら祖父の文学全集などを読み耽るような成熟した雰囲気を持っていた。二つ歳下になる彼を樹衣子は少し尊敬していた。籐椅子に座る彼のもとへ麦茶を運びにいったこともあったが彼は集中して扉をあけたことにも気が付かずに読んでいることが常だった。冬午郎もあまり賑やかな性格ではなかったが蝉取りやボートなどを楽しみ、初日から顔を真っ黒にして帰ってきていた。親元から離れ束の間、三人は祖母と溶けるような夏の日々を過ごしていた。時間と共に関係は消え去っていくことぐらいは幼いながらも三人とも予感していたはずなのに、またこうして三人が同じ屋敷で寝泊まりをしているというのはあの夏の日がこれからも続くという証左かもしれない。

「何もかも焼却してしまえばすべて消え去るわけでもない」

なだらかな傾斜が山に向かって伸びていて、湖を背にして二人はバス停から屋敷へ戻るために歩いていた。雨は止んだばかりで土はぬかるみ、濁った色の水たまりがあちこちにできていた。凸凹道だったため、靴に泥が付き、二人は生ぬるい湿気のなか地面を見て歩いていた。ふと正面から帽子をかぶった登山者のような男が下りてきて、彼の耳元でそっと囁いた。彼は男が夢の中にでもいるのかもしれないと相手にしなかったがふと漂ったその男の吐息に重なる感覚が胸の奥底にみつかり、はっとある名前を思いだした。

草壁という苗字の男が親戚にいたことを彼はその屋敷を訪れてからすっかり忘れていたし、坂道を登りながらふいに帽子をかぶった男がこちらを見ていることに意識を向けるまでは二度と思い出すこともなかったのかもしれない。肌にまとわりつく黒い油のようなその印象。まぎれもなくあの晩にため息のような一言を漏らした男であり、凝った記憶からその相貌が浮かび上がった瞬間、虫唾が走り悪寒がした。爬虫類のように舌を出す癖を持つ五十代半ばの印象の薄い男で、彼が祖母の葬儀の日に引きずり回した男と言うのがこの草壁にあたる。草壁はめったに親戚と付き合うことはなかったが葬式には必ず訪れる男だった。親戚中から格別に忌み嫌われる存在でもなかったがあまりこの男と話をするものもおらず、何を考えているのかもわからなかった。

彼はその視線の正体をつかんだ途端に振り返ってみたが竹林の笹が風に揺れるだけでだれも立っていなかった。

エプロンをした樹衣子が包丁の先を見つめながら、籠いっぱいの野菜を切っていた。川の水で冷やされた野菜には光沢があった。棚橋さんのお宅から分けてもらったの、と樹衣子は言った。彼と冬午郎は顔も知れない棚橋という人に感謝をした。濡れた服を着替えてから冬午郎も手伝った。彼は居間で新聞を読みはじめた。鍋は沸騰していて、下茹でした大根の匂いがほんのりと香りだす。茹でたジャガイモはヘラでつぶされて各種調味料と混ぜられる。冬午郎は手羽元をフォークで刺して火の通りをよくする。樹衣子は葱を大きめに刻む。樹衣子と冬午郎は会話もなしに役割分担をして手早く調理していた。瞬く間に手羽元と大根と卵の煮物、それから味噌汁、ポテトサラダがテーブルに並んだ。彼は瞳を丸くして湯気の立つおかずや汁ものを眺めた。いただきますとそれぞれが手を合わせるとすぐに箸がつけられた。彼は食事をしながら、樹衣子をそっと見た。樹衣子はそれに気が付いて不思議そうに彼を見つめる。彼は視線を逸らして――誰か、おれたち以外に客が来なかった？　と尋ねた。樹衣子はすぐに首を振った。彼は――この煮物、美味いな、と言った。冬午郎は嬉しそうにした。樹衣子は彼の質問を気がかりに感じていた。

掛け時計の針が夜の九時を指す頃、樹衣子は離れの風呂場に行ってしまった。冬午

郎は皿を洗い、彼は冬午郎の洗った皿をつぎつぎと拭いて食器棚に並べていった。皿を全て洗った後、年季の入った薬缶で湯を沸かした。冬午郎は、疲れたから先に休むと言って寝室に向かった。彼はスポーツニュースで欧州リーグでの日本人選手の活躍を目にしながら、草壁のことを考えていた。あの日、生ぬるい感触が襟元にまで昇ってくるような心地がして、あの男を庭先に引きずり出して殴る蹴るを何度も繰り返した。みずからの暴力性に呆れながら、容赦なくあの男を殴り続けた。幼いころには旅行がてら彼の実家を訪問したあの男を連れて八幡宮に案内をしたこともあった。優しいおじさんでしかなかった草壁がいつの間にか人の不幸にたかる蠅のような男になってしまっていた。元々そう言う男だったのかもしれないが彼にとってはどうでもよかった。親類の者からはあいつは樹衣子に惚れているのでは、でなかったら（草壁）孝六にあそこまでの仕打ちはしまいだろうという噂までされてしまった。あの一夜以来、樹衣子と二人になることが気まずく、樹衣子のことをどう思っているのかわからなくなってしまっていた。昼間のあの顔を見た瞬間に胸倉をまた掴んでやればよかったのに、自分はあの男のことを忘れていた。憎しみの一過性。そんなものなら初めから持つべきではなかった。

　ぴいっとけたたましい音が鳴った。彼は急いで台所の方へ駆けてみると台所でしゅうしゅうと蒸気を吐く薬缶があった。ことこと蓋を鳴らして吹き零れている。彼は火

を止めて、澄んだ空気のなかに立ち尽くした。ここで茫然としていると何だか浄化されるような心地さえした。コンロの火を消した瞬間に火葬場のことを思い出した。それは誰の火葬なのかも分からない。火と骨の乾いた感覚。昼間の火には見えなかったのに、いまは一瞬立ち上った。窓の外の林には鳥や四足獣、虫たちの息を殺しながら蠢きあっているような独特の気配で充満していた。三人は別々の部屋で未来のことを想像する。ここにいつまでいるか、だれがここを出ていくのか。それはわからないが朝が来るまでゆっくり眠れればいいと、彼は電気スタンドを消して考えることを止めた。

真夜中に冬午郎は目が覚めて牛乳を飲むために台所へいくと、薄青い翳が食器棚のガラスに映ったような気がした。祖母がまだ自分たちを見ているかもしれないと思った。最後に祖母に会ったのは理学療法士の専門を卒業したばかりだったから、二年前になる。金沢の病院に勤めることになって、しばらく会えないだろうと思い幸江と樹衣子に挨拶をしに来たときだった。一晩泊り、三人で出前の寿司を食べながら談笑をした。別れ際に二人と握手を交わした。「がんばれよ、若者、愛は海よりも深く、山よりも険しい」と幸江が言った（当時、好きだった女の子と別れたばかりだった。もちろんそんな話は二人にはしていない。見透かされていたのだ）。幸江の手は柔らかく皺だらけでお香のような匂いがいつもしていて、樹衣子はお香の匂いがするとおばあ

ちゃんの匂いだと幼いころによく言った。それをみつけるのは樹衣子がいつも三人の中で一番早かった。幸江と樹衣子のことを考えながら、台所をうろうろすると冬午郎は懐かしい絵をみつけた。画用紙いっぱいに巨大な怪鳥が描かれた不思議な絵だ。額縁に飾られて食器棚の横に架けられてある。樹衣子が高校時代に油絵で描いたハシビロコウの絵だった。クチバシと目が大きくこちらを睨みながら沼のなかで立っている構図だった。二年前にも見た絵だった。なぜ彼女がアフリカに生息するこの奇妙な鳥を描いたのか分からない。色褪せた家具が並ぶこの古い家で灰色の鳥は静かに息を潜ませていたのだった。それからしばらく牛乳を飲みながら深夜のハシビロコウと向かい合う。民家も少ない土地なのに、切り裂くような救急車のサイレンが聞こえた。冬午郎は一気に夢から覚めたような気にさせられる。薄青い翳はもう消えていて、冷えた牛乳が喉を下る。冷蔵庫の稼働音が消えて静けさがまた打ち寄せる。彼がもう一度眠りについたとき、幸江と樹衣子とハシビロコウが夢に登場した。

幸江は死ぬ直前、樹衣子に人差し指の伝達をよくしていた。声がでなくなり、仕方なく幸江は他の大人たちとは筆談を交し合い、樹衣子には戯れから人差し指で掌に伝えたいことをなぞった。はじめてこの宮ヶ浜にやってきたとき、幸江がさすってくれたあの肌の感触が思い出された。まるでなぞなぞのように幸江は微笑みながら、幾つかの単語を走らせて樹衣子を困らせる。樹衣子は幸江と肌を触れあわせているだけで

嬉しく、自分の掌になにかをなぞられるとき、不思議と魔法をかけられるような心地がして、幸江の人差指が通った肌の表皮にはひかりが浮かぶようにさえ見えた。

彼女は非現実的な夜の世界の入り口に佇んでいた。それはまだ彼女が入ったことのない結晶化された時間の畔でもあり、そこから無数の船は出航していたが風は吹いておらず、浜辺には幾つもの機械製品とそれを繋ぐコードが漂着していた。既視感が初めて見る雲平線に生まれるも、瞬く間に薔薇色の火が幾つも上空に浮かびはじめる。結晶の内部に煙か水のようなものが白色から淡い紫色に変化しながら充満する。その礎に彼女の懐かしい皮膚の感覚が担保されて、黄土色をしたあの男の肌が瘴気を纏いながら覆いつくす。そこで草壁をぼこぼこにしてしまった彼と言えば船の垂直棒に凭れながら、本は焼かれ文字たちは失われたまま、その感触を手のひらに思い出そうとしていた。彼の人差し指は祖母のように触れたものをひかりで満たすことはなく、その体温だけが火のように熱く残っていた。彼はまだその人差し指を縦横無尽に駆使しながら、瞬間ごとに消えていく文字を書き連ねていく。いつまでもその意味のことを必死で追いかけながら、他の身体感覚のすべてを忘れて彼女もその手に消える文字のことを声で再現していく。何度それが反復されていったのだろう。彼女がその意味を取り違えてしまったのか彼が火のような指の温度に自制心をなくしてしまったのか、詩のような言葉が無限に連鎖していく。

木々や人の影が濃く映る日の昼間だった。門戸の呼び鈴が二度鳴らされて、訪問者が訪れることを知らせると三人とも表情が曇った。冬午郎が真っ先に立って迎えるとそこにいたのはやはり草壁だった。土色の皮膚をして帽子に顔を陰らせながら、男は微笑んでいるつもりだったのだろう。冬午郎はお辞儀をして草壁を迎え入れて、丁寧に挨拶をした。でかくなったな、と冬午郎に一言かけた草壁は肩をぽんと叩いて屋敷の中に入ろうとする。

「待ってください。樹衣子がまだ具合が悪くて、お会いできません」と冬午郎はそう言うも、ならば尚更、会わなくてはならないだろうと草壁は言い、千鳥足のような歩き方で玄関の扉を開けようとする。冬午郎は精一杯止めようとするも開かれた扉の向こうには彼が仁王立ちをして待っていた。お前も来ていたのか、と草壁は冗談めかしながら笑い、お前にも用はない、というように無視してさらに樹衣子の元へ向かおうとする。待て、と彼は草壁の肩を掴んで力で草壁を阻止する。草壁が彼を睨んで言う。お前ごときが樹衣子の何なんだ、結婚でもするのか。草壁は腕を振り回し彼の手を払いのけて、陰気な敵意の矛先を彼に向ける。彼は息を乱しながらも冷静に振る舞うことに意識を集中させる。自らの輪郭を確かめるように髪を触った。蒸気のように舞い上がる本能を抑える。すでに唇の端から彼は臙脂色の血を流していて、血痕は三和土の上に数滴作られていた。彼はいつの間にか自身の唇を噛んだのかもしれない。草壁

はそれに驚くこともなく、倍旧の冥い平静を手繰り寄せていた。樹衣子は薄暗い室内で籐椅子に座り一点を眺めていた。

樹衣子の母であった塔子は亡くなり塔子には君実子という妹がいた。草壁は現在、君実子と暮らしている。君実子は彼の母にあたり、草壁は義理の父にあたった。君実子は旅行鞄をクルマのトランクから降ろして、眉間に皺を寄せながら屋敷の入り口の問答を見つめている。

君実子は近づいてきて草壁に声をかける。この子たちにはこの子たちの生活があるのよ、邪魔しないでおきましょう、もういい歳なわけだし、わたしたちがこの子たちぐらいのころにはもう大人ぶったことをたくさんしていたんじゃないかしら。秋晴れの青い空、コスモスの茂みから現れた見知らぬ猫が君実子の前を通って、小さく鳴いた。君実子はその猫を見つめた後、草壁に向かってもういいじゃない、という顔をする。猫はそのまま落ち葉だらけの排水溝を潜って屋敷の外に去っていく。草壁は君実子と外国で暮らすため、樹衣子も一緒に連れていきたかったようだった。それは草壁と君実子が帰ってから樹衣子から聞いた。草壁にとっても樹衣子は大切な存在だったらしいことが分かって彼は釈然としない気持ちになった。外国っていったいどこなの、と冬午郎が尋ねたとき、ハンガリーの首都ブダペストらしい、と彼が言った。彼は君実子からそれを聞いていた。樹衣子は窓辺に立って湖を眺めながら、少しずつ話しは

じめた。

わたしがある年齢に到達するまでは母も元気で父もフツウのお父さんでわたしたちは時間を共に過ごしながらそれぞれの糸を持ち寄ってそれでコウフクに満ちた一つの刺繍を作っていたの、カゾクというジャンルの作品でニチヨウビにそれは作られた、手巻き寿司のパーティ、運動会、遊園地、ファミリーレストラン、家族旅行で行った美馬牛峠、とんがり帽子のような小学校の校舎、食べかけのラスク、誕生日プレゼント……。でも刺繍は失敗することになる、母の糸が切れてしまったから、糸がもつれてしまったのかもしれない、と彼女は言った。

――糸？

――そう、色彩の感覚はあらゆるものに宿るの

いま、わたしたちの、時間は、灰色のフィルタに、わ、かけられて、しまっている、わ、愛液も、破壊も、弛緩も、その言葉が持っていた、の、意味をなさない、の、色の感覚が、脱色されて、抜けきった、の、明度しかない、黒と白、の木立、ボーダーシャツ、シマウマたち、牢獄の窓に落ちる陽ざし、飴色の写真、未曽有の混濁、ドリ

ンクバー、シャワー室の床、斜面、排水溝の音、彩られているの、それは時間が、というより、発明によって、膠着した、男女のやりとりが、恥と言うよりは、つまらないプライド、栓のないラムネ瓶、瓶底のビーダマ、水晶、その中に燃える薔薇色の水煙、乳白色と門限、既視感、蓋のない紙芝居、岸辺、放り込まれた、飲み込まれた、わけではなくて、包囲された、彩られた、器、花瓶、お椀、水音が告げる、雨の音、屋根からの、ひかる、重ねられた、ルージュ、塗りなおされて、強調された、オタマジャクシ、音楽、ハレーション、残響に、包まれて、雑踏に、追いかけられて、その、あの、指がくれた、亡くしてしまった、感覚、と傘、クジラの骨、と長靴、それから打楽器の、アンサンブル、めくるめく衣擦れの音、溢れる色彩、と夕立、殺された、嬲られた、書き直された、手紙、原稿用紙、紙屑と屑籠、もぎとられた左腕、ゆくすえ、なりゆき、数本の葉巻、角砂糖、を、吸いながら、林檎の蜜、残された琥珀の、炙られた、肋骨、ペンダント、幼かった混血の娘、それから嫉妬、黄金の声に、よりそった、薬指をはじめとする、いくつかの羅紗と、また約束、小さじ一杯の憂鬱

三人はダイニングテーブルに座っていた。陽ざしは部屋を斜めにきりこんでいて樹衣子の唇から下を明るくしていた。年老いたホロホロは樹衣子の足元で眠っていた。目を閉じていただけかもしれない。十月になろうという頃なのに三人とも真夏のよう

に薄着をしていた。樹衣子は梨を剥きながら、彼に向かって気になっていたことを聞いてみようと思った。そのとき彼はめったに吸わない煙草に火をつけて視線を宙に漂わせていた。

「子供の頃にあんなに本を読んでいたのに、もう読むことをやめてしまったの？」

彼は異世界から還ってくるような間をとった。それから不思議そうな顔をした。何気なく頬杖をついて憂色そうな顔を浮かべて目を逸らした。

「理由なんてないのだろう。単純に煩わしくなったんだ。だから書斎の本もみんな燃やしたのかもしれん」ポカリスウェットの缶に吸殻は落とされる。

「なぜ、燃やしたの？　燃やしたらすべてが片付くの？」

彼の燻らせる煙が彼の不機嫌を象徴しているように意地悪くねっとりと流れた。冬午郎は樹衣子の視線と彼の煙に挟まれて息苦しかった。

書斎の本は祖父のもので祖母は祖父が亡くなったときのままにしていたのに、彼は祖母が死んでからその本を燃やした。何か意味があるような気がしてならなかったけどそれ以上詮索することは控えた。大きく剥いた梨を彼女は彼と冬午郎の皿に取り分けてやった。そのとき、屋敷の呼び鈴がなり、樹衣子はすぐに玄関の扉を開けた。赤い帽子をかぶった女が息を切らして立っていた。

女は君実子だった。

「君実子おばさん……」君実子は倒れこむように樹衣子の胸にからだを預けた。面食らった樹衣子は君実子を支えながら「どうしたんですか……」としか言えない。君実子は意識と呼吸がどんどんずれていくことを自覚しながらも上手くしゃべることができない。それから涙がぼろぼろと流れて、地面にしゃがみ込んでしまった。時折少女のようなところがあると思っていたけど、樹衣子はこういう大人をどう扱っていいか分からなかった。一緒にしゃがみ込んで背中をさすってやると樹衣子はやっと君実子の声を聞き取ることができた。「草壁がいなくなってしまった」そういって俯いた瞬間、君実子は赤いベレー帽を地面に落としてしまう。樹衣子はそれを見て俯いたから帽子が落ちてしまったのか、それとも帽子が落ちたから拾おうとして俯いたのか、何だか分からなくなるような一瞬に見舞われてそこにまた林から吹きすさぶ風にみずからの髪をなびかせて夜の街道に一人立ち尽くしてしまうような心地にとらわれてしまう。目の前の君実子は石になってしまったようにかがみこんだままそこを動こうともせず、闇の一点になってしまい、先日あんなにも気丈に振る舞えたひとがどうしてこんなに動揺してしまうのだろうと、樹衣子は恋愛と呼ばれるようなあいまいな感情が憎くてならなくなかった。かりそめの浮ついた感情で迷惑をこうむるのは残された人々に他ならない。自分勝手な父親を持って泣きたいのはこっちの方だと樹衣子は逃げてしまいたくなった。闇黒の空は低いのか高いのかも分からず、路地の明かり

はなぜか消えていてどこか迷宮のようでこのまま、わたしも何もできずにしゃがみ込んでしまうのだろうかと思った。幸江とその夫が引き起こした恋愛が数えきれないひとに困惑を与えているような気がして樹衣子はやはり胸が痛くなった。柘榴のような色をした感情のひとつひとつが結びつきあい離れあい、そして別の実と結びつくのはもう見るのも嫌だ。足音を聞くのも嫌だし、電話の音も、窓をたたく風の音も怖くて仕方なかったのだ。わずかに安心できたのは幸江の皮膚の感触だけだった。あのときだけがヘイワのなかにあるような、でも……。

彼女はマネキンのように硬いからだを座席に預けて、人がいないのをいいことに寝そべるように座っていた。樹漏れ陽がバスの車内に入り込み、それは絶えず流れ消え去って行った。温かい息がかけられていることに気が付いて、彼女は彼の膝の上で眠っていることに今になって気づいた。彼も血色のいい顔をして座ったまま眠りについていた。真上に顔があったからその息が彼女の首元にかかっていたことに今になって恥ずかしくなってしまった。昨晩来ていた服と違う服を着ていて、当然あの女――君実子――も周りにはいなかった。いったいどこに向かっているの？　と「近江八幡の駅だよ。今日はデートをしよう」彼は目を瞑りながら、半覚せいのまま応えた。彼女はそのまま彼の膝の上から、一番近くの窓から走り去っていく宮ヶ浜の景色を眺めていた。中学校の頃に避妊のことを習って、そのまま貧血を起こして保健室で目覚めた

ときと同じ感覚がした。温かい息はいまだに首元にかけられたまま、彼女はもう一度ここで眠ってもいいと思い始めてその半覚せいの世界を彼と共に味わっていた。そのとき、信じられないことに彼が悪ふざけなのか、寝ぼけているのかその唇を彼女の唇に中てて無数の樹漏れ陽を浴びながら車内で二人はキスをした。彼女はこんなことをしてしまってはまずいと思っていたのに、金縛りにあったように体が動かず粘液性の強い彼の唾液を唇でどうやって処理するのか、戸惑いながらそのまま座席の下にたらしてしまい、二人はだらしなく頽れてそのままの時間を過ごしてしまう。こげ茶色の毛を持った肉牛が窓の外で放牧されているのが一瞬見え、牛に見られてしまったようで恥ずかしかった。彼は唇を預けながら何かを彼女の手に書いているようだった。それは幸江の指の感触以来の優しい温かさを持っていた。彼は鼻がつまっているのか呼吸しづらそうだった。樹衣子はずっと生き物を抱いているような、毛布を重ねて布団に籠っている心地のなかにいた。待っている人がいなかったから停留所が止まらずに過ぎていき、色づいた紅葉の林から少しずつ街並みに代わる頃、二人はしゃんとして真っ直ぐ目の前を向いて茫然としていた。口の中が気持ち悪かった。それが気づかれたのか彼は鞄からボルヴィックを出して彼女に渡した。気まずくて何もしゃべることができなかったし、さきほどの行為よりも彼が口をつけたボルヴィックを飲むときの方がよほど緊張してしまった。二、三かあるいはもっと前の停留所からこのバスに乗

り込んだ老婦人が退屈そうにしていて、ふいに後ろを振り返ってまじまじと彼と彼女を見つめた。

「あなたたち、二人はきょうだいかしら？　茶色い瞳がそっくりね。綺麗よ」と言った。彼と彼女はこの老婦人に何もかも見透かされてしまったような気がして頬を薄桃色にして「違います」とだけ言った。

中継駅となっているため僅かに栄えた街でも平日だったからすれ違う人は少なかった。二人は駅前のショッピングモールにとりあえず入って家具売り場をうろうろしたり、寝具を見たりした。特に買うつもりだったわけではない。そこにはつまらなそうな顔をした店員がいるだけだった。それからシネコンの上映中の映画を一通り確認したけれど二人にとって観たいものはなかった。疲れて大きめのベンチに腰を降ろしオランジーナを飲んだ。彼は小さくゲップを漏らした。

「静かな街だな」

「宮ヶ浜に比べたらだいぶトカイよ」

午前中で学校が終わったのか、ちらほら高校生たちが歩いていた。アイスクリームやハンバーガーを食べたりして楽しそうだった。彼は立って近くのハンバーガーショップでベーコンとレタスとチーズが入ったのを二つ買ってきて彼女に渡した。昨日は母さん（君実子）が迷惑をかけた、すまないと彼は食べながら言った。わたしはどう

してあなたの膝の上で寝ていたの？　昨日からお前はおかしかった、母さんと接触してから意識がどこか遠くにいってしまったようだった。冬午郎が母さんを看ててくれるというから、おれはお前にどこか気分転換に連れていってやることにした、お前は生返事ばかりで特別「嫌」とは言わなかったからここに連れてくることにした。他に行くところも知らないし。そうしたらお前は、バスの席に着くなり眠ってしまったんだ。いくらゆすっても起きないからおれはお前を放っておいた。後のことは憶えているだろう、と彼は照れ臭そうに言った。彼女はハンバーガーを一かけら口に入れて、ありがとう、と棒読みで返した。彼は憶えているか？　と言った。あのバス内での行為を反芻しようというのかと彼女は怪訝な目で彼を見ると、彼は違うんだ、もっとずっと前に幼稚園ぐらいの頃、このあたりの公園でお前の両親とおれの両親が一緒にお前とおれを連れてこの街にやってきた。ビニールシートが風に舞いそうになるのを一緒におさえてアルミホイルで包まれたお握りを食べたりしたんだよ、彼女はそのときの光景をぱっと思い浮かべた。でもその景色が想像なのか追想なのか、区別がつかず彼女は彼に凭れて、もう帰ろうよ、と小さくいった。宮ヶ浜駅のバスに二人が乗り込んだとき、また雨が降ってきた。

二人は雲行きがどんどん怪しくなっていくのを眺めながらまた無言に戻っていった。車内はまるで干からびたプールの底のように空虚に感じられた。いくつかの停留

所が過ぎていき、いよいよ屋敷に近づいたとき、この世の終わりのような雨が降り始めて世界を混沌に引きずり込んだ。傘を持っていなかったのにいつもの一つ手前の停留所で降りようと彼女が言い出して、二人は雨が降るなかその停留所で降車した。停留所に小さなビニール傘の忘れ物があったから、彼はそれをさして、半ば自分は濡れながら豪雨のなか二人は歩き出す。彼女は今になってやっと愉しそうな顔を浮かべて、何かをしゃべっているが彼は聞き取ることは全然できなかった。彼は大きく指さして彼女にある場所を見つけたことを告げる。湖岸に東洋風の四阿が建っていた。二人は増水して濁った湖を眺めながら椅子に腰を下ろした。肩を並べて座った二人は地球最後の日を愉しむ老夫婦ように見えたかもしれない。こんな天候なのに車は猛スピードで走り去っていく。彼女はガーゼのハンカチで顔を拭いながら、ここも変わっていないわね、と小さく言った。彼は前髪で表情を隠しながら、沈黙のなかに逃げ込み、砕け散る水波を目で追いかけていた。時間から切り離されて一つの点になったような感覚が濁流の音にまぎれて二人の元へ打ち寄せてくる。お前はその頑固なところがばあちゃんにそっくりだ、と彼女は言われたとき、悪い気はしなかった。やがて雨は止み、雲の隙間からひかりが落ちてきて、彼と彼女はずぶ濡れのまま、四阿の片隅で新しい世界を迎える。おーい、と遠くから冬午郎の声がする。孤島にでもいるような気分から我に返った二人は冬午郎が振り返った先の急な坂道を下りてくるのをお揃いの茶

色い瞳に映す。それが二人の今見ている景色だった。

（了）

自

由

キョウゲン

うさぎ

久遠寺久兵についていくつか書こうと思う。

名前、久遠寺久兵。フリガナ、クオンジキュウヘイ。生年月日、一九八九年九月十九日生まれ。現住所、東京都三鷹市L町×―×。最終学歴、T大中退。趣味、読書と音楽鑑賞。特技、タッチタイピング。希望休暇曜日、特になし。備考欄、若さと気力で長時間の勤務頑張ります。と。

「名前、久遠寺久兵」から始まり、「勤務頑張ります。と。」までこの数行の文章が丁寧なボールペンの字で履歴書に書かれて、本棚にある海賊マンガの単行本に挟まれておいてあった。きっと、「と。」が余計な一文字でこの履歴書は書き間違えで、おそらくこれを下書きにして本番の面接の時に持って行ったものがあるのだろう。

彼は実家を出て一人暮らしをしている。大学に通うためにマンションを借りて、中退した今でも住んでいる。実家に帰るということは面目ないと思っているが、マンションの賃貸料も食費などの生活費は親からのお金で生活をしている。しかし、それでも自分の自由になるお金を稼ごうと一人暮らしをして四年目でやっと働くと決めたのだった。

働く前まで彼は運と勘で生計を立てていた。パチンコをやれば大連チャンをして、麻雀をやれば相手の上がりを見切って自分のチャンスを見計らって上がる。彼は勝負事においての押し引きが先天的に備わっていたのかもしれない。ただし、それは去年までの話だった。スロットをやると食費を削ってまでやるものの当たりを引くこともなく、麻雀は強すぎると言われて仲間から相手にされなくなった。そして、やっと気づく、他人から見れば当然なことでも、彼は知らなかった。いや、知らないフリをしていた。「働いたら負け」彼の心に掲げていたスローガンを撤回する時が来た。それはほんの些細な出来事からだった。彼はもともと小説家になりたかった。だれに見せるわけでもなく、大学に入学したときに親戚のおじさんに買ってもらったノートパソコンでひっそりと小説を書いていた。彼は、読書においては浪費家で図書館を利用することはなく、大型本屋に通って本を買うのであった。本を買うお金は、最初はギャンブルで勝ったお金を使っていた。しかし、今まで好循環していたお金も底をつき、彼はやむなくアルバイトをすることに決めるのだった。彼の中では苦渋の決断だった。本当の意味での負けだし、人生での挫折とも言って過言ではなかった。とはいえ彼は若くて、これくらいのことで人生が大きく変わるとは深く思い詰めなかった。「欠点」というだけであって、ゆくゆくは自分は働かないといけないとは思っていて、心のどこかではいつかやってくることだと受け止めていた。

彼はアルバイトをしながら、それでも自分を表現する術として小説を書いた。書いた作品が多くなってきて、腕試しと文芸誌の新人賞に応募してみた。ペンネームは本名と一緒「久遠寺久兵」だった。送った作品がどう評価されるか楽しみだった。そして、それを人にだれにも言わないでいることが楽しくてしょうがなかった。もしかしたら、自分は小説家になれるかもしれない。それを両親に言った時にどういう表情をするだろうか、友人はなんて言うか、夢想するだけで楽しかった。周りのみんなを見返してやるという意気込み、もしくは強欲ともいえるものが彼の創作意欲をかき立てた。その点において、アルバイトをする事も苦ではなくなっていた。彼は順調に生活をしていた。

その生産的な生活が相まってか、彼女ができた。同じ職場の小笠原亜樹と言う女性だった。身長は彼より少し低くて、高校まで運動部だったのでしっかりした体つきをしていて、少し甘えん坊で、髪は茶髪で、彼にはもったいないくらいの女性だった。同じ職場ということで、周りには内緒にして仕事をしていた。それも彼の中で誇大妄想に拍車をかけた。自分にはこんなにもすばらしい彼女がいる。彼女に話しかける同僚がいたら、心の中で舌を出す。亜樹は自分の彼女だ、と。彼にとって亜樹ははじめての彼女で、もちろんセックスもはじめてだった。幸か不幸か、彼女はもう経験済みで、行為の最中にリードをしてくれた。はじめは彼女の言っていることがわからなか

ったし、彼女も「そこ」とか「気持ちいい」とか「もっとして」とか抽象的な言葉で言ってくるので、彼は一回一回の愛撫で一生懸命だった。いざ彼女の中に入れてみると、彼女が声をだして喘いだ。回数を重ねるうちに、彼女の発する喘ぎ声で彼女がどんな状態なのかを察することができた。もちろん、彼女も彼のものを舐めたりした。はじめて自分の手以外のものが触れた時にはくすぐったいと思って、腰を引いてしまった。彼女は「大丈夫だよ」と言って白い八重歯を見せて笑った。彼女の執拗とも言える愛撫は続いてずっと彼のものを口に含んでいた。そのうちに絶頂に達してしまった。少しの間快感に浸っていたがすぐに我に返り、彼女に「ごめん」と言ってティッシュを箱から取り出して差し出した。「平気、平気、慣れてるから」と先ほどと変わらぬ笑顔を見せた。「慣れている」という言葉が彼の中の嫉妬心を掻き立てた。自分は今までの中で一番の彼氏になってやろうと思った。もちろんだが、二人はいつもセックスばかりをしていたわけではなく、よく遠出をした。近場だと同じ職場の人にみつかるかもしれないと思ったからだ。春には桜を見に山に、夏には海水浴をしに海に、秋には遊園地に、冬は沖縄に行った。

それを二回繰り返した。その間にも彼は小説を書き続けた。最初の公募は文芸誌にも載らない残念な結果になったが、彼のそばには彼女がいた。彼女はいつの間にか彼のことを応援する一番身近な読者になった。彼女の存在により、彼の作風は一転した。

今まで、無造作に書いていた小説も、読者がいることと彼女のコメントによって方向性が解ってきた。彼は二年の間に四回公募に出した。そして、五回目で彼は文芸誌に名前が載った。しかも、最終選考だった。それ以前に彼の元に編集者から電話がかかってきた。彼はいの一番に彼女に伝えた。最終選考に残ったと。彼らはうれしくなり、仕事が忙しいにも関わらず早引けして外食をした。そして、発売日に二人で本屋に行って、文芸誌を買う。それを近くの喫茶店に入って確かめた。そこには確かに久遠寺久兵の名前と作品名が載っていた。その文芸誌が今私の手元にある。なにが久遠寺久兵だ。かっこつけやがって。なにくそと思ってしまう。だが、几帳面な性格故に本を壁に投げつけることなんかできなくて静かに本棚に仕舞ってしまう。それよりも私は久遠寺久兵の話を書きたいわけではない。そんなへったくれな人間なんて語ることはばかばかしい。それよりも私織田理の身の上についてである。私は小説を中学生から書いています。そのせいか友達もできず時間があれば学校の図書館にいてノートにその当時は小説と呼べるものではなかったのですが文章を書いていたんです。友達も年の数が増えるに連れて減っていきいつの間にか寡黙に生活するようになりました。そんな私を見兼ねてか母親がオウムを飼うようになりました。母親はご飯の時間になると私より先にオウムに餌をやるのでした。母は熱心にオウムに話しかけるのですが一向に言葉を覚えません。私はそんな母親をかわいらしく思うことはありませんでした。

申し訳ないとも全然思いません。両親の思い通りに成長することを中学生の時からずっと拒否していました。大学も行くことは行くのですがずっと一人でゼミでも必要最低限のことしか喋ることなくゼミのコンパなんかには絶対に参加することはありませんでした。その頃もずっと白紙のノートに小説を書いたのです。私の目標として小説家になることは夢でしたし両親への最大限の反抗だとも思っていました。しかし芽が出ることもなくただただ時間を浪費しただけです。社会人になるころには抵抗はなかったですがどこか居心地が悪かったです。社会人になっても喋ることはありませんでした。ただひたすら数字や文言をパソコンに打ち込むことしかしませんでした。私が静かなことにだれも文句をいう人間はいませんでした。定時になったら退社をして給料を貯めて買ったパソコンで会社と自宅の中間にある駅の近くの喫茶店に行き小説を書いていました。母親には残業だと言っていました。土日になると部屋に籠もりずっとパソコンとにらめっこしていました。私だってストレスが溜まることがあります。それをどうやって発散していたか。それは深夜にこっそり起き出してオウムのそばに行き「このクソが」とずっと言い続けるのでした。いつしかオウムは私の言葉を覚えて母親の餌をあげる時に「このクソが」と言うのでした。その光景に私は笑みがこぼれました。私の代わりにオウムが反抗している構図が面白かったのです。私は楽しくなって書いている小説に詰まるとオウムの近くに行きここでは書けないような

罵詈雑言を浴びせました。最初はなかなか覚えませんでしたが言い続けることでオウムは言葉をいや音として認識するようになったのです。最近オウムが変な言葉を覚えたと母親は独り言を言うようになりました。私は今まで見せたことのない笑みを浮かべました。しかし私はオウムに言葉を覚えさせることに夢中になり小説に力を注ぐことができませんでした。そしているうちに二十代が終わりいつの間にか髪が薄くなりところによっては白髪が生え顔の皺が気になるようになりました。三十代はあっという間に終わってしまったように感じます。私の老化はあまりにも自然に進んでいき髪は二十代よりなくなってしまいました。若さは財産だとつくづく痛感します。私より若い作家が増えてきて段々と焦るようになりましたが私には文才がないのかもしれないと思います。今まで飲んでなかったお酒も飲むようになりました。両親も私を諦めたらしく弟に家のことを相談するようになりました。一日に飲むお酒の量が多くなりいつの間にかお酒を飲まないと小説が書けなくなりました。小説なんて人生の浪費なのかもしれません。私は文芸誌の新人賞を眺めてはその作者の人生を想像するようになりました。今はただただパソコンに向かって文章を書いているのです。そうそれは中学生の時に書いていた文章となにも変わらないものになってしまったのです。私にはそこで改めて思います。私に才能なんてないと。窓を見ると外が明るくなってきました。私はお酒を飲み無為に時間を過ごすことしかできなくなりました。

「このクソが」

そう言うオウムの声が聞こえましたがもしかしたら私の幻聴なのかもしれません。私はもうなにもする気力がありませんでしたがすこしだけ面白かったので声に出して笑いました。そう私がクソなのかもしれないと思って滑稽だったのです。と。

（了）

In rhythm——断章

光枝初郎

愛に似た偽りの感情の放出。それは一過性のものであり、ゆえに真実にあらず。好意を抱くはたいてい欲望のゆえなり。欲望と人間は切っても切れぬ関係にあるから、むしろ欲望の現象学を我々は学ばねばならぬ。しかし、自己がこの身体に一度限定されたのなら、もはや欲望を他に抱くことは不可避。決してこれは世界に対する愛ではない……。そうだと分かりながら今日も偽善を生きるのである。虚偽を戯れるのである。詐欺を重ねるのである。愛を消費するのである。

化合物というのは一種の概念である……即ち何かと何かが混ざって新種の物体が出来あがるというそれ。この場合、私が数日前に感じたものものしい吐き気というものも、いわば唯物論的な思考で原因を求めることができるだろう。すなわち、どろりとした父親への感情、そして胃に穴があくほどの酒、酒。いつの日か感じた眩暈もこれに加えてもいいのかもしれない。とにかく情けないものはそれを累乗するかのように何かの効果を生み出し、それがさらに精神的なものに対して悪を送り返す。そういうもので日々ができあがってしまったとき、私たちはそれを絶望と呼ぶだろう。このと

き、絶望へ至る道というのが、案外遠くないことにも、今さら驚きを憶えるのである。

素晴らしいものの組み合わせをひとつ挙げよう。それは太陽と心臓である。その類似点を挙げてみよう……。一、それは世界構成にとって必要不可欠であるということ。太陽は、地球環境が成立し生命が誕生するためにはなくてはならない。かたや、心臓は人間のポンプ、中心である――頭脳と共に、或いは頭脳無しでも（脳性まひ患者を思い浮かべよ）。二、それらは触れられない。太陽は直接見ることができない。心臓を取り出した時にはもう自分は死んでいる。三、それらはどちらもマグマである。おどろおどろしい生命力をふんだんにたぎらせた、真っ赤なマグマ。さてこのことから、ある一つの仮説が導き出される。太陽と心臓は隠喩的な意味において等価であるということ。つまり、人間の心臓は太陽なのである。対象としての太陽ではない。それ自身において、燃えたぎる生命の源、それ自身において太陽である心臓。人間は自己の内に心臓を持つ。つまり、太陽を持つ。人間は内在的な意味において、生命そのものなのである。或いはこう言える。生命、それが大切である、と。生命の哲学の系譜を洗い出す作業はすでに見たところ少なくない場所においてはじまっているようだ……。それとともに、生命―非生命の対立軸、いっそう「生命とは何か」が問われるであろう。このことを問うとき、私たちは生命が誕生した地球の発生にまで遡って哲学

的な、あるいは文学的行為をなすことを私たちの内奥から要請されるであろう……。地球を問う作業はまだ始まったばかりである。

詩的なもの、が……此処、から、退いていく、中断する。しかし他方でこの肉体の五感という五感は研ぎ澄まされていく感触もある。とにかく対立、男と女、資本家と労働者、神と人間、ライオンとシマウマ、政府と大衆、医師と患者、西洋と東洋、昼と夜、何から何まで……。“君とは肌の色がどうも違うようだ”、うむ、それはそうなのかもしれない、さてどうしよう。ねぇ、笑いあえる日はくるか。理解なんていい。ただ、ウィと、存在それ自身を、他としての存在を、半分は肯定できるかのような、そのような態度を人間は形成することができるだろうか？　ひとえに歴史はこの点にかかっている。あなたとは違うもの、それを全肯定するでもなく全否定するでもなく、ただしかしフィリア――友愛――の精神を少しながら持って……。こうして、こうして、最初の詩的な感覚から、しだいに政治の舞台へと上昇していく。

うだるような熱気のこの中心から逸れていく、その衝撃的な死への恐怖、をどうすればいいのか……。何、またスコールがうずまく、それに対して我々は如何せん、どうしようもない、とりあえず小手先で対処したまへ。そんなことは分かっている、し

かしナァ……。暑い、暑い、その熱気が、なんともこの球体をすっぽり包み、なんと、その球体は、どこからともなく、守られ、しかし閉じ込められ、つまり幽閉され、なんだかどんどんわけのわからないことになっていく……。息する、呼吸が苦しくなる、といっても別に死ぬ必要なんてこれっぽっちもないんだがね！　そう、例えばあの人は人生の岐路に立たされた。それから彼がどうなるかは、ひとえに何か真摯なものに懸っているといっても、まったく過言ではないのだ。それも感覚では分かる……。それでは、それでは、私はあの人を窮極的に救うことができるのだろうか？　解答は保留のままである……。

なにゆえAとBがありとあらゆる諸存在の中から一挙に焦点化されるのか……それは存在がその己の中心を生きるがゆえのことである、そのとき彼が持つモノやヒトとの関係性は有限となる。無限からいい加減解き放たれよ。有限を肯定したらば、別の世界認識＝構成がはじまる。

無数の点のざわめき……星などという形容は合わない、なぜならば私は星が動くのをあまり見たことがないから。もっとおどろおどろしく、邪魔くさくて、手に負えなくて、もどかしく、切なくて、許せないような、しかし諸々の点は確かに流動して、あちこちへと飛び交い、それが時に美しい瞬間瞬間を作成する――世界ハ動ク。速度

ゼロから百まで。動かないものなんてあるのだろうか？　そして私は適当に／適度に動いていく貴方を愛していたい。

変身願望。外、を見つめることであなたは何かを取り込もうとする。夢、蝶の夢、例えばそれは夢の中の蝶のように桜の花の色をした幻想的な色彩の……。えぇ、或いは根元から、根っからの異国人なんですねという言い方が妥当であろう、金髪を敢えてウィッグで装うんです、しかしそれはほぼ精神Ｃの持ち主によってまた別のものに変奏＝変装されていく、実に巧いやり方で。けっきょく変身は厳密な意味では失敗するのだけれども、その失敗が新たな道へ結果としてつづいていく、希望があらわれる。変身願望にとりつかれる女の子たちはいつでもときめいている。美しい、可愛い、いやグロテスク、堕落的、変態的、猟奇的、幻想的。トリツカレタラバ、今度はあなたが憑りついてしまうほどに、対象を変えていくのです、あなたが蝶の夢や夢の蝶となって、胡蝶となって、跳となって――。

那由他に拡がる空――無数の煌めき、ただ短いじかんの中で見ることのできる、感じることのできる、そんな世界があった――ある。夜だよ、夜の闇だよ、ここにはコンビニエンスストアも無いから、星がよく見えるね。天文学者の息子或いはそれに準

じる者。ねぇ、なぜ星は在るのだろう、それとこの地球を見た人は「地球は青かった」なんて言ったらしいけど、それは本当なのだろうか？　青い星……聡明で、透明で、たくさんの命を決して放り投げようとしない、それが地球……なのかな。星。なぜ簡単には宇宙に行けないのだろう、たくさんお金を持ってないと、いやそれはやっぱり、星を見れる人は限られるんだよ……なんで？　幻滅とかいろいろしちゃうんじゃないの、実際宇宙に行くとさ。成程、そういうこともあるのかもしれない、地球とあの小さな煌めきは、信じられないほど距離が遠く隔たっていて、でもその存在を確かめる術はある。そう、那由他に拡がる空、幾つもの煌めき。僕たちはいつも空を見上げて、元気をもらう。

ひるはひだりによってよるはみぎによってよりてこころここにあらず。がんめんのなかにてあかいろのにほひあらわれたり、かれらこいなかにありしとぞしる。

螺旋階段につらなる一つの部屋、そこから瞬く光が現れて、その光は螺旋階段の艶美なうねりとともにひとつの系列をつくる――そうしてできた系列からまたほかの系列へ、そうしてそれらが集まってひとつのまとまった世界を作る。さきほど在った部屋はもうだいぶ遠い、それはしっかり包まれて安全な場所にある。この世界は僕た

ちの記憶を優しく守る。記憶は安全に保管されて、いつでも引き出されるように。偏執的なところはない。僕たちはポケットからひとつの鍵――それは金色である――を取り出し、その世界の扉をそっと閉めておく……ふたたび開かれる時が来るまで。

一筋の光……その光のなかには暗きぬめりのようなものがあって、それは人を惑わせもするし、それればかりか人の心を誘惑して、虜にさせるどころか、人を堕落させ腐敗させる危険性をも秘めている。それを美的だと形容することもできるだろう……。光にはどこかおぞましい側面がある。そう、綺麗で聡明なイメージとして塗り固められたものでは決してないということに、私たちは思いを馳せなければならない。光、それは誘惑するものである。飛んで火にいる夏の虫たちのように？　なぜ数多くもの人が、そういった光を飽くことなく求め、一部は退廃の道へと溺れて行くのだろう……。堕落への美学、いや美学などともったいぶった表現をしなくとも、それをそれとして肯定する私たちの態度が求められているのかもしれない。光、それはいつも両義的なものである。光、それは美しくもあり、同時に汚らわしいものでもある。光の悪点を肯定することができようか？　光に翻弄されていく人々、その人生、そのなかで葛藤し、あるいは激怒し、それでも真摯に受け止めようとする態度……。光ヲ肯定セヨ。単純に実行できるものではない。私たちはそれを理念として受け止め、光につい

て思考や感性を発揮させ、光以上のものを追求することができる、そんな夢想を抱くことはできよう、思念はどこまでも自由であるのだから。

分からないことに罪の刃を向けることは非道徳的なのであろうか。無〈知〉に罪を問うこと……。〈知〉の形態は二つある。一、ある事物を知る／知らないのレヴェル。情報というおぞましきものが氾濫する中で、何かひとつの物事を知る／知らないことに果たしてどれだけの価値・重みがあるのだろうか？　知らないことに対しては何の罪も問われない。二、理解する／理解できない／理解しないというレヴェルにおける〈知〉。サヨクとウヨク、オトコとオンナ。「君を理解できない」。対立という枠、軸足が与えられたうえでの唾の引っかけ合いならまだいいのだ。特に立場を取らないこと——つまり最初のレヴェルにおける「知らない」を特化した存在者のこと。拒絶者。これも存在論的カテゴリの一つの形式である。問題的なのは、この〈拒絶者〉——何モ我ニ寄セツケルナ……——と、「知らない」の立場／存立の間で揺れ動く者なのだ。そしてその揺れ動く者たちに対して理解を呼びかける、一連の運動の意味……。分かってほしい、分かってくれないと話ができない或いは話せば分かる、等々。ここには、他性というものがまだよく思考されてもいない、倫理の欠如（ある種の、という意味ではあるが）といったものが認められるのかもしれない。啓蒙の限界。

ことばをつかいすぎないようにすること、ことばを敢えて使わないこと、ことばを止めてみること、ことばを使うことは文字通り魔法の効果をもたらすということ……。ありていにいえば、魔法使いについてもう少し多角的に真面目に調べて考察するひつようがあるのだということ。ことばはそれとしては何の重みも幅も持たないしかし、書かれたり話されたりしたときに効果を発するようになるから、それだけで現実世界に多大な影響を与えるということ――その原初に立ち返れば、ことばをつかいすぎることに対してもっと僕たちは慎重になれるかもしれない。

曖昧な領域の中で、きいろの君だけを取り出してみる……君は甘くて切ない、よく卵の焼かれたプリンの味覚。君から嫌われたくなかった。僕はたぶんずっと前から君が好きだった。だのに何も反省的でない僕は、君から距離を取ろうとした。丸みの中にある中心、それはとても秘蹟的で、そこからまばゆい瞬光が幾筋も放たれているのだ――そのために君の顔はいつもよく見えず、ぼやけている。その輪郭の曖昧さがたまらない。それでも君は僕に対して真剣に腹を立て、ここととあそこが気に食わないの！　と言って、僕を心底驚かせた。あまりに君を失ってしまいたくなかったから、僕は卒倒寸前だった、といえばそれは言い過ぎなのだろうか？　もう一度、この瞼の

なかで、君が僕に笑いかける。君はポラリス。

フロリダから一種の防衛戦―線をはってここまでつなぎとめる、苦いコーヒーの味。暑い夏だからレモン果汁がよく染みる。私この前筑波に行きました、とてもクリーンな街並みでした、それ以上も以下もなし。そのあいだにこぼしたコーヒーでつくった一本の線に、蟻が群がる群がる、レモンの果汁に群がる群がる。それは駄目です、捨ててておきなさい違うんだ母さん。所詮は子供、さりとて百七十回の奇跡をおこなう。白い宝石を見つけた時が全てのはじまりだった。そうこうしているうちに蟻は群がる、こぼしたコーヒーとレモン果汁に蜜を求めて群がる群がる。おい、今鐘の音が聞こえなかったか、幸せの音が、いやあれは単なる時報だ。鐘の音を聞いて神経症にかかった老人がいた。今や群がった蟻はたちどころに黒々とした領域を作って、こぼしたコーヒーやらレモン果汁やらを全て埋め尽くしてしまった、それらの存在など跡形もなく奪い取ってやるかの如く。

kioku toku no kioku hoshi yume sora ai dokoka no kioku ituka mita nizi dokoka de okita senso kohi no azi yume ha yume de atta dokokaraka hitotuno utaga kikoeru natukashikute totemo sensaina dokokaraka sukui ga kaesareru

tikaraduyoi tashikana toku no kioku yume de atta kioku natu no kioku.

今の人間が生きることはそれだけで真の犯罪を構成する。生き延びようとする意志はすべからく罪的である。

詩を書けば、世界が現れる、否、世界と自分との見えるようで見えない糸、道、そんなものが現れる。突如として現れる世界との結び付きに、いろんな角度から眺めてみては、もがいたり、それを必死で掴もうとしたりする。僕もかつてそんな高校生だった。詩を書け、詩を書け、歌を書け、ポエムを書け、自分の叫びをあげろ！　そんな事を言ってみたい。こんな時代に、言葉というものにいろんな人が挑んでいくのも悪くはないだろう……。

今のところのドゥルーズについて。時間が経てば経つほど、『差異と反復』はますます謎めいた書物のように感じられ、ドゥルーズの思想に対するドゥルージアン（追随者）の理解が様々に増えていく。小林徹氏の手による『経験と出来事』の言明は素晴らしい。氏による『意味の論理学』の素描と、それから『思想地図 vol.4』に載っている千葉雅也氏のそれの解釈とを読み合わせると、ドゥルーズが哲学の世界観の地図と

して提示する表面―表層―深層という三つ組の構造論は、私にはますます地球の地質学的構造のアナロジーのように思えて仕方ない。表面、つまり地球の地上、地表では、人間たちがモノをいい、勝手に高層ビルなどを建てては〈自然〉破壊に勤しむ。このことに、意味はないのだ。それは、例えば資本主義に究極のテロスといったものは存在しないように。「意味の意味はない」、その非意味の論理を掴むこと。

地球の深層では、マグマが沸き立っている。私たち人間はそこに立ち入ることができない。管理もできない。星の謎。星の中心には、燃えたぎる破壊的で生命的なマグマがいつも在る。

地球の深層というと、私はモグラを思い浮かべる。地層の中を自由に？　勝手気ままにかは分からないが、掘っては動き回ってミミズを食べるモグラ。確かに彼らは地上の世界から身を隠している。ミミズもだ。ミミズは地上で捕えられたら、人間の魚釣りのエサなどにされたりもする。環世界。モグラ的生＝ツイッター的（いつ浮上しても構わない、過去のツイートを「掘る」、基本的にはネクラな連中がワイワイやる空間、等々）だとはいえないだろうか。モグラの生態学とツイッターの社会学との総合が必要だ。

ドゥルーズの研究者たちは、（一）ドゥルーズ本人が何を言ったかの解明に次第に決着をつけはじめ、やがて（二）ドゥルージアンとして思想を批判的に継承していく、

という動向になりつつある。それにしてもドゥルーズは「危険」な思想家だ。ドゥルージアンが大真面目に自分たちの主張を展開しはじめたということは、これから世界には危険がまとわりついて離れない、そんな戦慄にも恐怖にも似た事態が待ち受けていることを示唆している、間違いなく。

月を見る—月を想う。あの星の表面に奇しくも人類が舞い降りただなんて！　私には信じられない、ひとつも信じられない。あるいは月に舞い降りた宇宙飛行士は遂に地球に帰ってくる事が出来なかった……、とかいうほうがまだマシだ。月に人類がいるなんてバカバカしすぎる……。地球と月との絶対的距離。夜想曲の旋律が、消えてしまう。日本人も西洋人もそれぞれに想いを馳せたあの月は、将来見る影もなく跡形を消すかもしれない——。

In rhythm. In-rhythm, rhizome.　リゾーム、リズムの中に。リズムの中へ。この馬鹿げた精神と身体をリズムの中へすっぽり包ませてしまうこと。ダンスの境地。音楽だけが在る、何と美しいんだろう！　世界は声 voir の響きでひしめきあっている、あなたの声、私の声、誰かの声、リフレイン、リトルネロ。

愛が美しい。何が美しい。人が美しい。誰が美しい。彼が美しい。どれが美しい。緑が美しい。何が来る？　誰が来る？　聞こえない声にそれでも注意して耳を傾ける……音の複雑な絡み合いがある。誰も聞いた事のない音がある。誰も実現したことのないリズムがある。誰も思いだしたことのない速度がある。頭の調子がちょっと重い、でも体は軽い、何よりもバランスが大切だ。今日は誰が来て、明日は誰が来て、昨日は彼が来て、明後日は彼女が来て、来ることだけが来る。何度も、何度も。

藍色のガラスの破片が宙に飛ぶ。夢だと思って夢の中でその破片に手を伸ばす。掴もうと思ったらそれは球体になって手をかすめて横に飛んで行った。何もかもが曖昧だ。路上でギコギコと三輪車を走らせる男の子。上から受ける日射しに眩しそうにして男の子についていく若い女性。体があたたかい。そう思って手を見たら段々水の中で絵具が溶けて広がっていくように、手の輪郭も空気にゆっくり溶けていくのが分かった。膨張。何度も見たことがある。こうやって消失することは悪いことではない。声が飛んでいく音がはじけとんでいく。真昼の既視と消失、幾つかの光と色、怠惰。

（了）

アットマーク

新嶋樹

同じはずの朝が暗くなり
時間に閉じこめられてしまった

ワイパーで雪を払う
もうそんな季節になった

だがこの冬はまだ浅い冬だ

明日から昨日へとうろつき回りながら
自分に宛てた手紙に返事を続けるうちに

車の窓が凍りつき
ボウルの湯をかかえて走り回る
ほんとうの冬が来る

分かったからもう少しだけ
時間の中に突っ立っている

@

スタバの窓から覗き見る駅舎の入口
行ったり来たりする老人の
瓶底眼鏡に映りこむバス
かれはどこに行きたがってるんだろう

制服の姿はもうない
白い息を吐いていたあの子もあの子も
今頃は鉛筆を動かしているんだろう

さめた珈琲を飲んでいる自分
一日が平常運行しているのを知る

@

午前から午後の変わり目
また指を剥いていることに気づく
足元に溜まった白い剥きあと
これらすべて自分だと思う

捨ててきたものを寄せ集めたら
何かできるかもしれない

診察室の窓の外に風はなく
松のてっぺんにはひ弱な枝
前屈みに歩くタクシーの運転手

今日も指を剥いていた

@

鮮やかなサインが欲しい
誰も分からず気に止めないが
わたくしには瞬間それと知れるもの

終わりのある回路が欲しい
熱を帯びて止めようもなく
から回っているのはかなしい

洗い立ての猫のしっぽが欲しい
ふれようとする手を止めて
ずっと見惚れているだろう

あと少し自由になれ

@

夜になり
雨の音を聴いている

ある人はこれを
騒がしいイナゴの群と思い
ある人はこれを
爆弾が落ちると思う
またある人はこれを
かき消された詩人の声にするだろう

映画の前編だけを
撮り続けるような日が

どうやら今日も
ひと段落するらしい

読書灯をひねり
雨の音を聴いている

○

一つの完璧なたまごが
二つに割れたら
片方は死んで片方は生きる

また二つに割れたら
死んだ方の片方は生きて片方は死ぬ
生きた方の片方は死んで片方は生きる

死んで生きて死んで生きたり
生きて死んで生きて死んだり

陽炎の立つ道を
歩いていく人たち
消えてまた現れて

@

さみしさよ
あんたのことが大好きで
魂の伴侶みたいに思ってますが

あんたの脚をぶったぎり
火にかけ
じっくり炙りながら

しみ出すダシでニコニコと飯を食う

そういう気でいることを
あんた分かっているんでしょう
だからあんた
そんなにさみしそうな顔
しているんでしょうね

@

水が蛇口の先を
突き破って落ちる

重い闇に満たされた台所の
磨りガラスの扉の奥に

いなくなった家族たちが
笑い声を立てている

欲望は
何色だろうか

みしみしと鳴る床の上に
花を落として足を投げ出す

@

冬の一日前の夜中に
二基の点滅信号機

その光にあぶり出された
よるべない影に

首根っこをつかまれる
――影の足音を聞けるだろうか？
お前はそんなもんだと言う
肩のうしろを見てみろと言う
部屋に辿り着くまでに
何度も撫でさすって確かめたが
そこには硬い骨しかなかった

@

立方体の水槽に
おちつかぬ沙魚が一尾

壁に唇をぶっつけ
砂をかき立て
かれの立方体を
泳ぎ回っている

夜に水を替えられ
魚は全身を真黒にかえた
濁り水に肌を合わせた沙魚の
開かれた目　アレルギーの呻き

水はかれを
静かに見ている

外では冬の風が
何かに当たっている

@

きれいな女の子が
鼻くそをほじり
それを口に運んでいる

バックミラー越しに
後ろの〃ー〃の瞬間を目撃する

前の〃ー〃の眼の光に
釘打たれていながら
（知っているか、知らないか）

女の子は窓の外に
次の鼻くそを投げる

まるで羽根が
生えたみたいに人間だ

前のランプが消える
もう誰もいない

@

生き物たちが夏を
少しずつ盗んで
消えていったから

隙間を見つけて
音を立てるのは
風ばかり

あの夏のにおいを
うまく想像することすら
できなくなっている自分は

前屈みで歩きながら
一年前のコートのポケットに
飴の包みを見つける

ずいぶん待ったね

pentimento

Naokona Jellyfish

『世界が消えてしまえばいい』
と言う君に
かける言葉なんてなにもなかった
本当に君が望むならそうなっても構わない
それでも
ひとつ聞いて
私の前に延びた道はいつも石ころだらけだった
下ばかり見て走っていたのに
転んで擦りむいてばかり
気楽に生きるってことは案外容易いって聞いたよ
でも分かんない分かりたくない

『すべてを感じてしまっていたら疲れはててしまうだろ？』

いつも君の言葉は正しいね
だけどね
馬鹿な私
すべてを感じていたいんだよ
君と食べたお菓子の味も忘れない忘れたくない
君と私はおなじ人間じゃないってことが嬉しくて悲しくて

真っ暗な階段を一緒に降りてくれたよね

君が最初に描いた絵に塗り込められた汚い絵の具をゆっくり剥がすよ

私の前に延びた道は石ころだらけだったけれど
下ばかり見て走っていたから
色んなものを見つけた

私の宝石箱まるごと君にあげる
だから

もう少し笑ってほしい

君の望みがそれでも
世界を消すことなら

一緒に終わらせてもいいよ

真昼の濁水

深街ゆか

（とても澄んでいて、青みを帯びていたかもしれない）
銀色にかがやく産毛をなであげる真昼の風にもたらされた余白も
まぶたのあたりを遊びまわる光の粒みたいに
折り重なるようにして成長するあからさまな
水に浮かべるという意味のめまいのような症状だったのかもしれない

（反射する光、手鏡をともだちの顔にむけて湯気のたつような明るさに）
竹櫛でといてもとけないくらいに絡まった植物の蔓は薄切りにされて
そんな遊び
どこでおぼえたの
あなた
おさとがしれてしまうわね、と微笑むともだちの

池の水面がただれるようにさんざめいて赤ん坊のころの記憶のように
ぼんやりとした光のなかで赤いスカートが
風をはらみ無数にふくらむ様子はきっとえいえんに繰り返される

（溢れだしてしまうほどになって、濁った水のよう）
花柄の便箋にまっすぐ流れる罫線をせき止めるように落とした
生まれるよりまえの受精よりもあとのところで
いくつかの原因はこしらえてあったのかもしれないと
花壇に咲く花をふみつける猫の模様とよく似た地形の街で
薄いヴェールを何枚も重ねたような
熱を帯びるごとにだらだらと湧きでる手紙を
だれかれかまわずに送ったことを恥ずかしくおもう

（風がふくたび、あつい層になった沈殿物が舞い散って）
ここからそこまでの傾斜に咲いた花のかおりにむせて

暗記したはずの数え唄の歌詞をわすれて夜がとおく感じるまぶたを
まっすぐにとじて泣くふりをするまでは

（とても澄んでいて、青みを帯びていたかもしれない）

小人の夢　他

白熊

小人の夢

私は両手を広げて仰向けになっていた。掌に乗る程の裸の小人が自分の周りで動いていた。五人か、六人か。五十センチもありそうな、大きな包丁を持った者が三人、四人。皆同じ、じじいの顔で、鷲鼻に細い眉と目を顰めて、口はへの字で貼り付いていて、口としての機能は持っていないようだった。生まれてこの方同じ表情で、同じように作業を繰り返す、それが彼らの役割なのだろう。

小人がその包丁で、私の丁度、あばらの下の胴を切り落とした。またもう一人が左肩の付け根を切り落とした。切り落とされた腕は、付け根から五センチ程に輪切りにされていった。神経の切り離された腕は他人のようで、段々と短く形を失って

いく。神経は繋がっていないが、痛々しい。手首を切られると掌はぶつ切りに。下の方では左脚も同じように切られていて、右足に取り掛かるところだった。

――ここで夢は終わり、目が覚めた。雨戸の閉まった暗い部屋と天井があった。暫くベッドから出られず、頭だけが動いている。

自分の体は何でできているのだろう。食べた物だろうか。今の自分は、どういった結果、どういった産物なのだろう。

外は雨が降っている。雨の叩く音が、誰かの足音のように聞こえる。日は過ぎていく。濃度の薄いスケジュール。年末まであった仕事はもうない。

大掃除に、ベッドの下にあった過去の物を選別して大分ゴミに出した。余計な過去の物は捨てて、色々な重みをなくそうとした。捨てる時、確かにあれはゴミだった。しかし年を明けてみれば、ゴミを捨てた結果、何もなくなった自分がここにある気がした。物以外の積み重ねてきた経験も、また同じゴミだったのだ。

布団から這い出てベッドに座る。切られた両腕と両脚は残っていて、痛みなく動く。居間に降りるとストーブの前で手術した足を揉む母がいた。

「体が不便なく動く事は大変有難い」というのが、最近の母の口癖だった。

オリンピック、ワールドカップ……。華やかな言葉の陰に住む。ぽっかりと黒く塗り潰された過去の上に、今の自分の歳が乗っている。積み重ねてきたと思ってい

た物も、ゴミのような物だった。自信のなくなっているのが要因だとも分かっている。ならば、自信を持つことができれば解決できるのだろうか。

自分の頭と動く体があるのなら、低賃金でも、将来に繋がるのか分からなくても前に出てみようよ。前に出る一歩。それは体に付いた脚ではなく、心のことなのだろう。

鮪

齢八十、漁師の又郎は寝床についたまま、目を覚ますことはなかった。その報せは半日のうちに漁師仲間やその家族に伝わり、葬式の日時も確認された。

漁港の中では、きょうも朝早くから沖へ出て、沖から戻った三十隻の漁船が、荒太いロープで繋がれ小さく揺れていた。陽が昇ってからはずっと、晴れた空ではウミネコが白い羽を伸ばして漂い、南風に乗ってないている。

又郎と同じ鮪漁師の源三は、家族の誰とも話さなかった。蠅が留りそうな目は、部屋のどこか隅の一点を見据えていた。一人の漁師のいなくなった夜は、漁師達の心に静けさを感じさせた。

まだ星の見えるうちに漁師達は沖へと出て行く。ただ一艘、又郎の船だけは、誰も乗り込む者がなく、出掛けた飼い主を待つ玄関先の犬のように、繋がれたまま海へ出ることはなかった。漁師達も、何も口に発しないが、沖へ出ない船を意識していた。又郎の隣に船を繋いでいる源三も、みなと同じ、いつものように口をつぐんだまま、又郎の船の方を一瞥もせずに、沖へと出て行った。

陽が昇り、小学生、中学生、高校生達はうちを出て、学校へと白いヘルメットを並べて歩いている。未明のうちに沖へ出ていた船は、漁港に戻ってきた。しかし、源三の船だけは、いつまでも戻って来なかった。漁師達は、帰って来ない源三の船に無線を入れてみたが、源三からの応答も返ってくることはなかった。この日、又郎のうちで御通夜が行われ、親戚達が手伝って、明日の葬式の準備をしていた。

翌日も源三が帰って来ないまま、又郎の葬式が始まった。海から戻ってきた漁師達は、みな潮を落として喪服に着替え、又郎の家に集まった。

漁師達の車を連れて、霊柩車に乗せられた又郎の棺は火葬場へと運ばれていった。茶毘にふされ、骨壺に入れられた又郎は、娘夫婦と共にうちへ帰ってきた。火

葬場へ行った者達は、車の窓から又郎の船の隣に、源三の船が結ばれているのに気がついた。骨壺は写真と共に仏壇の前に置かれた。

その夜、漁師達は又郎の家で共に食事をすることになり、準備を始めた。海の料理がふすまをはらった居間に並べられていった。二日沖へ出たままだった源三が、大皿を五つ持って現れた。源三は今朝獲った鮪だと、皿の一枚を源三の写真の前に置くと、しばらく手を合わせていた。その夜、漁師達は、又郎の家の料理と源三の獲ってきた鮪を食べながら、尽きない又郎の思い出を、夜遅くまで語りあっていた。

愛の夢

紙屑の見当たらない小奇麗な、花壇と、幅のあるブロックの道は、緩い下り坂となって伸びていた。視線が掴みえるその先には、駅と隣にある踏切と、踏切の上を渡る歩道橋があった。僕の居場所は、梅雨明けの、踏切まで続く、向こうへ行くだ

けの交わらない道の上。伸びる空は帯のようで、綿を丸めた雲が糊でとめられたように浮いていた。

母親に見えない程若い笑顔の、横顔を見せる女が、僕の前の道の上で三児の子供を連れて歩いていた。一人で生んで、育てゆく三つの子供達。駆け降りても駅は近づかなかった。空も、そのままに動かなかった。

風の如く。駆け下りる速さの、とどまる手前で、勢いのままに、その女を後ろから、強く抱きしめた。突然のことに、芯は硬直していたが、腕の中で締め付けられた彼女の体は、柔らかかった。

以後彼女は一人じゃない、僕も子育てを手伝った。彼女の夫と、子供達の父親の二役。それがその時からの僕の人生だった。

走り回る子供達。この道の上で、僕達夫婦は二人で、写真を撮ったことがなかった。道沿いに並ぶ店を覗いても、窓ガラスに映るのは子供達だけ。ガラスは僕達二人を映さなかった。何も僕達の姿を映すことはできなかった。

ここまで歩んできた人生は、僕のほうが短かった。若い僕が先導した。奏でる右手と左手のメロディライン。リストの途切れることなく、次へ、次へと。

僕より彼女が訊いてきた。これまでどんな人と付き合ってきたの、と。蟠（わだかま）るような過去はなかったから、「無い」が答えだった。

成長した子供達は、別々に自分の道を歩んでいった。二人の間で時は流れず、僕達は歳を取らなかった。お互いの、何も変わらない顔と、愛。

この道の伸びつく最後。近づいてきた歩道橋と踏切。駅では電車が出発を待っていた。

子供達が巣立った今、その裁断を受けようか。

木の葉の舞う、駅の隣にある喫茶店。甕（かめ）の縁まで達した水面、風がさざなみを起こしている。木目を基調とした店内。シンプルで白い、四枚の羽が回っている。本棚には辞書と時刻表。これまでここで何人が開いて見たのだろう。言葉は意味を慎重に、これからの目的地を探そうか。店内に流れる、サロン調のピアノの曲は、愛の夢。

二人向かい合って、珈琲を一つ口にした。それから僕は云った。

「これからも、愛したい限り、愛せばいいさ」

女は答えた。

「愛したい限り愛しても、そんなには、続かないものよ」

無題

白の制服を着た女の子が二人、腕を組み合って道を歩いていた。片方が笑って相手に身を預ければ、もう片方も笑って身を傾けた。校則ぎりぎりに合わした二つの短いスカートが跳ね、声が響く。気付けばこういう女子高校生も少なくなった。

うちを出た女は歩きはじめたが、足はどこへ向かっているのか定かでなかった。鞄を持たずに出歩く女は珍しい。ラッシュは過ぎて、通りの流れも落ち着きを取り戻していた。いつもと違う道を歩いていいと、頭はそれに気付いている。無意識に足は習慣をなぞる。今までも決めていたわけでないのに、毎日同じように歩いていた道。途中、道を渡って反対側の歩道を歩いた。逆の歩道から自分の歩いてきたほうを見た。

いつもと同じ道をなぞったために毎日利用していた駅に着いた。足に任せて向かえばここかと、幾らか女は自分にがっかりした。今日は定期券を持っていなかった。行きたい先もない。改札の前を通り過ぎて、奥の出口から外に出た。

小さな商店街、この街に引っ越してきてから、こちらにはあまり来たことがなかった。左手には赤いくすんだ提灯の居酒屋が、右手には開店前の小さなパチンコ屋

があった。夜の遅い店はどこもまだ眠っていた。左手奥の八百屋が軒先に野菜を並べていたが、人の姿は見えなかった。朝の家事をやっつけて、急ぎ足でおそらく電車に乗ってパートに向かうおばさんが駅のほうへ歩いていった。両脇に並ぶくすんだ店。少し左へ蛇行しつつ、駅へと向かう一本道のシャッター街が、川の姿に重なった。

ペルシャ湾に注ぐユーフラテス川、始まりはメソポタミアから起きた、川沿いに並ぶ古い営み――。

――自分の頭のどこからこんな言葉は浮かんできたのだろう。いつもと違うところに足を踏み込んだためか。女は自分のらしくない思考を不思議に思った。

先に見える黒壁の店のドアが鳴って開いた。深い皺の顔の女で、櫛を通していない金色の髪をカチューシャで押さえ、体には長く着た黒のドレス、薄い唇に煙草を挟んでいた。両手で持ち上げた、白地に黒の大きく店の名前の書かれた内側の光る看板を出し、そして営みをなぞるようにして箒で塵を掃き始めた。自分と違うところに生きてきた女だった。嫌悪感は抱かなかった。おそらく自分の母親と同じ年頃だ。

商店街の真ん中に立ったまま、周りを見た。その女の他は何も動いていなかった。遠くのほうでホームの電車の出発を告げる音が鳴っていた。

あっ

金曜日夜八時すぎの地下鉄。仕事のやり直しをくらって帰宅が二時間延びた男は不機嫌だった。中央駅で地下鉄を降りると私鉄の改札へと向かった。

地下街の店舗で新しい石鹸を売り出していた。近くまでいくとその匂いがはっきりと分かった。男には匂いで思い出す女がいた。学生時代に好きだった一つ年上の女だった。

女は大学四年の時に中国へ留学した。男は女とSNSで連絡を取り合っていた。男は女の帰国を待った。迎えに行こうと帰国の日時を訊いた。しかし、その返事はなかった。それから何年もの時が流れていた。

地下街を抜けて私鉄の改札を通りホームへ向かった。行き交う人の中で男は一人の女に気がついた。それはさっき思い出した女だった。通り過ぎる時、男は視線を動かさなかった。男の横顔を見ていた女は男の背中に「あっ」と声を上げた。二人の周りにこの様子を見ていた者がいれば、容易に久しぶりに知り合いを見つけて声を上げた女と、それに気付かずに通り去っていく男の関係を、見て取れたことだろう。

男はホームに来た電車に乗り込んだ。夜の車窓で女に見られた自分の姿を確認した。もしかしてメッセージを送ってきてないかと、久しく使っていないSNSをスマホで開いてみた。しかし、何も来てはいなかった。

あの時は男のメッセージに女が返事をしなかった。男はずっと無視されている立場だった。今日それまでの立場が入れ替わった。声をかけて無視されているのは女のほうになった。これで男は女を無視している立場を得た。相手に渡せたのは無視のバトンだった。もしまた女が男を見つけて声をかけても、それに男が応じなければ、一生この立場は入れ替わらない。今日の仕事のこともあって男は嬉しさを覚えていた。

男は帰宅するとそのまま風呂に入った。湯船の中で思い出していた。女は声をかけてどうするつもりだったのだろう。しばらく考えていたが、あそこで女に返事をしたとしても、自分がしただろう行動は、アでも、ハでもない、鼻から息の抜いた音を吐いて、あからさまに気のない様子で「久しぶり」と答えるだけだ。あの後の展開はなかったのだ。展開はないのだから、やはり展開のないにも関わらず、行動した女が悪かった。男は自分の正しさを感じた。

久しぶりに思い出された恋は、展開のないまま一抹の虚しさと共に終演した。風呂の窓からは中秋の月が見えた。男は自分の正しさを共有できる相手が欲しいと思った。

ローレル

霜月、富山は黒部渓谷。小雨の降る、宇奈月駅のホーム。

写真をとる、ホームの色を持たない乗客たちが、赤い客車に乗っていく。すり減った、古いカメラを手に、自分も幅の狭い乗車席にこしかける。長く連なった車両。走り出す。四軸の、オレンジ色のトロッコが二台、客車を牽引していく。

ふもとと離れる、はじまりの、赤く大きな新山彦橋を渡っていく。色づいた山の木々に、降りてきた白い雲がかかっている。向こうでは、ビニール傘をさした人たちが、こちらに手を振っている。

橋の向こう、山に空いた、丸いトンネルに入る。トンネルが連続する。抜ければ、黒部川を横目に走る。きれいな青碧色をした川の水。木の幹に、隠れるように

して見える仏石。山の斜面は、赤、黄、橙。雲の白。ゆたかな彩りに包まれた世界に、むろいが滋る。

客車に動力はなかった。黒薙の駅にとまると、エンジンの音が聞こえない。山からの音だけの、静寂の世界。僕をとおりこして、流れていくのは、色を持たない人の声。家族連れやカップルが、ホームへと降りていく。

続く線路。続くトンネル。心地よい揺れ、疲れ。まぶたがおもたくなる。トロッコの走る音も、とおくなっていく。

歩いて、歩いて、歩いて。思えば遠くへ来たものだ。木々の間にのびる、先の見えない細い道を、ゆるやかな、坂道を、走らず、時折立ち止まり、立ち止まっては、歩いて。六年の月日が流れていた。

「石の上にも三年」というけれど、僕は六年だった。人よりも、要領が悪い、効率が悪い。人が一つ間違えば、二つのことに、気付けるところを。要領のいい人なら、三つ、四つと、気付けるところを。僕は一つ一つ、人からすれば、同じ間違いだということも。時には自分でも、同じ間違いだと思うことも。

強くない。そんなに、歩き続けられる、ものではない。時には冬季歩道。立ち止まり、休み、うずくまって、情けなく泣いてきた。

子供が黄色い帽子をかぶって、小学校に入って、卒業するまでの期間。中学、高校と、青少年が思春期をやりきるまでの期間。それと同じだけの月日を、一人、歩いてきた。

うっかりまどろんでいた、自分に気付いて外を見てみると、トロッコは雲の中。終点、欅平の駅に着いていた。手に新しいカメラ、ホームへ降りる。ここまで乗ってきた人間は、気付けば僕一人。

改札を抜ける。僕はそこにいた、色のない女性から、「おつかれさま」と、頭に枝葉の冠を頂いた。

タヌキの哀しき皮算用

人間界には「捕らぬ狸の皮算用」などという、けしからぬ言葉があると云う。

何の因果かヒドイもので、家族でどんぐり拾いに出かけたのが運の尽き。道中山腹でダダダンと音が鳴り響いてびっくり仰天。腰を抜かしてばたつく足に任せるま

まに、一人離れた茂みへ跳び込んだ。ガタガタ震えながら地面にへたれた家族を眺めていると林の奥から影が現れた。見れば立って鉄の筒を持つ熊のヤツ。どうもあの筒で離れた処から家族をなぶったと見える。

近頃キテレツなカラクリが人間界で流布していると聞く。熊は体がでかいばかりで知恵の無いものと思っていたが、いつの間にあんなカラクリ筒を手に入れたのか。前足で器用に家族の亡骸を摘むと奥の茂みへと姿を消した。

昨日までの日々が夢のよう。一転、天涯孤独の身となりて、憎き家族の仇敵、熊のヤツを絶滅せんと心に決めた。しかし小生には手段も知恵も何も無い。無き物求めて人間界の万屋へと降り立った。

「おや、これは珍しいお客さんだ、どうなさいました」

「実は熊に、家族の敵討ちをしたいのです」

「ほお、敵討ち。ほな、このてつはうなんぞは如何でしょうか」

「おお、それはまさに熊が持っていた鉄筒」

「どうぞどうぞ、これを持ってお行きなさい」

「しかし、小生には銭がありませぬ」

「構いませぬ構いませぬ、見事熊を撃って来られたら、手前が熊を買いとって差し上げます。そうすれば借金は返せますぞ」

「それは有難い。ではそうさせていただきましょう」
山へ戻り、鉄筒を背負いて匂いを手掛かりに探していると、遠くで寝ている熊を見つけた。油断しているのかヤツの鉄筒は見えぬ。こちらは構えをとって、引き金を引いて熊を撃った。一発、二発と撃ち込むと熊は舌を垂らして地面に伸びた。小生は熊を引きずって万屋へと持ち帰った。
「では、手前は皮を剥いでこれを外套に致します。ささ、狸さん、まだまだ熊が足りませぬぞ。借金には利息という物が御座いますからな」
それからは鉄筒を背負いて山へ出かけて熊を撃ち、万屋へ持って帰ってまた出かける日々の連続。憎き熊を撃つはいいが、借金は利息で増えるばかり。
「ささ、お客さん、まだまだ熊が足りませぬぞ」
狸のマタギとはこれ如何に。きょうも熊のヤツを撃つ為に、鉄筒背負いて出かけます。あの鉄筒を持つ熊とは出会えぬまま、本当の敵はどこにおるのか。日に日に万屋は熊と狸の皮が増えていく。
ああ、哀しき因果、ここに極まれり。

連

載

マイ・フーリッシュ・ハート（第二回）

る

そういった音色が僕の耳のなかで、まるで小さなコップにオレンジジュースを注ぐかのように、溢れ出しそうになったとき――こういった空想は、ちょうど今が夕暮れ時であるから、僕の頭の中に現れたのかもしれない――一人の花売りの少女が、タタラン、と上手にステップを踏めないで、西日色に染まる街路で、佇もうと思ったわけでもなく、丁度、佇んでしまっているのを見つけた。それに至る過程を注視していると、彼女の足取りというのは、他の少女達のように、この世のことなら何もかもわかりきっているの、といった風の、訳知り顔で、かつはっきりとしたステップではなく、足場のつかめない、真っ暗闇の山の中で、我々人類が強いられざるを得ないような、あの朧げなステップを、踏むかと思ったら、途端に次のステップのやり場を失くしてしまうような次第で、動力を失ってしまったネジ巻き人形のように、だんだんと歯切れが悪くなり――とはいえ最初から歯切れが良かったとはいえないのだが――やがて動くことすら適わなくなる、というのを、何度も繰り返していた。僕はそれまで、西日色に染め上げられたこのとりたてて注釈する必要も感じられない街路にあって、タタラン、という健気な音楽に、ある種のセンチメ

ンタリズムを刺激されていたのだが、その少女――彼女はすでに舞踏というものを半ば諦めていた――の弱弱しさというほどでもないが、なんと言えばいいのか、つまり、覚束なさに、はっきりとステップを踏む他の少女達にもまして、心を奪われていたのだ。彼女を見つめていると、不思議と、詩のことを思い出さずにはいられなかった。幼いころに読んだことのある詩、というのも僕はかれこれ２０年近く、公式に詩と銘打たれた書物を読んだことはないのだが、不確かな記憶をたぐり寄せていくと、そこには確かに、詩、と呼ばれうる、或いはそう呼ぶほかないような記憶の領域に突き当たってしまう、というよりも、もっと柔らかく繊細に、或いは真綿のようなもので包み込まれてしまうように、僕の思考のベクトルというものが絡め取られてしまうのだが、そういう原初の記憶の領域というものははっきりと、というほど確かなものではないが、僕にとっては自明と思われるようなあり方で、脳みそのどこかに存在していて、彼女がまた覚束ないステップを踏むたびに、そういう幼い頃の記憶、というか感覚が、愛撫されるように、他の雑多な領域から際立たされ、識別され、意識のうちに首をもたげるのを感じたのだ。

いつまでもこの光景をみていたい、そしてそのまま朽ち果ててもいい、というような感覚が僕の考える力を奪い去ろうとした時、座っていた街路沿いのベンチからは見えない方角にある公園から、大勢のダケントルルスと思しき足音が背後に迫っ

ていることに気がついた。威勢よくステップを踏んでいた少女達はダケントルルスの足音が聞こえるや否やそのステップを止め帰路についたことを、僕は誰も居なくなった街路を見ることによって――このとき僕は紛れも無くその街路を見ていたという事実と、その見ていたはずの街路から一斉に少女達がいなくなってしまったことに気付かなかった事実との相反する状況に、自らの認識能力を疑いの目を向けた――知った。けれどもその一人の少女だけは、いつまでも、そのステップとは呼べない、ステップを踏もうとし続けていたのだが、花を売るべき相手もまた、ダケントルルスの足音と共に去ってしまったことに気付いたのだろうか、いつのまにかその行為はきれぎれになっていき、しまいには薄い闇が垂れ込めるただなかで、どこか救い手を求めるような目つきで中空を見つめているだけになっていた。

明くる日も仕事を終えた僕は、彼女のあのステップとは呼べないステップを、舞踏と呼ぶにはあまりにも覚束ない、その足取りを、求めるようにその街路沿いのベンチに座っていた。その足取りが、僕にとってとてつもなく大事なことのように思われたのだ。けれどもそれはとても微かな予感でしかなかった。しかし予感とは一体なんだろうか、とすかさずそれを問わずにはいられなかった。僕は予感という語彙が持つ、ある種未来への志向性を、訪れるべきものという性格を、頑なに拒絶したい気分になった。それというのも僕が彼女を通して得るものというのは、全くも

って僕の過去であり、ただし過去と呼べるほど確かな、つまり遡れば確かにそこにある、という確実性を完全に放棄したものであるのだが、結局は過去としか呼びようがない領分に属している事柄であることに変わりない、その曖昧な心の揺れは、ただただもう訪れないものを懐しむ感覚としてだけ、この身体というフィルムに焼き付いた残影としてだけ、僕に享受されるべきものだと思われたのだ。しかし（と僕は思った）それは同時に予感としか呼びようがないものではないか。頑なに過去という領分に押しやられたそれは、本来訪れるべきものとして、つまり未来として、僕の中で萌芽しつつあるものではないか、とも思われるのだ。

彼女は今日もまた、あのステップとは呼べないステップを、舞踏と呼ぶにはあまりにも覚束ない、その足取りを、誰に披露するわけでもなく、繰り返していた。その一歩一歩に、僕のある感覚が、他の雑多な領域から際立たされ、識別されていくのを感じ、その感覚が僕の意識の中でもうこれ以上ないくらい膨張しきったときに、「きまって」ダケントルルスの足音が聞こえるのだ。きまって？　と自らにそう問いただした。しかし、きまって、としか言いようがなかった。僕はこのとりたてて注釈する必要も感じられない街路沿いのベンチに座って、一人の少女が繰り返すあの覚束ない足取りを「再び」眺めていただけのはずだった。にもかかわらず、僕にとってそれは「きまって」としか言いようがないかたちで現れ、いつのまにか自

らが寓話とでもいうべき、いわば必然性の迷路に迷い込んでいることを確信した。つまりこの出来事が、過去にも起こり、現在にも起こり、そして未来にも起こり得るという、通常我々が関わり得る出来事とは全く異質なあり方で、つまり一種の寓話として、今、現に差し迫っているということを、一抹の恐怖を覚えつつ、確信したのだ。少女は「いつもと同じように」薄い闇が垂れ込めるなか、視線を中空に固定したまま佇んでいた。薄闇のなかで、大勢のダケントルルスの背に敷き詰められた尖りが、街灯の光を受けて、ぼやぼやと浮き出しにされ、やがて街路の向こうへ消えていった。

家に帰ると、そこには見慣れた家具や日用品や嗜好品がいつものように配置されており、確かにその配置というのは見慣れたものであるのだけれども、決して今日の午後に感じたような必然性の迷路という現れ方ではなく、一回性というものを帯びて、つまり僕が今、靴を脱ぎ、玄関に上がって洗面台の前まで行き、手を洗うために泡立てたこの石鹸が、やがて小さくなって、この世から消え去るだろうという確信を伴って現れ、僕を安堵させた。僕は今日の午後の出来事について考えようと試みたのだが、その試みはいずれもうまくいかなかった。それは論理の届かないところに位置する寓話であり、まるで蝶のように思考の少しだけ上方でひらひらと舞うだけであった。そうしているうちに時計の針は十分に深夜と呼べる時刻を指し示

していたし、のしかかる睡魔もじわじわとその重さを増していくように思えたのだが、僕はある一つのことが気がかりで、このまま眠ってしまってもいいのだが、という考えを押しのけ、かといい何かを一心に思い悩むでもなく、夜の独特な孤独感の中で、どこかしら浮遊感を持ったように感じる自らの心情を、ただ闇雲に浮かばせるままにしておいた。その心情というのは、言うまでも無く、今日の午後――それは昨日の午後でもあり、同時にかつてと呼ばれる時間全てでもあり、そして未来でもあり得るのかもしれない――に感じた、あの少女が引き起こした感覚に違いなかった。彼女のあのステップとは呼べないステップ、舞踏と呼ぶにはあまりにも覚束ない、あの足取りというものを、僕は以前どこかで、遠い昔か、はたまた遠い未来で、確かに経験したのだ。詩、と呼びうる、そう呼ぶほかないような領域を……。一昨日、あの部屋で――そう、部屋と呼ぶほかないその空間で――ある詩人と思しき人物に出会ったこと、そして彼を直感的に詩人だと断じたこと、彼もまたこちらのことを詩人だと知っていたことを思い出し、その記憶がまさか嘘ではなかったか、と疑念を挟んだが、スーツに入れっぱなしにしておいたあのフジツボを見つけ出し、やはりあの日起きたことは確かに、つまり夢とか幻の類ではない、現実として起きたことだということを確信したのだが、それと同時に、僕は、何故そのことに今まで気付かなかったのだろうか、何故彼は僕のことを詩人だと知っていたの

か、そして何故僕はあれほど簡単に自らを詩人と自称することができたのか、といった次々に溢れ出てくる疑念に愕然とした。

つまり、僕は生まれてこの方、詩なんてものを一度も書いたことがないのだ。

瞳　子

常磐誠

連載第二回　追想劇

今時の子供っていうのはお受験も珍しい話ではないよな、なんてことを思いながら、私は自分と同じ制服姿の中学生を見ている。夏の陽射しを受けて緑の葉がキラリ。目にうるさく輝く。正直、うざったらしい。

私はその制服を中学生の時には着ていなかった。至って普通の区立小学校、区立中学校の卒業で、この高校には一般入試で入ってきた手合いだ。

ピアノの道に進む気満々だった私は、特別なことを考えることもなくこの高校に進学していた。

成績的に中学校の教師からは進学校を勧められたりもしたが、部活強制入部とかいう時代遅れも甚だしい校風だったり、課外とかいう時間泥棒制度があったり。

そういうものには反吐が出る。それだけあっさり三者面談の場で伝え、私はできる限り自由に過ごせる時間、イコール、ピアノに向き合う時間を増やせる学校を選んだのだ。その選択は、間違っていなかったと思っていた。

校門をくぐる。気が重たい一日の始まりだ。
靴の中に画鋲が仕込まれている、なんてことはない。そんな直接的な暴力などという頭の悪い行動を取るような連中ではない。
特進クラスに進学できたことを誇りに思う連中というのは、一体どれくらいいるだろう？　親、親族なんかはまだ喜ぶのもいるんだろうが。……うちは、違ったな、とか。
そんな断片的な、無関係なのかちょっとくらい関係のあるのか、そんなこともわからない、というか、どうでもいい、断片的な思考を廻らせながら歩いて教室へ向かう。
あぁ、今日は早起きしたはいいけど、ピアノ弾けなかったな、というか、何を律儀にピアノ禁止令遵守しているんだろ、私。
それも思ったけど、ため息しか出ない。運動不足気味の腕、手首、指をぶらぶらさせては、ハァ。またため息。教室のドアに手をかけて、横に動かす。すると、
ボスン、という音も立てずに黒板消しが私の目の前数センチ先を通り過ぎ、床に落ちる。
「……」
何も言わない。何も言えない。
私はただそれを拾って、元の位置に戻す。

「んだよ〜。結局引っかからねぇんじゃねぇかよ〜」
「だろーよー！　ま、これで私の勝ちだから〜！」
「ちきしょ〜持ってけ泥棒！」
「やったね今日の昼飯ゲッチュ！」
背後で流れる下卑た声を背景音にしてやり過ごしながら。
もう、こういう手合いに筆談器を向ける気分には到底なれない。
制服が可愛い、学費高い。特進は学費免除。女子校で。お嬢様学校なんて言われているそうだ。
現実の姿がこちらになります。拡声器片手に叫び出したいような気持ちになったことが去年はあったが、もう今やそんな風に思うこともなくなった。
ここは私の居場所じゃあない。去年の話。そう思わせるだけの話が去年あっただけ。
去年も私は勝てなくて。芸術を、私の音楽を、理解できない連中に親切にされまして。
その後ろで、その陰で、結局あいつは勝っていった。今日家に帰る頃には到着しているだろうか。瀧中琥太。はとこで幼馴染。
私とは、違う存在。
私があいつと違うのは何だろうか。三歳の頃、思い切り抱きつかれた時、あいつが男の子であることや、私と比べて随分とデカいこと。真っ先に思う『違う』はそこで。

そんな表面的な部分だけで気づきが済めば、それがベストで、ハッピーだ。そりゃあそうだ。親戚ではなくて、もうこの事件以来二人が出会うことがなければ、琥太が赤の他人同然の人物であれば、今私が思うような気分にのめり込むこともなかっただろう。もう何度繰り返したかわからない問答、暗闇に纏わり付かれたまま浮かび上がることも許すことができないまま、私は今日という一日を過ごした。

どういうやり取りだったか今更思い出すこともできないが、朝のホームルームが終わった後、一体何故なのかわからないが私が一人で床を雑巾がけしていた。ため息を吐く若い女教師と、一時限目、移動教室の授業に遅れたことが、どういうわけか脳にチクチクと不快な刺激を与えるイメージを残していた。

家路に向かう道の途中、時間的にもう新緑のうるささを感じることはなくなったが、どうしたって私の中にその緑を受け入れる度量などある訳もなく、やっぱり私はイライラしていた。

そのイライラは別段周りを攻撃するような感じでは一切ない癖に、妙に私のことだけは念の入ったしつこさで付き纏い、私を淀んだ暗がりへ連れ込んで行く。

あれ、私ってこんなだったっけ？　なんて、らしくもないような感じの気持ち。

小学生の時、柚眞ちゃんは強いから良いな、なんて言われていて、その意味がよくわからないまま、中学生になって、いや、その前から、そう。もっと前から。私、強

いと言われ続けていた。母から。近所の人達から、弟から。学校の友人、教師、気づけば、私はその言葉に流されるようにして強いと思い込んでいたような気がする。強い人だと思うようになった気がする。

だから私、今自分のことを、『いつの間に、どうして私は弱くなってしまったんだろう』なんていう風に思ってしまったんだ。

もう何度目のため息かなんて数えてられない。嫌になる程積み重ねたため息の後、私は家の門を開ける。それと同時に、

「おっかえりー！」

と私を出迎える上半身裸の大男。去年よりまた更にでかくなったのではないか。

「そろそろじゃないかなって思ってだがっ！」

発言の途中でも構わず顔面を殴りつけてやる。勿論グーでだ。握り拳、全力で。

「いたいー！　出会って三秒で殴られたよ？」

どうして殴られたのか理解できない様子で能天気に顔を押さえる琥太は叫ぶ。

『何故裸なんだ。どういう了見だ。野生児か。東京から出て行けカッペが』

「すんごく責められてる！　なんかよくわかんないけどごめんなさい！」

すっかり腰が引けた様子の琥太を尻目に、私は玄関を乱暴に開ける。気が重たい時に、また目にも気分にも悪いものを見てしまった。玄関を開けた先には、

「うっす。一年振りだな」
と先の奴よりはずっと紳士的に挨拶してくるケビンがいた。服装も、まぁ薄いTシャツ一枚に短パンという出立ちではあったが、野生児スタイルよりかは遥かにマシ、というところだろう。こちらも、あいつ同様、また体が大きくなっているように感じた。「仕方がないんだよ。稽古の時に服着てると落ち着かないんだもん」
貫太相手に何かの申し開きでもしているのかぐちぐち言いながら琥太が玄関に来る。
「だーから言ったろ？　服着ろって」
金色の、少しだけ癖のついた髪の毛をいじりながらケビンが呆れた口調で言うと、
「いやいや。ケビンが言ったんじゃん。裸で一発稽古かますくらいワイルドな方がインパクトあってモテるって！」
「だからそれを真に受けて実行に移すからお前モテねーんだってこのデーテーが」
「何を！　というかそれお前もだろうがクソデーテー！」
二人の豚ー　矛盾してるしそもそも豚に失礼か！　が喚くその隣で、
「デーテーって何？」
と貫太が聞くが、
「「子供にはまだ早い！」」

と二匹が同時に鳴く。オーインク。オーインク。
つまり私には早くない、ということか。女子なんだが。これでも。そう思った私はこの二匹の後頭部を思い切り鷲掴みにすると、そのまま全身全霊、あらん限りの力を込めて情熱的に接吻させてやり、そしてそのまま部屋に向かう。それを受けて三人もこちらに向かってくるのだが、
「お前の所為で俺まで攻撃されちまったじゃねーかクソ」
「んだと！　人を担いでおいて挙句そこまで人の所為にするとは人の風上にもおけんぞこのバカ」
「くっそー。今もいてぇわクソ石頭が」
「はんっ！　鍛え方が足りねーんだよ何のために髪生やしてんだよ軟弱」
「やんのかテメェ！」
「やってやるよ後で表出ろ表！」
「ねぇデーテーって何！」
「子供にはまだ早い！」
そんな様子で未だに吠えあっている声を遠くで聞いて私は、またこの季節が来たんだな、なんていうセンチメンタルな思いを抱く。……訳がない。
居間に入ってきた所を筆談器の角でぶん殴る。ターゲットは、琥太。

「何で僕……だけ……？」
頭を抱えしゃがみこみ、涙目になっている琥太を尻目に、
「そりゃまぁ琥太の坊主頭は殴りやすいよなぁー」
ケラケラ笑いながらケビンは部屋に向かって歩いて行ってしまった。
ケビンは幼少期から体の大きさが祟り結構乱暴な性格だったそうで、それを心配した両親が伝を頼り巡って琥太と共に相撲を始めさせた。力の使い方を学ばせた方が良いだろう、という曽祖父の意見だったそうだ。詳しいいきさつはもうおぼろげになってしまっているのだが、ドイツ人の両親としては相撲のあの格好だったり、乱暴な性格を心配しての相談なのに武道を学ばせることだったりという部分に対し多少、いや結構な心配を抱いたそうだが、
「まぁずっと全国三位圏内なら文句ないっしょ」
と飄々とした顔でケビンは言う。そしてそれは、本当のことではないらしい。
元々あそこの地域では相撲が盛んで、琥太やケビン以外にも、元気、昴、健太と、合わせて五人の豆力士がいたことになる。元気や昴はケビン、琥太以上に体が大きく性格も粗野というか乱暴で、そういう連中に揉まれていく内にケビンもかなり丸くなり、今に至っている。
力で勝てなくとも、やり方はある。そんなことを小学生の頃から口癖のように言っ

ている琥太とケビンは普段から馬が合うようで、しかも勉強もできる……というか、勉強ができる手合いだからこそ、馬が合っている部分もあるのだろう。二人は相撲部がある中で一番偏差値の高い高校に通い、勉強と部活を両立させているのだ。

夏休みで学校がない代わりに宿題に塗れる貫太の為に今年も勉強の面倒を見る約束が既についている様子だった。

元気と健太は相撲部がある高校の内、偏差値の低い方へ進学した。二人とも、勉強は苦手な様で、中点連結定理の文字を見ようにも、目が上滑りするらしく、その定理の名前すらも覚えられなかった。というか、中二の三角形の合同条件すら覚えられない様では色々と察しがつく程度。脳筋という言葉がピッタリだと琥太、ケビンが笑うとむしろ誇らしげにする辺り、そういう連中というのはやはり平和なものだと思わずにいられない。

では昴は、というと。

「でも去年も言ったけどまさかスー兄ちゃんが中卒でプロの相撲取りになるとは思わなかったなー」

しみじみと貫太が琥太に喋りかけ、

「うーん……。厳密にはプロじゃないんだよね。あいつもう十七になるのに未だ序ノ口序二段行き来してるレベルだし。給料ないんよ。鍛え方足りないよね。正直」

目を瞑り、少しだけ不機嫌そうに、顔をかきながら琥太が答える。
中学生になってから琥太は昴と一悶着起こしたらしく、それが解決したにも関わらず琥太はやっぱり昴のことになるとほんの少しだけだけれども、こうして不機嫌な顔をしてしまう。
小学生の時は本当に五人とも仲良しで全国大会の度にこの家にやってきては貫太を弟分に六人組としてわんぱく振りを発揮したものだったが、中学生になってからは急に昴がグレてしまい、相撲とも距離を取ってしまうようになった。
琥太がそれをどうにかしようとして動こうとし、騒乱になることを恐れたケビンが異常なまでに気を利かすようになってかなりピリピリした雰囲気が三年前、私達が中二の時にあった。
結論を言えばケビンの努力も虚しく、中三の時にタバコを悪びれもせず吸っている昴と鉢合わせしてしまった琥太が完全にキレて昴を病院送りにしてしまい、五人全員が進路の前途が危うくなるという事件にまで発展してしまったが、そこは琥太の祖父母や昴の父親を始め周囲が色々と手を尽くしたのだろう。どんな方法を使ったかは知りたくないし知ろうとも思わないが、無事に進学組の四人は希望通りの進路を取ることとなった。
その引き換えというか何というか。昴は琥太の祖父が親方を務める部屋に入門する

こととなった。どの道学校にも通わず落伍していたような奴で、卒業したらドカタかヤクザかみたいに噂されていたから、ついでに拾っておいてやるかという親方の親心だったそうだ。

琥太は昴のこととなると決まって口にする。

「あいつさ、才能は絶対にあるんだよ。体も百九十二あるし。うちらの中で一番大きい訳よ。ほんっと。もっと徹底的に鍛えないとダメだね」

私はこいつらの事情は知ってても相撲は知らない。興味もない。貫太が漢字の書き取りを必死に進行させている横で愚痴っているどデカい図体が昴に対し何を思っているのかも、別段深く理解しようとは思わない。ただ、ぎしぎしと音を立てて戻って来たケビンは、

「まぁあいつもあいつなりにやってんだから大丈夫だって。けどま、教習所でのやらかしはマジでらしいというか、ウケたよな」

丸くなっていった為か、絶妙に空気を読んで気苦労を抱えるようになり、琥太をキレさせないようにするのに随分と腐心するようになったと思う。

「琥太のキレ方ってもうあれだし。烈火っていう表現がピッタリなんだよ。もう俺あれ見たくないんだよ。もうね。マジ殺されるって思うから」

そんな風にケビンや昴を始めいろんな奴が表現する琥太の怒り方なのだが、私はそ

の伝聞が信じられない。
「あぁ。そうそう。あいつブランク長かった癖に何か勘違いでも起こしたか昔みたいにやれるつもりで体動かして挙句怪我したんだよね。ウケるウケる」
鼻で笑う琥太には少しだけの悪意が感じられる。それはケビンも、だ。
「「救急車ー！　救急車呼んでー！」」
ハモった二人と、ハモったことにおかしさを感じた貫太が笑い転げるテーブルの上を見て、
「……」
無性に私は筆談器をそれぞれの頭に落としてやりたくなった。楽しげな話、楽しげな笑い声そういうものが、何か自分に刺さるようで気持ち悪い。男同士のやり取りだ。それは少なくとも私の今日受け取ったアレとは違う。それは理解できても、どうしても気持ち悪いものは気持ち悪いのだ。
「……さぁて、九月場所に向けて頑張ってる奴がくしゃみをしたであろうところで。うちらも集中しましょう、か」
私の呪うような、少なくとも素直に笑い話に乗れない目線を感じてか、空気読みのケビン、ではなく能天気な方の琥太が、言うのだった。
琥太の何が信じられないのかと言えば、それは顔つきだ。頭の不出来な貫太に勉強

を教える今でも、琥太はいつだって笑っている。にこにこと。へらへらと。
いつだって笑っているんだ。私がいる側で、こいつがキツそうに、辛そうにしている様子なんて見たことがない。
小学生になり、琥太達がこっちに来るようになってただの一度も、琥太が泣いた顔を見たことがない。
泣いたことはあるらしい。五人組の中でケンカすることも珍しくはない。その結果、なんていうこともあるにはあったそうだ。
その時私が何かの用事で、例えばピアノのコンクールとかで出かけているタイミングだったりしたこともあるにはあったが、どうやら違うらしい。琥太は私のいる所で泣かないようにしていて、そういう時には必死に隠れて泣いているらしかった。
何の為にそういう風にしているのかわからない。訪ねたこともあるが、
「男の子は泣いちゃダメだからね！」
得意気な顔をしてそんなことを答えるのみだ。いつだって笑っている。私の中で琥太は、いつだってにこにこと、へらへらと、笑っている。まるで唐変木だ。
そんな琥太が、強い、と。怖い、と。そんな評価を受けることが私にはどうしても理解できずにいる。さっき筆談器でぶん殴った時も、あいつは私を呪う一言も発することなく、ごめんね。うるさかったね。と私に手話で返してくるだけだった。

そういう風に、気遣うようにして笑い手指を振る周りが、琥太が、気に食わない。私は、そういうのを望んじゃいない。もう一発ぶん殴ってやりたいと思った。実際に私は筆談器を振り上げていた。でも、

「……」

それでも琥太は、多少びっくりしてはいたけれども、笑っていた。殴りたければ、殴ればいい。そんな無言の伝言を差し出すようにしてあいつが笑うから、私は結局その腕を下ろすしか、なかったのだった。

三人が勉強を進めている間に私は席を立ちお茶を飲んでいた。後で三人の分も出してやるつもりで盆と人数分のコップも用意している。氷を入れ、冷蔵庫の中の麦茶を入れてやれば、後は持っていくだけだ。私はそこまでは準備しておいて、どうにもすぐに戻る気分にはなれず、じゃあどうしてここまでクソ親切に準備しているのか、自分でも理解できず呆れていた。

琥太は頭が良い。私が喋れないことを踏まえ、一年生の頃から曽祖父に教えを請い手話を覚えていた。

私はどうせ皆手話を理解できないだろうからと父に子供用の軽い筆談器を準備してもらっていた訳だが、琥太は筆談器がいらないことを出会ったその日に手話で伝えてきた。これ以上ない程のドヤ顔で。

琥太は頭が良い。そして要領が悪い。私の中で不愉快な気持ちが湧き上がり、筆談器で頭をかち割ったことは言うまでもない。琥太は泣かなかった。でも、涙目だった。私が怒られた。泣くまで怒られた。

その年、私と父が指点字で話しているのを見た琥太が今度はそれを覚える！　と息巻いた。私と話をするのならもう今の状態で、というか、そもそも私が筆談器を使えば手話すら必要ないのだから何ら問題はないのに、何をそこまでと私も母も曾祖父も琥太を引き止めた記憶がある。しかし琥太は折れなかった。結局、父が熱心なのは良いことだとかなんとか言って、教えることになった。

指点字を教えられるのは私と父の二人だけで、これは流石の曾祖父もマスターはしていなかった。

参考書もあまり豊富にある訳ではなく、しかも子供向けとなるとなおのことだ。頭が良いと言われることの多い琥太もこれは時間がかかったが、三年生の時にマスターしたよ。という連絡があり、その年の出会いの時にはいきなり手を取られ、

『これでいっぱいナイショでお話できるね』

とか言われた。ドン引きだ。思い切り股間を蹴り上げたのだが、うまく足を閉じられてしまった。

「あぶない……。あぶなかった……」

私は、冷や汗に濡れた琥太の額のテカリと汗臭さを今でも忘れていない。
更に来年。琥太や私は小四になった。この年はこの年で、何を言われるんだろうかと私ももう半ば慣れっこになってしまったきらいがあり、
「琥太君は柚眞のことをとても好いてくれていますからね〜」
「いやいや。でも僕より強くならないことには娘はあげられないかなー」
といった具合に茶化す両親のことも冷めた目で見ていた。
『久しぶりにまた会えてこた、とってもうれしい』
があいつの言葉だった。あいつの一人称は、ずっとこた、自分の名前だった。
『柚眞もそうだよね！』
私は待ち合わせ場所に着いてからただの一度も笑っていない。ニヤリともくすりともしていないというのに、何故にこうも自信満々なのかと私は呆れ、
『これで喜んでるように感じられるお気楽な脳細胞がいっそ逆に羨ましいわ』
と一蹴し、更に父親が全盲であることを良いことにその指をつねりまくったりもした。
『えー。でもこたは嬉しいからいいの』
とニヤニヤ笑いながら打ってくる文字にイラついた私は手を振り払い、筆談器に殴り書いた。

『指点字の為に仕方なく手を繋いでやってるの。少し嬉しそうな顔しないで』
これにはちょっとだけがっくり来ている様子だった。更に小一になった貫太が、
「あ、それ俺も少し思った」
と気の利いた助け船を出したおかげで、今回はあまり怒られなかった。
琥太は琥太で、
「こた、単純だからってよく言われるんだよね……。えへへ。気をつける」
そう言って今回ばかりは反省している様子だった。
そんなやり取りがいつまで続くのかともう本気で飽き飽きしていた頃、曽祖父が息を引き取った。
また、あいつと顔を合わせないといけないのか。という落胆というか、いやーな気持ちがドッと溢れてくるのを感じて、ひいおじいちゃんが死んだ、という現実よりも、そのことの方が何故か重たかったことを覚えている。
それってどうなんだろうと自分でも思うのだけれども、自分のことよりも幼馴染の方を意識することを多少喜んじゃうような人だと思うから、まぁ良いか、なんて思ったりもする。……いや、これは祖母から言われたことだったりするのだけれども。
結構な覚悟を決めて曽祖父の葬儀に参列した私だったが、琥太は予想していた以上に私に絡んでは来なかった。私に気づいていないなんていうことはなく、何度も目が

合い私に微笑みかけていたりはしたけれど、あいつは話しかけて来なかった。
曽祖父が骨になる時に、
―　泣くもんか。……泣くもんか―
震える唇がそう動いていて、既に私や周囲の空気にほだされた貫太が泣いたりしているのに、琥太は最後まで泣かなかった。骨になった、元々百九十六センチもあった曽祖父の、一抱えになってしまった姿を見ても、そのグロテスクを目の当たりにしてもなお、琥太は泣くことはなかった。
私は、その時の琥太の顔を、目を。早く忘れたい。

そう思った時、廊下と台所を仕切るのれんが動いたのに気づいた。琥太だった。
「戻りが遅いなって思って。これ、準備してくれたんだ。ありがとう」
いつも通り琥太はにこにこ笑って声をかけてくる。
昔のことを思い出し過ぎた。夏の暑さにやられてしまっているのか、気が減入ってくる。
「あんまり無理しちゃダメだよ。柚眞。今日は早く休んだ方が良いんじゃないかな。顔色がわ……」
悪いよ、と言おうとしたのだろうが私はそれをテーブルを拳で打つ音で断ち切って、

『うるさい。アンタに言われなくても自分の体調くらい自分で管理できる。黙ってて』
そう手話で言ってから横を過ぎ去ろうとして、ぽかんとしている琥太の背中を軽く叩いて、
『ねぇそうだ。小五の時の話なんだけど』
そう話しかけた。突然のことに面食らった様子の琥太は微笑は絶やしていなかったものの、少しだけ体が疑問に傾いていた。
『あんたって何で五年になってから急に自分の事、僕って言うようになったの』
という質問にあいつは、
「えー？　内緒」
少しだけの気恥かしさを湛えたような顔をしてごまかしてきた。
『そういうのいらないから。答えてよ』
と私が食い下がっても、あいつは
「小五ってもう十一歳じゃん。一人称がこた、ってのはいい加減どうなの？　っていう話だよーそんな深い意味なんかないってば柚眞ったらやだなぁ」
とにこにこした笑顔を崩すことなく答えるだけだった。だから私から核心を問う。
『ひいじいちゃんが死んだこととは無関係なの？　本当に関係ないって言えるの？』
曾祖父のことを出した時、その瞬間に琥太は後ろを向いた。ほんの一瞬だけ、背中

越しに琥太の表情に緊張が走ったような雰囲気を感じた。表情を隠したから、体から感じたものかもしれない。

とにかくその一瞬だけ、琥太は笑顔でなかったように感じられた。

「……」

無言のまま琥太は歩き出す。手には私が準備したお盆。続きは戻りながら話そう、という意味だろう。その分厚い背中にぶつからないような距離をとってついて歩く。

「別にひいじいじから一人称を改めろ、と言われた訳じゃないよ」

私が横についたのを見計らって琥太が口にする。表情はいつも通り。にこにこと。へらへらと。

ひいじいじ。幼い頃から琥太が曽祖父のことを身内に話す時の呼称。これは幼い頃から変わらない。

「ひいじいじには別のことを伝えられたんだ。もっと、別のことをね」『どんな？』

という私の問いかけに琥太は、

「うん。ごめんね。それは本当に内緒」

ときた。私は無言のまま睨んでいた。

「今話すのは気恥かしいから。それにお茶も氷が溶けちゃうと薄くなってまずいでしょ？」

どうしたって核心を話すつもりはないんだろう。私が知りたいと思った琥太の変化のきっかけを、私はついに知ることができなかった。年齢を重ねたなりの成長、ということにしておいてよ、という琥太の言葉は、要はそれが不正解である証にしか思えなかった。うまく言葉にできないとかいうような不器用な感情の類ではなく、明確な不正解。「よぉ。お長いラブラブチュッチュのお時間は終わったかい？」

軽いノリで語るケビンの妄言を筆談機の角でお返しして、どうにもすっきりしないままで私はその日を過ごしていた。

次の日、私が夏休みの課外から帰ると家では竹刀の打ち付け合う音が響いていた。夏休みということもあり、子供達（私と同年代、というか高校生もいるにはいるのだが）の気合いの入った音は、ピアノに集中している時には別段意識しないというのに、何故だか今日はやかましく感じられてしまう。夏の暑さの気だるさ、蝉の鳴く声にやられたように立ち尽くす私を、

「よう。おかえり。琥太の奴がまた例の奴やってんぜ。丁度いいから柚眞も見に行こうぜ！」

ケビンが見つけて声をかけてくる。

『何で私が』

という手話を見てか見らずか、

「はいはいこまけーこたぁ気にすんなってんだよ。あいつもお前が見てたら気合い入るぜ～」
と調子良く私の鞄を引っ張り込んでいく。そして私の部屋の前につくと、
「んじゃ、道場に集合な！」
とだけ言い残して豪快な笑みを浮かべたまま消えていった。
そのまま私が来なかったらどうするつもりなのだろうか。まぁ、それはそれで構わないんだろう。
「うっわぁ～もっちね～！（勿体無い、の意味だ）だから来いって言ったのに～」
とか何とか、もったいぶった言い方で今日のことをハイライトしてくるんだろう。
例の奴、というのは父が自分の鍛練を兼ねて琥太に対して『いつでも隙があるようなら打ち込んで来い』と伝えているちょっとしたゲームのようなものだ。
中学生になってから始めて、まだ一度も琥太は父に一本たりとも打ち込んだことはないと聞いている。
琥太が打ち込むすんでのところで父の持つ竹刀の切っ先が琥太の喉元に向かっているパターンが基本形らしく、どんなに卑怯な方法を用いても父は完璧に反応するらしい。この稽古をやった日は必ず貫太やケビン、元気や健太がよくこの話をするから、私も結果だけは毎年知っている。

ただ、ついに去年。高校生になった琥太は父に成長を認められた。一本打ち込んだのではなく、逆に面打ちを食らいかけた訳だが、父曰く喉元に切っ先を向けて止めるだけの余裕がなかったのだということで、少しだけ父は上機嫌だったことを覚えている。

それ故だろう。

「……」

蹲踞の姿勢で座り父の様子を見ている琥太が面と小手だけは防具を付けるようになり、妙な格好をしているのは。

『なにそれギャグ？』

「ほっといてよ……」

自覚しているのか、琥太は落ち着かない様子であった。

竹刀の打ち合う音、床の踏み込みの音。気合いを込めた怒鳴り声の応酬。瞬間的に交錯し合う木でできた、殺傷能力のない刃物達。

こんなもの、に父は人生をかけている訳だ。弟も、ここにいる門下生の一人ひとりも、人生、という程大仰でないにせよ、間違いなく青春はかけていると言って良いはずだ。

命のやり取りという程ハードなものでもなく、不必要に優劣なんかを競い合っては

明確に、そう。完全に白と黒が定まっちゃう世界で。彼らは、あと少数の彼女らは、生きているのだと思うと、私は窮屈に思えてきた。何が自分にそう思わせるのか、よくわからない。なのに、息苦しい。私は、一体何をしているのだろう。世界は全く異なる次元を私に見せるように急転しているようだ。今まで私が見てこようとしないでいた舞台は、今の私には気持ちの悪いものにしか映らなかった。正座する足が痺れる。立とうと思う、でも立てない。隣の琥太が、肩を貸そうと近づくが、断った。不恰好になっても、少しだけ足を崩し、楽をする。貫太はともかく、私は門下生ではないから、その姿勢を悪びれる必要もない。そもそも、父は目が見えない。

琥太は時折、立ち上がっては見よう見まねで竹刀を振っている。面だけの、一番単純な素振り。何年か見て、やっている内にそれしかない、と思ったらしいことをケビンや元気が言っていたような気がするなと、そんなことが過る。だが行かない。その素振りを何回かすると、また琥太は蹲踞の姿勢へと戻り、竹刀を置く。竹刀から手を離せば、無言のまま、目を閉じてしまうのだ。

『お父さんに一発入れるんじゃないの？』

あんまりにも琥太は父のことを視界に入れず素振りと蹲踞を繰り返しているから、ついに私も無関心で居続けることができず、琥太の体を叩いて手話で話しかけてしまう。

「……ないんよ」
稽古の邪魔にならぬよう声を潜めて返事をするが、私はその意味を解しかねた。それを察した琥太が、言い直す。
「隙が、ないんだよ。お父さんには、隙がない」
俄かに信じがたい言葉だと思った。何故なら父は今私たちに背中を向け、二本の竹刀を両方とも利き手でない左手側に、それも少し遠いところに置いていて、門下生の指導を口頭でしているのだ。防具もしていない。
当然、ハンデというか、自身を追い込むためだろう。防具の有無や狙うタイミングについても一切遠慮はいらない、というルールになっている。
私だったら、もう小突きにいっているところだろう。
「ああやって誘うんだよ。狙うと見事に切っ先が突き刺さってる。弟子の皆も師匠の電光石火の逆転劇を期待しているしね。今まで何回やられたことか」
少しだけ饒舌に琥太が言うと、父が振り返りにっこりと笑った。なるほど。……そういう腹積りだった、ということか。私もそんな父を見て納得した。
「あの笑顔も、正直に言って怖いよ。柚眞のお父さんは、強いし、怖い」
当たり前のことしか言っていないから、
『何当たり前のことをさも大事なことのように言ってるのかわかんないんだけど』

と返事をすると、
「そうだよね〜。近すぎるし、わかんないよね〜」
そんなわからないことをへらへらっと言うと、琥太はまた立ち上がり、素振りを始めた。結局この日、琥太は父に一度も向かって行くことがなかった。行かないとケビンのハイライトがうざいんだろうな、と思っていたのに、とんだ拍子抜けも良いところだ、と私は思った。
ところが、だ。この日の夕食時、
「琥太は強くなったね」
そう父がおもむろに言うのだ。琥太も琥太で、
「ありがとうございます」
と一言返す。ただそれだけ、だった。そのやり取りに一切興味を示さないケビンは貫太と大量の肉を奪い合っていた。
「三回、だったね。どうして一度も来なかったの？」
すき焼きの鍋に締めのうどんを追加する、というタイミング。それを母が取りに行った時に、父が琥太にそう尋ねた。
「三回ってバレてる時点で、つまりはそういうことかと」
少々投げやり、というか苦笑いを浮かべて琥太は答えた。苦笑いには、悔しさも確

かに含まれているように思える。
「三回って？」
流石にケビンや琥太と張り合い根性でついて来ていたが限界を迎えた貫太が、仰向けに倒れこみお腹をさすりながら尋ねると、
「お前あの場にいたのにわかんなかったのかよ」
とケビンに腹を潰されながら返された。「ぐえっ！　ケビンさんやめてっ！　死ぬ！」
と貫太が苦しそうな声をあげると、
「ケビンの横で満腹になって横になると危ないから僕の隣においでよ」
と親切そうな笑みを浮かべて琥太が言う。貫太はさっきのダメージがよっぽど応えたか、そうしようと体をよじらせ移動を始める。すると、
「琥太はそう言って腹の上に乗っかるのがむかーしから大好きだったよな」
満面の笑みでケビンが言うのだ。
「あ、それ言っちゃだめだって」
琥太が指をパチン、と鳴らしケビンを諌める。
「鬼！　悪魔！　クソデブ！」
と貫太がまだされてもいないのに琥太をパッシングするのを聞き、

「おっと？ 今のは僕に喧嘩を売ったってことで良いね？ お父さん、明日家戻ったら貫太君を可愛がって良いですよね？」
琥太の笑顔の問いかけに、「うんもちろん」　父の返事は速かった。
「嘘！ 親父俺死んじゃう！」
貫太の命乞いに対しても、
「他の武道を学べるなんてお前はもっと自分の幸せを自覚した方が良いね」
とバッサリだった。
「……ふ」
まだ続く貫太の悪あがきとそれに対する琥太やケビンのやり取りの応酬を見聞きして鼻で笑っているだけの私だったが、
「柚眞も明日は課外終わった後時間があるでしょう？ 琥太君たちの応援に行ってあげてはどうですか？」
片付けの一段落した母が唐突に切り出した。いつもはピアノの練習の為に断り続けているものだったが、
「良いね！ 是非来てよ！」
と馬鹿面で喜ぶ琥太を見てるとイライラしてしまい、
『明日午後から友達と遊びに行くの』

と返事をした。
「そ、そっか〜……」
一気にトーンダウンする琥太を見て、
「いや姉貴それ嘘でしょ」
助け舟を出すつもりなのか貫太が食い下がってきた。
「姉貴今日の朝言ってたじゃん。明日は課外終わったら暇って。そんでじゃあ応援行こうぜって言ったらイダダダダダダダダダ！」
貫太の頬を力いっぱいに引きちぎるようにして痛めつける。そんな私に琥太の目線が刺さる。別段責めるような目つきではない。
「……」
まるで仔犬か何かのように無言で、身体つき的に見下ろす形のはずなのに、メチャクチャ見上げるように見つめてくる。めんどくさい目つきだまったく！
「じゃあ決まりだね」
「明日は全国大会。頑張ってくださいね！」
という両親の言葉でこの話題は幕を閉じた。私としては男臭い、ふんどしだらけの舞台へと足を向けること自体気が進まない。そもそも相撲自体、私は嫌いだ。
けど、折角ピアノが禁じられた訳であって。今まで伝聞でしか伝わってこなかった

幼馴染の事を自分の目で見ることができるチャンスである訳であって。私は琥太にこう返事をした。

『気が向いたら行ってあげないこともないかな』

あいつは、確定でも何でもない返事を受けただけなのに、飛び上がらんかのように目をキラキラさせて屈託無く笑って言うのだ。

「うん！ 勝ち進んで待ってるね！」

なんて。まるで幼子か、いや、犬かと返してまた筆談機の餌食にしたい気持ちが一度脳を駆け巡ったが、それが運動神経に指示を出す前に、それを止める指示を出すことができた。試合前日にそういうことをする程、無神経でもない。

次の日、試合当日だというのにあいつは家を出る私をいつものように見送った。

その日の午後、私が国技館に入り最初に見た光景は、数多の歓声の中、いつものような雰囲気の中で勝ち名乗りを受ける琥太の姿だった。

――連載第三回『渋柿騒動』へ続く

暴力論　第二回

光枝初郎

第二回からいきなり主テーマの「暴力」とは離れることをお詫びしたい。今回は、ドゥルーズの哲学についての話題である。

器官なき身体と存立平面　準備考察

問題設定―器官なき身体―両者の関係―存立平面―結論

第一節　問題設定

本論では、「器官なき身体と存立平面はどのような関係にあるのか」を明らかにする。「器官なき身体」も「存立平面」も、共にドゥルーズ（＝ガタリ）が示した著名な概念である。しかしその両者が具体的にどのような関係で位置づけられているかということについては、必ずしも理解されていないように思われる。その理由としては、そもそもこの二つの概念の把握そのものが難しいということが挙げられる。「器官な

き身体」という言葉は『意味の論理学』[1]において初めて登場し、その後フェリックス・ガタリとともに書かれた『アンチ・オイディプス』[2]と『千のプラトー』[3]で内実が広大に語られた。後にも述べるように彼らは決してこの言葉を一義的には使用していないため、現在に至っても論者によってその意味するところはまちまちである。「存立平面」は「内在平面」や「構成平面」とも言いかえられ、『千のプラトー』において登場し、『哲学とは何か』[4]でも引き続き内容が語られている。「存立平面」はドゥルーズ哲学を体系的に理解しようとする時の一番の重要ワードであるように私には思われるが、その理解が難しいのは『哲学とは何か』への参照がまだ十分にされているとは言い難い現在の研究状況も影響している。

「器官なき身体」と「存立平面」の内実をそれぞれ明らかにしたうえで両者の関係を浮かび上がらせる方法が一つには考えられるが、本論では第二節で『アンチ・オイディプス』期の「器官なき身体」を先に確認し、それから両者の関係が述べられる『千

---

[1] ドゥルーズ著、岡田弘／宇波彰訳（法政大学出版局）、1987年。
[2] ドゥルーズ＝ガタリ著、市倉宏祐訳（河出書房新社）、1986年。
[3] ドゥルーズ＝ガタリ著、宇野邦一、小沢秋広他訳（河出書房新社）、1994年。
[4] ドゥルーズ＝ガタリ著、財津理訳（河出書房新社）、1997年。

のプラトー』を第三節において確認したうえではじめて、第四節で後期ドゥルーズが切り開いた「(存立)平面」の論理を述べる。結論においてその記述順序の理由が明らかにされるだろう。

第二節　器官なき身体

『アンチ・オイディプス』の第一章は「欲望する諸機械」であるが、ドゥルーズ＝ガタリは世界の記述において、欲望の生産といった一元的な捉え方を提出する。その彼らの世界観は次のセンテンスに要約されている。

> 欲望する諸機械は二項機械であり、二項規則(つまり、連合的体制)の下にある機械である。ひとつの機械は常に他の機械と連結している。生産的総合(すなわち、生産の生産)は、「これと」(et)「これの次にあれ」(et plus…)という接続的な形態をもって作動する。ということは、ここには常に流れを生産する機械と、この機械に接続されてこの流れを切断し採取する働きをするもうひとつの機械とが存在するのである。[5]

[5] 『アンチ・オイディプス』pp.17。

ここでいう欲望は、あるものとあるものをつなぐ、「連合的体制」のもとでの作動原因である。そして、例えば私たち人間のような有機的身体は、この連合的体制の下において、上手く機能する限りにおいて「生ける身体」として世界を過ごす。ここでポイントは、「生ける身体」が何か肯定的でそれも生をポジティヴに捉えたかのようなものを指しているということである。そして、それとは別に、とこの哲学者たちは続ける。この連合的体制のもとでは、「死の本能」も同時に作動する（「死の本能、これがこの身体の名前である。」[6]）。欲望の生産は、自らの過剰性そのものによって、「反生産（anti-production）」を生み出す。こうして、器官の正常な作動によって自らの生を謳歌する身体とともに、押しつけられた器官に苦しみ、器官の不調においてうめき声をあげる「器官なき身体」が生産されることになる。「器官なき身体」の様子をみてみよう。

器官なき身体は、諸々の器官の下に忌まわしい幼生や幼虫を感じ取り、有機的組織化によってこの身体を台無しにし、窒息させる神の行為を嗅ぎつける。「身体は身

6 『アンチ・オイディプス』pp.20。

体だ／身体はそれだけであり／器官など必要としない／身体はけっして有機体ではない／有機体とは身体の敵なのだ」。その肉にはこれほどまでに釘が打ち込まれ、これほどまでの責め苦を味わっている。器官機械に向けて、器官なき身体は滑らかで不透明で張りつめた自らの表面を対抗させるのである。[7]

「器官なき身体」の名前が死の本能であるというのは、『アンチ・オイディプス』において述べられたことである。私たちは後の『千のプラトー』においてそれがもう少し複雑な議論になることを確認するのであるが、ひとまずここでは「器官なき身体」は時に否定的なニュアンスを持つ「死」という出来事と隣り合わせであることを理解すればよい[8]。

第三節　両者の関係

「器官なき身体」と「存立平面」との概念の交錯が本格的に論じられるのは、『千

[7] 『アンチ・オイディプス』pp.20。
[8] 小林徹『経験と出来事　メルロ＝ポンティとドゥルーズにおける身体の哲学』（水声社、2014）pp.205 も参照。

のプラトー』の第六章「一九四七年十一月二十八日――いかにして器官なき身体を獲得するか」である。しかしここで何よりも確認しておきたいのは、「器官なき身体」という概念が『アンチ・オイディプス』期よりもはるかに発展しているということである。それはこのタイトルからも伺えるし、次のようなセンテンスにドゥルーズ＝ガタリの問題設定を読み取ることができよう。

針で縫われ、ガラス状になり、緊張症になり、吸い込まれてしまう身体のこの陰惨な行列は、何ゆえなのだろうか。器官なき身体は、快活さ、恍惚、舞踏にも満ちているはずではないか。なぜこのような例ばかり見、なぜこうした例を通過しなければならないのか。満ち足りているのではなく、空っぽになった身体たち。いったい何が起きてしまったのか。〟

「死」という出来事と常に隣り合わせである「器官なき身体」を私たちが獲得しようとするのは、大変困難なのである。「死の本能」によって突き動かされるその身体は、苦痛に満ち、陰鬱、非情、惨劇である。ここから、ドゥルーズ＝ガタリは器官な

〟『千のプラトー』pp.174。

き身体にも幾つかの区別があることを発見する。

次のような区別を設けよう。

（一）タイプ、種類、実体的属性として区分される器官なき身体、例えば麻薬による器官なき身体の寒冷、マゾヒストの器官なき身体の責苦。それぞれが産出の原則として零度をもっている。これは減退（remissio）である。

（二）それぞれのタイプの器官なき身体に発生する事柄、つまり様態、産み出される強度、器官なき身体を貫く波と振動。これは度合（latitudo）である。

（三）あらゆる器官なき身体が場合によって形成する全体、存立平面。これは実在性の全体（omnitudo）であり、これ自体が器官なき身体と呼ばれることもある。[10]

（傍点筆者）

注意すべき類型は（一）のタイプである。ドゥルーズ＝ガタリはヒポコンデリーの身体、パラノイアの身体、分裂症の身体、麻薬中毒者の身体、マゾヒストの身体を挙げているが、それぞれはこの区別（一）のタイプの「器官なき身体」であると考えら

[10] 『千のプラトー』pp.181。

れる。それらについて彼らは次のような診断を下すに至る。

有機体と呼ばれる器官の組織に対立する器官なき身体があるのは確かだが、この地層そのものに属する有機体の器官なき身体も存在する。癌組織がそれだ。刻一刻、細胞は癌となり、狂気となり、増殖し、形態を失い、すべてを食いつくしてしまう。有機体はこの細胞を元に戻し、再び地層化しなければならない。それは、自分が生き延びるためだけでなく、有機体の外へと逃走するため、存立平面の上に「別の」器官なき身体を作るためにも必要なのだ。[二]（傍点筆者）

第二節の引用でも分かるように器官なき身体の最大の特徴は「有機体組織を敵とする」ことなのであるが、器官なき身体の運動の方法を間違えてしまうとそれは癌組織となり己の死に至る。こうした身体をドゥルーズ＝ガタリは地層化といった用語で説明する。器官なき身体といえども、道徳や有機体組織の渦である地層の運動に巻き込まれてしまい、するとそれは彼らが目指したような身体の在り方でなくなるのだ。（一）のタイプの器官なき身体は避けられなければならない。ではどうすればよいか。

二　『千のプラトー』pp.187。

ヒントは区別の（三）にある。ここにおいて器官なき身体と存立平面との関係が初めて語られるのであるが、ここで存立平面の構成要素として配置されている器官なき身体は、区別（一）の身体とは別ものだと考えなければならない。「存立平面は、あらゆる器官なき身体の集合、純粋な内在性多様性であ」[12]る。このとき、ドゥルーズ＝ガタリは〈器官なき身体たち＝存立平面〉とでもいったようなものを構想している。

それぞれの器官なき身体が存立平面を構成している限りにおいて、「器官なき身体は卵である。……卵は純粋な強度の場であり、内包的空間であって、外延的延長ではない。清算の原理としての強度零である」[13]。ここで述べられている強度とは事物が有する強さの度合のことであり、その質的差異のぶんだけ事物の多様性が在る。そのとき、そうした強度そのものを産出する器官なき身体は、事物そのものの構成原理なのである。

私たちは今や、身体の論理から、存立平面の論理に移らなければならない。強度を産出する器官なき身体によって構成される存立平面とは、果たしていかなるものなのだろうか。

---

12 『千のプラトー』pp.181。
13 『千のプラトー』pp.188。

第四節　存立平面

『哲学とは何か』からはじめよう。

概念とは、いわば上昇したり下降したりする多様な波であるが、内在平面（plan d'immanence）は、それらを巻きこんだり繰り広げたりする唯一の波である。（中略）エピクロスからスピノザにかけて（『エチカ』の驚嘆すべき第五部……）、スピノザからミショーにかけて、思考に関する問題は無現速度にある。しかし無現速度は、それ自身において無限に運動する一つの環境を必要としている。つまり平面、真空、地平を必要としているのだ。必要なのは概念の弾性であり、さらに環境の流動性である。それら二つが、われわれがそれであるところの「減速した存在（etres lents）」を構成するために必要なのである。[14]

「減速」した存在とはどういうことだろうか。小林徹の整理[15]によると、ドゥルー

14　『哲学とは何か』pp.54。

15　小林『経験と出来事』pp.283-98。

ズは詩人のアンリ・ミショーの一連のテクストを論じながら独自の速度論をここで打ち出していることになる。

ミショーは自身によるメスカリン注射の実験で、自己の意識の変容への驚異的な試みをする。例えば次のくだりである。

人間的なものの中にではなく、ある種の熱狂した機械的な攪乱装置の中に、練圧―粉砕―破砕装置の中に捉えられた。工場の中の金属素材のように、水カタービンの中の水のように、送風機の中の風のように、自動砕木機の中の木の根のように、歯車の歯を刻む鉄鋼のフライス盤の倦むことなき運動の下に置かれた鉄のように扱われた。（中略）恐怖はとりわけ、私が一本の線にすぎないということだった。ここではただ、一本の線だ。無数の収差に折り曲げられる一本の線だ。[16]（傍点筆者）

ミショーは自分が一本の線になるという恐るべき状況に立ち囲まれ、いよいよ危機に陥るが、その後「手が旅行用ひざ掛けに触れた瞬間、柔らかく暖かい感覚が甦る」

[16] アンリ・ミショー『精神の大試練』の一部であるが、小林『経験と出来事』pp.279 の訳を引用して代えた。

ことを覚える。事態は休息していく。この一連の出来事を、ミショーは精神の試練として、つまり精神＝思考が飛躍するためにメスカリン実験を行ったその意義について、ドゥルーズは思考していく。いや、むしろ彼は思考が思考であるための一切の条件を思考していくのだ（思考の思考）。

「哲学とは概念の創出である」とは『哲学とは何か』の有名な一句であるが、その概念は常に新しさと新鮮さに満ちた経験を経なければならない。しかし、それは常に危険と隣り合わせである。そう、「死の本能」に裏打ちされたあの「器官なき身体」の経験のように。麻薬中毒者の苦しみや、マゾヒストの抱える痛み、そしてミショーのメスカリン実験による極度の恐怖。しかし、ドゥルーズはここでちょっと待てというのである。すなわち、「減速」せよ、と。私たちが思考を、精神を試練にかけるとき、私たちはあくまで「速度の主人」でなければならないのだ。思考のリズムをうまくコントロールできなければならないのである。

何かを描くためには、恐怖に満ちた〈線〉の絶対的速度の中で減速し、反転し、そこから「微細な肉」を構成するに足るだけの何かを持ちかえらねばならないのである。「速度の主人」に留まるということは、「小さな領地」を切り開き、滑らかな〈平面〉を構成することであり、この〈平面〉の上で、はじめて作家／画家は自らの線

を引くことができるのである。[17]

そのときはじめて「存立平面」という巨大な立体が顔をのぞかせる。もはや世界にはこの無現速度の源泉たる、広大な平面しかない。その平面があって、私たち人間＝自らの生に幾つもの線を引いたり消したりする画家は、すべてのことを為すことができるのである。

『千のプラトー』では、ドゥルーズ＝ガタリは確かにこのことを予告していた。しかし、そのとき器官なき身体たち＝存立平面は、あくまで多様性としての事物の産出原理であったように思われる。今や、『哲学とは何か』において、「死の本能」をちらつかせた「器官なき身体」は後退し、あるのは事物だけでなく事物が「速度の主人」とさえもなるためのその究極の「場所＝環境」だけとなったのだ。

結論　器官なき身体から存立平面へ

「器官なき身体と存立平面はどのような関係にあるか」。結論は以下の通りである。器官なき身体とは、多様性としての事物、事物の多様性そのものの一切の産出の源泉

[17] 小林『経験と出来事』pp.284-5。

である。その器官なき身体が幾つも集まって構成されるのが存立平面である。しかし、存立平面は、もはや事物の多様性を超えて、事物、私たちが「速度の主人」たることをも充実させる一切のフラクタルな場である。この場において私たち＝世界内存在は、己の生を彩るものとしての作家／画家たりえる。『千のプラトー』は一九八十年、『哲学とは何か』は一九九一年に書かれたが、私たちはここにおいて「器官なき身体から存立平面へ」ドゥルーズの思考の焦点が移動するのを確認することによって、彼が特異な平面論と速度論を打ち出していったのが理解できよう。

（了）

他　参考文献

江川隆男『アンチ・モラリア　〈器官なき身体〉の哲学』（河出書房新社、2014）

記

録

◇『Li-tweet』2014 秋号合評会

①

ホスト：6　日程：11月9日（日）20時～【終了】

小説「浸入」（10枚）：深街ゆか

小説「ジェイコブの部屋」（24枚）：小野寺那仁

詩「モスリン」：安部孝作

②

ホスト：イコ　日程：10月26日（日）20時～【終了】

小説「ビートを鳴らせ」（13枚）：あんな

小説「鈍行にて」（24枚）：新嶋樹

レビュー「アレクサンドリア読解」（7枚）：あき

③

ホスト：ふかまち　日程：11月16日（日）20時～【終了】

詩「しおん」：とーい

小説「白い家」(25枚)第一回:aya
小説「マイ・フーリッシュ・ハート」第一回(15枚):る

◇12月定例会

日時:12月14日(日)20時～【終了】

場所:skypeグループチャット

内容:①冬号の原稿提出確認
②校正担当割り振り
③秘密の質問コーナー

★今年最後の定例会です。

◇朗読祭り

日時:12月28日(日)19時～【終了】

場所:skype 通話

内容:最初に各自何本読みたいか(5本以上あれば無限に、とする)を明言し、読んだ人が次の人を指名、というシステムでいこうと思っています。読むのは何でもよい です。マンガでもツイートでもちゃんスレでもスワヒリ語でも、ていうかそれ言語じゃねえというのでも！用意しといたの全部読めない、ということもあり得 るかと思いますが、その点はご了承ください(^_^)

◇新年会

日時:1月2日(金)19時～**【終了】**

場所:Skype通話

内容:

新年会、参加メンバーが一人抜け、また一人抜け、宴も酣となったこの時、突如として新企画が立ち上がった、その名も……！

『重　量　級　文　学　読　書　会』

つけ麺のような、腹にズシンとくる文学を、われわれは求めている！　夏の夜、流れる汗を忘れるような読書をしようではないか！

詳細は追ってお知らせしよう！　果報は寝て待て！

◇新入部員

山田さん（8月13日入部）

Naokona Jellyfish さん（11月21日入部）

編集後記

はい、編集後記です。ここは編集後記です。編集後記の冒頭から少しすすんだ場所にあります。知ってましたか？　そのうち、もうちょっと進んだ場所に入り、そのあとは、かなり進んだ場所に入ってから、最後の「。」が打たれることでしょう、これは予測でしかありませんが。

それから、これも確かなことは言えないのですが、このあとにはわたしの、わたしというのは、一部でPさんと呼ばれている一群の男の集合のことですが、わたしが、ウェブ文芸誌であるところの「Li-tweet」にかかわってきた上での（実はここも編集後記です）楽しかったこととか、逆に胃が捻れる思いをしたこととか、三半規管が四半規管か六と四分の一規管になりそうに思ったこととか、その二つと逆で何とも思わなかった通過者としての存在でしかなかったこととかが、唐突めいて書かれていくかもしれません。

（三半規管は車では使うことの出来ないステアリングの形をしています）

みなさんは、ご自身の絨毛をしげしげと眺めたことはありますか？　今号では再び、前に編集員として関わらせて頂いた時に行った「アンケート」をやらせていただきました。それを短く呼ばなければならない人達の間では「アンケ」なんていう風に呼ばれていたり、します。したがって（しかし）、「アンケを取る」を早口でいってしまうと、「アンケート」と似たような発音に、なってしまいますね？

（アンケート企画や、その他の企画など、そんなに目新しくはないものの、少しだけ新しいことをしてみて、部員相互の交流に少しは役立っただろうか、という旨のことをゴニョゴニョとつぶやいている声が、耳の内側の側頭葉のあたりから聞こえてくる、が、語順もメチャクチャだし、明確な単語になっていない）

わたしは今１０メートルくらいの高さのヤシの木の上で、同じくヤシの葉を細かくさいて自分で編んだハンモックに揺られていて、蓄音機でチェンバロの曲を流しながら部員の作品を読んでいます。

蓄音機は、ディジタルの冷たい音とは違い、音をそのまま形にし、それを復た音に直すので、非常に温かみのある良い音が鳴ります。まだそれほどちゃんとは読めていないのですが、たとえば校正で関わった作品など、かなり引き込まれるものがありました。こういった作品を読むことが出来たということだけでも、良かったと思います。

遠くの海に陽が完全に没するまでに、総て読み了えたいと思っています。ここは編集後記です。

それから、次回予告をします。

次にPさんが編集長となるLi-tweet（が避けがたくありそうな気がするので）、特集は、「遠近法（仮）」です。

距離とは何かをめぐる作品を募集します。

次号Li-tweetの編集長は、どなたか別の部員の方がやることになるでしょう。

そろそろ、編集後記が終わろうとしています。が、まだ終わってはいないです。

じきに終わりますが、ここは終わる手前です。もうすぐ終わります。あ、今、終わりました。まる。

Pさん（独身、２８）

Li—tweet 冬号

発行日
平成二十七年一月七日

編集長
Ｐさん（独身、２８）

編集委員
崎本智（６）、新嶋樹（イコ）、

発行者
twitter 文芸部
ツイッターオフィシャルアカウント
https://twitter.com/twibun
ホームページ
http://twibun.jimdo.com/

表紙デザイン
Akila
まとめＰＤＦ作成
小野寺那仁
Ｐさん（独身、２８）

本誌はホームページに掲載している「Li—tweet 秋号」をプリント用、電子書籍端末用に編集し直した物です。記事の無断掲載を禁じます。
© twitter bungeibu ２０１４

Twitter 文芸部